

北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡

－県道小挾間大分線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2014

大分県教育庁埋蔵文化財センター

北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡



2014

大分県教育庁埋蔵文化財センター



県道小扶間大分線と北屋敷ツル遺跡（奥）と由布川小学校遺跡Ⅲ区（手前）



北屋敷ツル遺跡 東半分空中写真



北屋敷ツル遺跡 2号溝と周辺写真



石風呂遺跡 I区から西方向を望む



石風呂遺跡 I区から東方向を望む



由布川小学校遺跡 I・II区全景



由布川小学校遺跡 IV区全景

序 文

本書は大分県教育委員会が、県土木建築部の依頼を受けて実施した県道小挾間大分線道路改良工事に伴う北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡の発掘調査報告書です。

遺跡の所在する由布市挾間町は由布山・黒岳などに源流を発する大分川流域に位置します。由布市は、古代以来、国府・府中・府内と呼ばれ名を変えながら、豊後国の政治経済の中心地として、重要な役割を果たしてきた大分市に隣接するため、重要遺跡が数多く分布します。

本書で報告する3遺跡の調査では、弥生時代から古墳時代にかけての集落の一部を明らかにすることができました。この時代は低湿地で水田稲作が始まり、栽培技術の発達とともに水田開発を広げ、やがて地域の有力者が出現する、日本の歴史の中でも注目される時期です。これら3遺跡は、当該地域におけるこの間の状況の一端を知ることができました。

本書が、埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成26年3月31日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所 長 宮 内 克 己

例 言

1. 本報告書は、大分県教育委員会が平成6・7年度に実施した、県道小挾間大分線道路改良工事に伴う、北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分県土木建築部の依頼を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 遺物や記録類の整理作業は、大分県教育庁埋蔵文化財センター（以下センターという）で実施した。
4. 出土遺物及び関係資料は、センターで保管している。
5. 本書で使用了地形図（1/25,000）は国土地理院作成のものを利用した。
6. 本書の執筆・編集は、センター嘱託坂本嘉弘が担当した。

目 次

序文	
例言	
第1章 はじめに	
第1節 調査の経過	1
第2節 調査の体制	2
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 北屋敷ツル遺跡	
第1節 調査の方法と遺跡の概要	5
第2節 調査の成果	7
第3節 結語	82
第4章 石風呂遺跡	
第1節 調査の方法と遺跡の概要	83
第2節 調査の成果	84
第3節 結語	91
第5章 由布川小学校遺跡	
第1節 調査の方法と遺跡の概要	92
第2節 調査の成果	93
第3節 結語	117
第6章 総括	
第1節 出土土器の分類	118
第2節 出土土器の編年	124
第3節 大分川中流域の弥生時代から古墳時代の集落の変遷	127
遺物一覧表	132
写真図版	145
報告書抄録	157

挿 図 目 次

第1章

第1図	県道小快間大分線と調査遺跡位置図 ……	2
-----	---------------------	---

第2章

第2図	由布川小学校遺跡・北屋敷ツル遺跡 ・石風呂遺跡と周辺の遺跡 ……	3
-----	-------------------------------------	---

第3章

第3図	北屋敷ツル遺跡全体図 ……	6
第4図	北屋敷ツル遺跡出土縄文土器① ……	8
第5図	北屋敷ツル遺跡出土縄文土器② ……	9
第6図	北屋敷ツル遺跡1号住居跡出土遺物 ……	10
第7図	北屋敷ツル遺跡2号住居跡実測図 ……	11
第8図	北屋敷ツル遺跡2号住居跡出土遺物 ……	12
第9図	北屋敷ツル遺跡3号住居跡実測図 ……	13
第10図	北屋敷ツル遺跡3号住居跡出土遺物① ……	13
第11図	北屋敷ツル遺跡3号住居跡出土遺物② ……	14
第12図	北屋敷ツル遺跡4号住居跡実測図 ……	15
第13図	北屋敷ツル遺跡5号住居跡実測図 ……	15
第14図	北屋敷ツル遺跡5号住居跡出土遺物① ……	16
第15図	北屋敷ツル遺跡5号住居跡出土遺物② ……	17
第16図	北屋敷ツル遺跡6号住居跡実測図 ……	17
第17図	北屋敷ツル遺跡6号住居跡出土遺物 ……	18
第18図	北屋敷ツル遺跡7号住居跡実測図 ……	19
第19図	北屋敷ツル遺跡1号土坑実測図 ……	19
第20図	北屋敷ツル遺跡2号土坑実測図 ……	20
第21図	北屋敷ツル遺跡5号土坑実測図 ……	20
第22図	北屋敷ツル遺跡各土坑出土遺物 ……	21
第23図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物① ……	24
第24図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物② ……	25
第25図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物③ ……	26
第26図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物④ ……	27
第27図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑤ ……	28
第28図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑥ ……	29
第29図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑦ ……	30
第30図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑧ ……	31
第31図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ ……	32
第32図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑩ ……	33
第33図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑪ ……	34
第34図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑫ ……	35
第35図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑬ ……	36
第36図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑭ ……	37
第37図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑮ ……	39
第38図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑯ ……	40
第39図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑰ ……	41
第40図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑱ ……	42

第4章

第79図	石風呂遺跡調査区全体図 ……	83
第80図	石風呂遺跡1・2区遺構分布図 ……	84
第81図	石風呂遺跡3・4区遺構分布図 ……	85
第82図	石風呂遺跡1号住居跡実測図 ……	86
第83図	石風呂遺跡2号住居跡実測図 ……	86
第84図	石風呂遺跡3号住居跡実測図 ……	87

第41図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉑ ……	43
第42図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉒ ……	44
第43図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉓ ……	45
第44図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉔ ……	46
第45図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉕ ……	47
第46図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉖ ……	48
第47図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉗ ……	49
第48図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉘ ……	50
第49図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉙ ……	51
第50図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉚ ……	52
第51図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉛ ……	53
第52図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉜ ……	54
第53図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉝ ……	55
第54図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉞ ……	56
第55図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉟ ……	57
第56図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊱ ……	58
第57図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊲ ……	59
第58図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊳ ……	60
第59図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊴ ……	61
第60図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊵ ……	62
第61図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊶ ……	63
第62図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊷ ……	64
第63図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊸ ……	65
第64図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊹ ……	66
第65図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊺ ……	67
第66図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊻ ……	68
第67図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊼ ……	69
第68図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊽ ……	70
第69図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊾ ……	71
第70図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊿ ……	72
第71図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物① ……	73
第72図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物② ……	74
第73図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物③ ……	75
第74図	北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物④ ……	76
第75図	北屋敷ツル遺跡各地区出土遺物① ……	78
第76図	北屋敷ツル遺跡各地区出土遺物② ……	79
第77図	北屋敷ツル遺跡各地区出土遺物③ ……	80
第78図	北屋敷ツル遺跡各地区出土遺物④ ……	81

第85図	石風呂遺跡土坑実測図 ……	87
第86図	石風呂遺跡土坑出土遺物 ……	88
第87図	石風呂遺跡 妻棺墓実測図 ……	88
第88図	石風呂遺跡 妻棺実測図 ……	89
第89図	石風呂遺跡出土器 ……	90
第90図	石風呂遺跡出土遺物② ……	91

第5章

第91図	由布川小学校遺跡調査区位置図	92
第92図	由布川小学校遺跡Ⅰ区全体図	93
第93図	由布川小学校遺跡Ⅰ区出土遺物(1)	94
第94図	由布川小学校遺跡Ⅰ区出土遺物(2)	95
第95図	由布川小学校遺跡Ⅰ区出土遺物(3)	96
第97図	由布川小学校遺跡Ⅱ区遺構分布図実測図	97～98
第96図	由布川小学校遺跡Ⅱ区建物1実測図	99
第98図	由布川小学校遺跡Ⅱ区建物2実測図	100
第99図	由布川小学校遺跡Ⅱ区建物3実測図	101
第100図	由布川小学校遺跡Ⅱ区建物4実測図	102
第101図	由布川小学校遺跡Ⅱ区建物5実測図	102
第102図	由布川小学校遺跡Ⅱ区建物6実測図	103
第103図	由布川小学校遺跡Ⅱ区建物7実測図	103
第104図	由布川小学校遺跡Ⅱ区出土遺物	104

第6章

第117図	北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川 小学校遺跡出土土器分類図1)	119
第118図	北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川 小学校遺跡出土土器分類図2)	120
第119図	北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川 小学校遺跡出土土器分類図3)	121

第105図	由布川小学校遺跡Ⅲ区全体図	105
第106図	由布川小学校遺跡Ⅲ区出土遺物①	106
第107図	由布川小学校遺跡Ⅲ区出土遺物②	107
第108図	由布川小学校遺跡Ⅳ区1号住居跡出土遺物	108
第109図	由布川小学校遺跡Ⅳ区2号住居跡出土遺物	108
第110図	由布川小学校遺跡Ⅳ区4号住居跡出土遺物	111
第111図	由布川小学校遺跡Ⅳ区5・9号住居跡出土遺物	112
第112図	由布川小学校遺跡Ⅳ区竪穴遺構出土遺物	113
第113図	由布川小学校遺跡Ⅳ区甕棺墓実測図	114
第114図	由布川小学校遺跡Ⅳ区1号甕棺①	114
第115図	由布川小学校遺跡Ⅳ区2号甕棺②	115
第116図	由布川小学校遺跡Ⅳ区出土遺物	116

第120図	北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川 小学校遺跡出土土器編年	125
第121図	由布川小学校遺跡・北屋敷ツル遺跡 ・石風呂遺跡と周辺の地形	127
第122図	大分平野西城の弥生時代後期から 古墳時代前期の集落と古墳	129

表 目 次

第1表	北屋敷ツル遺跡遺物観察表-土器-①	・132
第2表	北屋敷ツル遺跡遺物観察表-土器-②	・133
第3表	北屋敷ツル遺跡遺物観察表-土器-③	・134
第4表	北屋敷ツル遺跡遺物観察表-土器-④	・135
第5表	北屋敷ツル遺跡遺物観察表-土器-⑤	・136
第6表	北屋敷ツル遺跡遺物観察表-土器-⑥	・137
第7表	北屋敷ツル遺跡遺物観察表-土器-⑦	・138
第8表	北屋敷ツル遺跡遺物観察表-土器-⑧	・139

第9表	北屋敷ツル遺跡遺物観察表-土器-⑨	・140
第10表	北屋敷ツル遺跡遺物観察表-土器-⑩	・141
第11表	北屋敷ツル遺跡遺物観察表-土器-⑪	・142
表12表	石風呂遺跡遺物観察表-土器	・142
表13表	由布川小学校遺跡遺物観察表-土器・陶磁器	・143
第14表	北屋敷ツル遺跡遺物観察表-石器・鉄器・その他	・144
表15表	石風呂遺跡遺物観察表-石器	・144
表16表	由布川小学校遺跡遺物観察表-石器・鉄器	・144

写 真 図 版 目 次

巻頭カラー図版

巻頭カラー1	県道小快間大分線と 由布川小学校遺跡地
巻頭カラー2	北屋敷ツル遺跡東半分空中写真 北屋敷ツル遺跡2号溝と周辺

巻頭カラー3	石風呂遺跡1区から西方向を望む 石風呂遺跡1区から東方向を望む
巻頭カラー4	由布川小学校遺跡Ⅰ・Ⅱ区全景 由布川小学校遺跡Ⅳ区全景

第3章

北屋敷ツル遺跡	2号溝遺物出土状況	・22
---------	-----------	-----

第5章

由布川小学校遺跡	住居跡①	・108
----------	------	------

写真図版

写真図版1	北屋敷ツル遺跡1号住居	・145
	北屋敷ツル遺跡2号住居	
	北屋敷ツル遺跡3号住居	
写真図版2	北屋敷ツル遺跡4号住居	・146
	北屋敷ツル遺跡5号住居	
	北屋敷ツル遺跡6号住居	
写真図版3	北屋敷ツル遺跡2号溝検出状況	・147
	北屋敷ツル遺跡2号溝完掘状況	
	北屋敷ツル遺跡2号溝土層断面	
写真図版4	出土土器1号住居23・5号住居50	・148
	2号溝107・2号溝108	
	2号溝110・2号溝133	
写真図版5	出土土器2号溝138・2号溝161	・149
	2号溝216・2号溝217	
	2号溝218・2号溝222	
写真図版6	出土土器2号溝261・2号溝263	・150
	2号溝273・2号溝276	
	2号溝280・2号溝282	
	2号溝283	
写真図版7	出土土器2号溝289・2号溝294	・151
	2号溝295・2号溝298	
	2号溝346・2号溝358	
	2号溝304・2号溝305	
	2号溝369・2号溝388	
	2号溝379	

由布川小学校遺跡	住居跡②	
----------	------	--

写真図版8	石風呂遺跡調査状況	・152
	石風呂遺跡寒館出土状況	
	出土土器上壺2・下壺3	
写真図版9	由布川小学校遺跡Ⅱ区	・153
	由布川小学校遺跡Ⅱ区の建物遺構と溝	
	由布川小学校遺跡Ⅲ区全景	
写真図版10	由布川小学校遺跡Ⅳ区全景	・154
	由布川小学校遺跡Ⅳ区住居跡調査状況	
	由布川小学校遺跡Ⅳ区住居跡完掘状況	
写真図版11	由布川小学校遺跡Ⅳ区寒館検出状況	・155
	出土土器上壺54・下壺53	
	下壺55	
写真図版12	出土遺物1号住35・1号住36	・156
	壺穴50 52・4号住47	
	Ⅳ区63・Ⅳ区62	
	Ⅳ区64・Ⅲ区32	
	4号住46	

第1章 はじめに

第1節 調査の経過

1 調査に至る経過

国道小狭間大分線は大分市街地と由布市庄内町小狭間を結ぶ県道である。東の起点は大分市と福岡県久留米市を結ぶ国道210号線が、大分市の中心街の南側に東西に横たわる上野丘陵を貫通させた「大道トンネル」を南に抜けたところで、西方に分岐する場所である。県道は、それから大分川とその支流である賀来川により形成された沖積地の北側の丘陵の裾沿いに続く。そして大分市宮苑で南西に方向を変え、賀来川を渡り、標高約100mの丘陵上に登り、再び方向を西に転じ、山間の道として、由布市庄内町小狭間に続く。

この道路の前身は府内藩の城下町「府内」とその郊外に点在する村々をつなぐ道路であったと考えられ、自然地形に沿って曲がりくねって続く。このため、今日の自動車社会にとって、幅員も狭く、見通しも悪い道路となっている。さらに、1975年の大分大学医学部（当時大分医科大学）の建設や、それに続く、周辺での住宅開発は、人口の増加を招き、この状況に追い打ちをかけ、通勤や通学等の交通の大きな妨げや危険要因となっている。そこで、大分県土木建築部では、こうした状況を改善するために、随時県道小狭間大分線の拡幅やバイパス道路の建設を行っている。

本書で報告する大分県由布市狭間町古野地区も、県道小狭間大分線沿いに家屋が建ち並ぶ集落景観となっていた。ところが、地区の東端に大分大学医学部が開設され、さらに周辺に大型団地が建設されると、この地区及び周辺の地区の住民が急増した。こうした住民の多くは、大分市への通勤通学に、さらに大分大学医学部の通勤・通学・通院を含む関係者もこの道路を利用するしかなかった。そのうえ、集落の北側には由布川小学校があり、小学生の通学路とも一部兼ねる状態となっていた。このように、県道小狭間大分線の中でも古野地区の状況は緊急を要する状況であった。

2 調査の経緯

発掘調査の依頼を受けた県道小狭間大分線の改良工事の区間は、集落内を通る由布市狭間町古野地区であるが、現道の拡幅工事を実施するには家屋の移転等大きな制約が生じる。このため、集落の北側に広がる水田地帯に迂回路を建設することで、交通問題の解決を目指すこととなった。

この時点で、大分県土木建築部と教育庁文化課が協議を行ったところ、この迂回路の東側の起点近くには、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である由布川小学校遺跡が周知されていることがわかった。そこで、文化課は由布川小学校遺跡の試掘・確認調査を平成5年度末の平成6年3月14日から3月23日まで実施した。その結果、厚い黒色土の下から遺構・遺物が確認され、平成6年度に本調査を実施することとなった。

ところが、工事予定地内は、遺跡が立地しそうな地形が数カ所観察され、工事中の遺跡発見を避けるために用地取用状況に応じて試掘調査を実施し、対応することとなった。その結果、約1,000mにわたる工事予定地内の東端に位置する由布川小学校遺跡の他にも、遺構や遺物が出土する場所があることが確認され、東側から北屋敷ツル遺跡、石風呂遺跡と名付け、3カ所の遺跡の発掘調査を実施した。それぞれの遺跡の調査は、平成6年度に由布川小学校遺跡を調査したのを初めとして、平成7年度に石風呂遺跡そして北屋敷ツル遺跡を調査し、平成8年3月に発掘調査は終了した。

遺物整理については、調査終了直後に開始したが、報告書については、平成24年度に着手し平成25年度の刊行となった。この間に調査者の転出や、整理作業場所の転居があり、一部に不明な部分も生じている。本書では、3遺跡の中で最も多くの資料を出土した北屋敷ツル遺跡と、西に連続する石風呂遺跡、さらに浅い窪地を挟んで東に立地する由布川小学校遺跡の順で報告する。

第2節 調査の体制

1 発掘調査

平成6年度

文化課長	末広利人
主幹兼埋蔵文化財第2係長	渋谷忠章
主 査	玉永光洋
嘱 託	長田大輔

平成7年度

文化課長	末広利人
主幹兼埋蔵文化財第2係長	渋谷忠章
主 査	玉永光洋
嘱 託	長田大輔
嘱 託	浜田教靖

2 報告書作成

平成24年度

教育庁埋蔵文化財センター	
所長	山口博文
次長	宮内克己
一般事業班総括	小林昭彦

平成25年度

教育庁埋蔵文化財センター	
所長	宮内克己
次長兼一般事業班総括	小林昭彦
受託事業班 嘱託	坂本嘉弘



第1図 県道小扶間大分線と調査遺跡の位置図

第2章 位置と環境

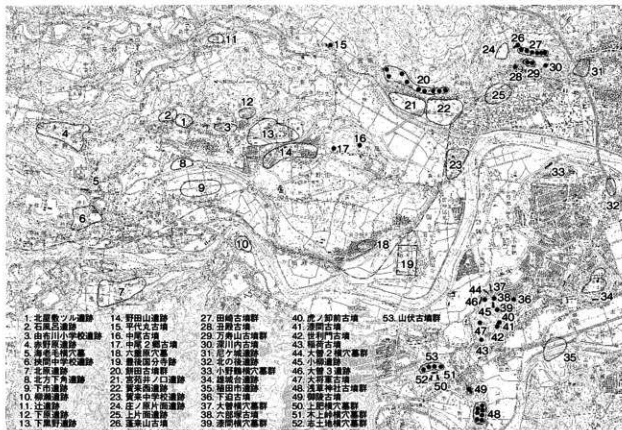
第1節 地理的環境

大分川 北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡は隣接する遺跡で、南を大分川、北を支流の賀
 賀来川に挟まれた東西に長い丘陵上に立地する。この丘陵は、大分川の水源地帯である由布岳（1583
 m）・倉木山（1155m）・雨乞岳（1073m）・鶴見岳（1374m）の山塊から延びる尾根筋の先端部
 近くにあたる。このため、西側の山塊に近いところでは、平坦部の少ない起伏の激しい地形である
 が、遺跡のある周辺からは標高120mから100mの概ね平坦部が広がる台地となっている。

また、台地の南側は、大分川に開折され、北側に向けてえぐるように形成された、盆地状の低地
 河岸段丘 が見え、3～4段の河岸段丘を見ることができる。このため、台地の南側は低地にむけて急斜面
 となっている。さらに、その斜面の断面には河原石を含む礫層が確認される。同様な台地の基盤に
 河原石を含む砂礫層を持つ地形は、大分川の南側のほぼ同じ標高の台地でも観察される。このこと
 から、この台地を含み、周辺の同じ標高の平坦部は、河岸段丘の最高位に当たる可能性が高い。

一方台地の北側は大分川の支流である賀来川が浸食した谷底平野が広がっているが、台地状から
 幾筋の谷川が流れ込んでおり、起伏に富んだ地形となっている。この谷川の源にあたる台地上での
 状況は、緩い窪地となっており、平坦な台地上面に起伏を付けている。

台地を覆う土壌は黒色土で、表土を含み30～40cmが確認される。その下位は黒褐色土が50～60cm
 縄文時代 あり、厚いところで約1mに達するところもある。また、その下位に約10cmの縄文時代早期の遺物
 旧石器時代 包含層である暗褐色土層があり、さらに下位は旧石器時代の遺物包含層である黄褐色土層となっ
 ている。弥生時代以降の遺構面は、この暗褐色土層または黄褐色土層の上面となっている。



第2図 由布川小学校遺跡・北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡と周辺の主要遺跡

第2節 歴史的環境

由布川小学校遺跡・北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡のある由布市挾間町は、大分川本流の河岸段丘の形成された中流域にあたり、これより下流になると、急激に沖積作用を始め沖積平野を形成する。流域から見ると、この地域は、大分川で形成された大分平野と山間地の変換地点とも言える。

大分平野

赤野原遺跡

剥片尖頭器

下黒野遺跡

ナイフ形石器

辻遺跡

野田山遺跡

炉跡・炉穴

森B式土器

瀬戸内系

孔列文土器

勾玉・管玉

水稲耕作

方形袋状貯蔵穴

溝

小型仿製鏡

須恵器

横穴墓

前方後円墳

豊後国分寺

守護職大友氏

龍祥寺

小藩分立

肥後領・府内領

こうした、中石器時代の遺跡は、今回調査した同じ台地上の赤野原遺跡と下黒野遺跡の2カ所がある。前者では剥片尖頭器が採集されているが、後者ではナイフ形石器2点の他、剥片や日田市大山産黒曜石などが出土している。この他、平成4年に調査した大分川の南側台地上の北原遺跡でも2点の角錐状石器と使用痕のある剥片が弥生時代の堅穴遺構に混入して出土している。

縄文時代は、早期の遺跡が挾間町三船の辻遺跡・下黒野遺跡・大分市野田の野田山遺跡で調査されている。特に辻遺跡では集石遺構が、下黒野遺跡では河原石を花卉状に配置した炉跡が、野田山遺跡では炉穴が検出されている。縄文早期の遺跡は標高約100mの河岸段丘上に点在している。縄文時代前期の遺物は、北原遺跡から森B式土器が数点出土している。また縄文時代中期の遺物は北原遺跡・本書の北屋敷ツル遺跡から出土しているが、両遺跡とも出土している土器は瀬戸内系である。この地は、海岸線から離れた大分平野の奥とはいえ、巨視的には瀬戸内海に面しており、その影響を受けていると言える。縄文時代後期になると初頭の土器が北屋敷ツル遺跡、後期後半の遺物が北原遺跡から出土している。さらに晩期の遺物は北原遺跡で前半から後半まで出土しており、北屋敷ツル遺跡や下黒野遺跡では晩期後半の土器が出土している。特に北原遺跡では孔列文土器をはじめ、勾玉・管玉が出土しており注目される。

本格的な水稲耕作が始まる弥生時代になると、大分川下流域の大分平野には弥生前期・中期の遺跡が点在するが、挾間地域では北原遺跡の弥生時代末から古墳時代初めにかけての堅穴遺構内に混在してこの時期の土器が出土している。この地域で集落の拡大を見ることができるのは弥生時代終末から古墳時代前期にかけてである。本書で報告した同じ台地上の遺跡として古野遺跡、由布川小学校遺跡、赤野原遺跡からこの時期の遺物が出土しており、発掘調査した赤野原遺跡からは方形袋状貯蔵穴や方形の袋状貯蔵穴が検出されている。また、大分川南側の台地上の北原遺跡では38基の堅穴住居を調査しており、時期も弥生時代後期末から6世紀に至るまで継続的に営まれていることがわかった。特に弥生時代末から古墳時代初頭の時期には集落を囲むような溝も確認されている。

こうした台地上の遺跡以外にも低段丘上でも遺跡が確認されている。1950年代に調査された挾間中学校のある日向遺跡や1998年に大型店舗建設に伴い調査した北方下角遺跡の他、下市遺跡、大分川に近い鬼崎遺跡などで遺物が採集されている。特に北方下角遺跡では20数軒の堅穴住居が調査され、小型仿製鏡も1面出土している。

古墳時代の遺跡は前述した弥生時代から継続して営まれる集落があり、北原遺跡の最新段階では6世紀代の須恵器が出土している。しかし、古墳時代を象徴する古墳は確認されておらず、7世紀頃と想定される横穴墓が海老毛地区の崖面に現在14基確認できる。その一方、賀来川流域の大分市宮苑には装飾を持つ横穴式石室の古墳や餅田古墳群があり、大分川流域でも由布市挾間町に近接する穂田地区には前方後円墳である御陵古墳をはじめ、5世紀から6世紀にかけての古墳が点在する。こうした古墳時代を背景に、奈良時代になると、本書で報告する台地先端の低位段丘上に豊後国分寺が建立される。国府はさらに約8キロ大分川下流の沖積地に推定されている。しかし、挾間町

では古代の遺跡は確認されていない。

由布市挾間町の中世は大分平野の府中（府内）に守護所を置く、豊後国守護職大友氏の系統を引く挾間氏の拠点となり、大友氏が除国される16世紀末まで続く。その墓所は盆地中央にある龍祥寺と近くにある五輪塔群と伝承されている。江戸時代になると、豊後国は小藩に分立し、由布市挾間町は大分川を境に南を肥後領、北を府内領に分断され、明治維新を迎える。

第3章 北屋敷ツル遺跡

第1節 調査の方法と遺跡の概要

1 調査の方法と経緯

県道小挾間大分線の道路改良工事に伴う発掘調査は、周知遺跡である由布川小学校遺跡内を通過するため、平成5年度に確認調査を行い、平成6年8月から本調査を実施した。ところが、発掘調査中に周辺の道路工事予定地内を踏査すると、遺跡が存在する可能性が強い地形や、遺物の散布地を確認した。そこで、由布川小学校遺跡を調査中の平成6年12月5日から12月7日の間、遺跡の有無を確認するために試掘調査を行った。その結果、3ヶ所は発掘調査が必要な遺跡であることがわかった。

この3ヶ所の名称は、試掘調査時点では、由布川小学校遺跡の連続と考え、Ⅰ～Ⅳ区に続き、Ⅴ区・Ⅵ区・Ⅶ区とした。そして、平成7年度にこれらの3ヶ所を本調査することとした。本調査を実施するにあたり、字図調査と周辺の微地形を観察したところ、Ⅴ・Ⅵ区は字名が石風呂で、Ⅶ区が北屋敷ツルに該当することがわかり、しかも洪積世台地の中でも石風呂地区が西端部、北屋敷ツル地区が南沿いの高台の一部であると区分できた。そこでⅦ区を北屋敷ツル遺跡として本調査することとした。

北屋敷ツル遺跡の調査は平成7年10月16日から開始した。まず、路線内の表土を重機で除去することから始めた。その結果、調査区は標高約100mの台地の中央部が浸食のため窪み南側が高台となっており、調査区は第23図に示したとおり、北側に傾斜する斜面上であることがわかった。このため、調査は南側の斜面上位の部分から開始し、住居跡や溝などを検出し、実測を行うなどしながら、途中で、斜面下位の細長い窪地に近い部分の厚く堆積した黒色土・黒褐色土を数度重機で掘削し、遺構の確認を行った。また、調査区の一部に縄文時代の包含層があることも判明した。

こうして、北屋敷ツル遺跡は約4600㎡を調査し平成8年3月1日で終了した。

2 調査の概要

(1)土層

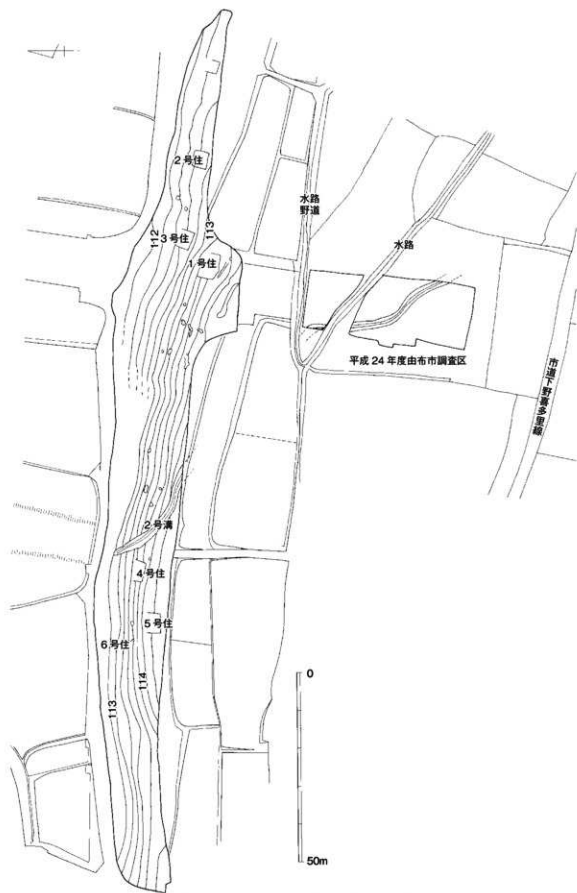
北屋敷ツル遺跡は県道小挾間大分線の路線内を約230mにわたり調査した。しかし、第1図に因示しているように調査区は、由布川小学校遺跡の北側にある東西に細長い窪地が西に延び、この場所まで達しており、この窪地の谷頭に近い位置である。また、調査区の南側は路線に沿って、旧県道小挾間大分線が通る台地上でも最高度の平坦地がある。このため、堆積土は黒色土・黒褐色土を基本とするが、南側の高位平坦部近くが薄く、調査区の斜面の下位に向けて厚さを増し、北側の窪地に近くなるほど厚く、北壁では1m以上の堆積が観察された。

(2)遺構

北屋敷ツル遺跡で検出された遺構は、縄文時代の包含層、古墳時代前期の住居跡や土坑・溝がある。

縄文時代の包含層は、調査区の東端部で確認された。この場所は、南北方向に浅い窪地になっていたようで、厚さ約1mの黒褐色土が堆積し、その上位から縄文土器がまとめて出土した。時期は、縄文時代後期初頭が主体で、後期後半や晩期の遺物も出土した。

また、弥生時代のから古墳時代初頭の住居跡は、竪穴住居が7棟検出された。これらの住居跡は、調査区内で東寄りに4棟、西寄りで3棟の2グループに分かれているが、いずれも斜面地に掘り込まれていたためか、後世の浸食や削平を受け、上部の堆積土が薄くなり、多くは南側の壁のみが確認され、北側の壁が検出できなかつた。この他比較的大型の掘り込みの土坑、小さな掘り込みを柱



第3図 北屋敷ツル遺跡全体図 (1/1000)

柱穴状堅穴 穴状堅穴とするが、調査区中央部付近の南側で多数検出された。
さらに注目される遺構として溝がある。溝は調査区中央の南側、台地高位に近い部分で複数検出されたが、時期や形状が不明確であった。そうした中、2号溝とした遺構は、北側窪地を囲むように弧を描きながら延び、調査区南壁付近で屈曲し、台地最高位方向に向けて続いている。また、北端部は谷状の窪地に向いているが、先端部になるほど浅くなり、途中消えている。遺構の断面はV字状になり、南壁付近では深さ約80cmとなっている。

(3)遺物

遺跡から出土した遺物は、遺構によって傾向が異なる。7棟の住居跡から出土する遺物は、堅穴が埋まっていく段階に、流れ込んだ状態や、窪地となった段階で投棄された状況が見て取れる。その一方2号溝からは、多量の土器が出土した。多くは器種が判別できる状態、又は大型の破片で構成されており、機能を終えた土器を、意図的に廃棄する施設として、積極的に利用していると感じることができる。また、含まれる器種は壺形土器・甕形土器・高環形土器・鉢形土器を基本としながら、これらを模した手捏ねによるミニチュア土器があり、さらに脚付鉢形土器・甕形土器・製塩土器なども出土している。この他、土器以外にも磨石や石皿、砥石も出土している。

一方、こうした、良好な状態で土器が出土する住居跡や溝に対して、土坑や柱穴状堅穴からの出土遺物は少なく、しかも小破片である。このため、遺構の時期を決める手掛かりを欠く。

以上、北屋敷ツル遺跡の存続時期は、出土遺物から判断すると、縄文時代を除き、概ね弥生時代終末から古墳時代前期前葉である。調査は、この時期の溝を持つ集落の北縁を明らかにしたことになる。

第2節 調査の成果

1 縄文時代

調査区の東端から西側にかけて、約50mの間で、黒色土が約1m堆積した部分がある。黒色土の下は黄褐色土である。縄文時代には鞍部となっていた模様で、黒色土の上部30cmの範囲から縄文後期の土器が出土する。この場所は斜面であるため、本来は南側の平坦地に縄文時代の集落があり、そこから流れ込み堆積したもの想定する。

出土した主要遺物は第4・5図1～22に図示した。1・2は口縁部がキャリバー状に開く深鉢形土器である。1は縄文を地文に4条の平行沈線が入る。2は斜めの短沈線状の条痕の地文に口縁部に3条の平行沈線、頸部に2条の波状沈線が加えられている。器壁も薄く、縄文時代中期の瀬戸内系土器である。

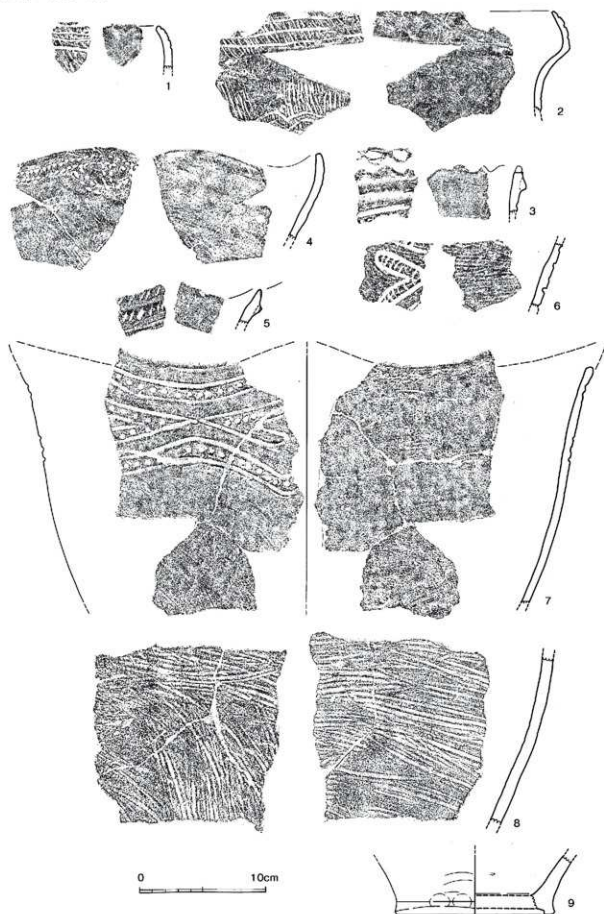
3は口唇部に指先による太い刻目が加えられ、口縁部外面には三角突帯とは幅広いの沈線文が施文されている。器形は寸胴形になる深鉢である。九州の縄文時代中期の系統を引く土器である。

4・5・7は波状口縁の鉢形土器で、6は胴部であるがこれも同型であろう。4の口縁部に平行に2条の刺突文が施文され、波状頂部では文様がやや複雑化している。5の口縁部外面には平行に三角突帯が施文され、その頂部と口唇部外面に刻目が加えられている。6・7は口縁部から胴部上位にかけて平行沈線で文様を描く。特に波状頂部周辺は文様を下方に展開させ、菱形を意匠とした文様になる。沈線間は状文の代替として6は放射筋のある貝殻の腹縁、7は先端が尖った棒状の道具の連続刺突文で充填されている。これらは東部九州の縄文後期初頭のコウゴ-松式土器に該当する。

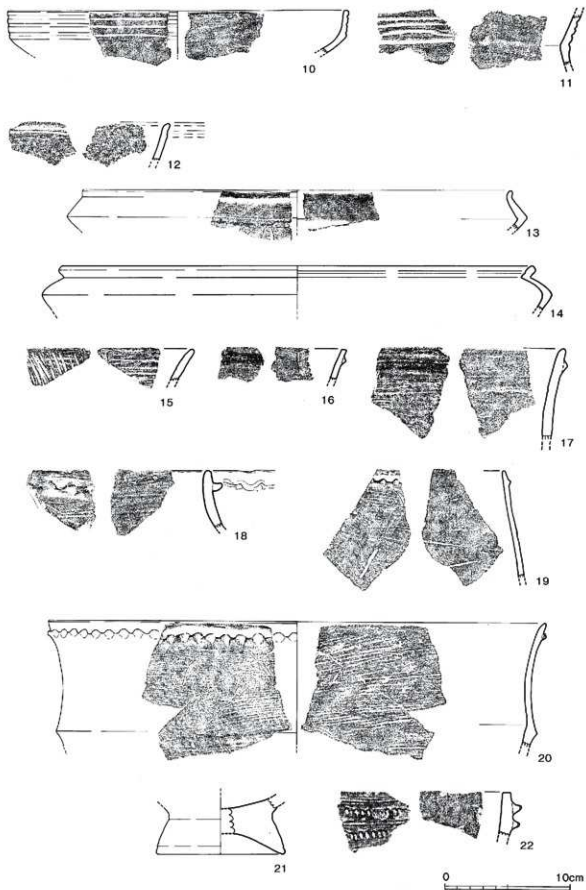
8・9は内外面とも巻貝条痕で器面調整した粗製土器で、8は胴部下位の破片で、9は底部の資料である。9は底部中央を欠くが、周辺が接地面となり上げ底状である。

3～9は縄文時代後期初頭に属する土器である。

第2節 調査の成果



第4図 北屋敷ツル遺跡出土縄文土器①



第5図 北屋敷ツル遺跡出土縄文土器② (1/3)

第2節 調査の結果

第5図10は口縁部が直立する浅鉢形土器である。口縁部外面には平行に3条の平行沈線が廻り、三万田式土器器面は横方向のヘラ磨きで仕上げられている。縄文時代後期後葉の三万田式土器である。

11は外傾する口縁部外面に数条の平行沈線が廻る縄文晩期の深鉢形土器である。内面はヘラ磨きであるが、外面は撫でで仕上げられている。縄文晩期中葉と考える。

12は内外面ともヘラ磨きされた鉢形土器である。外面には口縁部に平行に横方向の凹線が1条廻っている。13・14は器面をヘラ磨きした精製の浅鉢形土器である。13は口縁端部が外反し、胴部は外面に稜を生じて屈曲する。これに対し、14の口縁部はタガ状に立ちあがり、内面に小さい縄文晩期後葉段を生じている。また、胴部の張りは曲線を描いて膨らむ。これらは、縄文晩期後葉と考える。

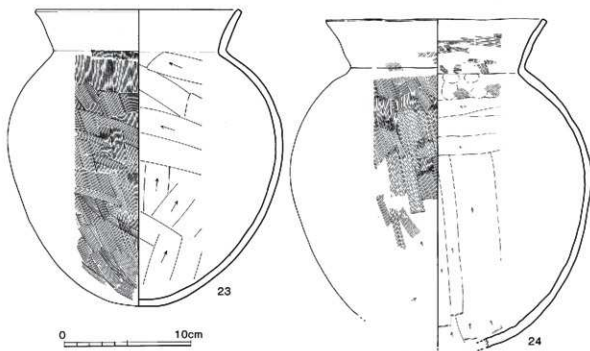
15は11の系統を引く深鉢で、外傾する口縁部外面に条痕が残り、斜め方向の連続沈線が加えられる。また、16・17は口縁部が大きく外反する深鉢形土器で、口縁部外面に平行に断面三角形の無刻目突帯が廻る。これに対し、18~20は外反又は内傾する口縁部の外面に端部に平行に、刻目一条刻目突帯が廻る深鉢形土器である。20の資料から想定すると、胴部屈曲部外面には刻目が無く、一条刻目突帯文と考える。

21は16~20の土器の底部と考える。底部内面が浮き、上げ底状となっている。

縄文時代晩期末 16~20は縄文時代晩期末に位置づけられ、組成として13・14の浅鉢形土器を伴う。また、16・17と18~20は時期差があると考えられており、前者が古い。

22は口縁部に平行に二条の刻目突帯文が廻る甕形土器である。刻目突帯の間は横方向のヘラ磨きである。この土器は縄文晩期末の影響を受けながら存続したこの地域の在地系の土器である。

以上が、北屋敷ツル遺跡出土の主要縄文土器で、縄文時代後期初頭と晩期後半から末が主体を占める。調査位置は、台地平坦部と谷水田部の境の斜面であり、こうした遺物を生み出した縄文のムラは南側の平坦高所部に存在するものと考え、晩期末の土器の出土は、谷部の湿潤地を利用した水田の存在を連想する。



第6図 北屋敷ツル遺跡1号住居出土遺物 (1/3)

2 弥生時代から古墳時代

(1) 住居跡

1号住居跡

1号住居跡は調査区の最高部、縄文時代の包含層に掘り込まれた状態で検出された方形の住居跡で、北側の壁は斜面地で削平されている。(145頁写真図版1参照)

この住居跡から出土した主要遺物は、第6図の23・24で、出状況は南壁沿いの土坑からである。器形は球状に張り、丸底になる同じタイプの甕形土器である。器面調整は口縁部が縦方向の刷毛目の後横撫であるが、23は完全に消えており、24は内外面にわずかに残る。胴部外面は両者とも刷毛目調整であるが、24の胴部下位には見られない。また、胴部内面は底部から掻き上げのように、上位は横又は斜め方向のヘラ削り痕があり、24の頸部内面は刷毛目と指圧痕が残る。

時期は古墳時代前期と考える。

2号住居跡

第7図に図示した2号住居の規模は、平面形が東西4.3m、南北3.7mの長方形で、南側の壁は約35cm残っていたが、斜面のため北側は約10cm程度確認できる程度である。上屋を支える柱の痕跡は、明瞭ではなく、中央部に直径25cm、深さ約40cmの柱穴と、北側に直径25cm、深さ40cmと、直径20cm、深さ25cmの小穴を確認できたのみである。しかし床面は平坦で、中央西寄り、床面に据えられた石皿を検出している。また、東壁周辺では焼土が数カ所検出されている。

焼土

出土遺物は第8図に図示した。25・26は複合口縁の甕形土器で、外面には櫛描波状文が施文されている。特に26の内外面には丹塗りされ、さらに外側はその後には櫛描波状文が施文している。27は口縁部が外反し、長胴となる胴部を持つ甕形土器である。28は口縁部が立ちあがる器台で、外面に櫛描波状文が施文され、さらに内外面丹塗り研磨している。29は高坏の脚部で、外面は縦方向の丹塗り研磨調整をしている。30は丸底の鉢で、外面は口縁部周辺、内面は全面丹塗り研磨している。

器台

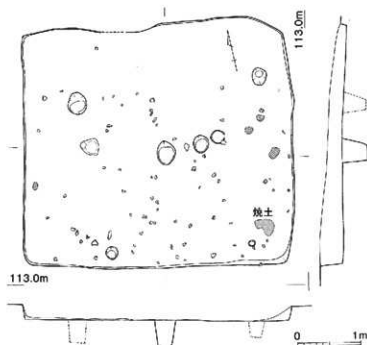
砥石・石皿

31は砥石、32は安山岩製の石皿である。

3号住居跡

第9図に図示した3号住居跡の規模は、東西4.7m、南北4.0m以上の方形で、深さは、南壁で約20cmの立ち上がり検出された。床面は平坦で中央に炉跡が浅く掘り込まれている。上屋を支える柱に関連する遺構は明確でなく、小規模な柱穴が検出されたのみである。また、遺構内からは焼土が数カ所検出されたが、床面から浮いており、

炉跡

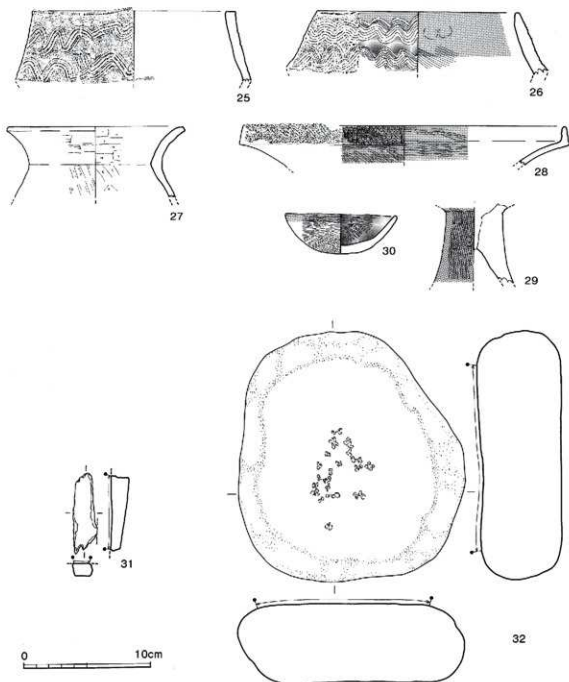


第7図 北屋敷ツル遺跡2号住居跡実測図 (1/60)

直接的な関係は薄い。

出土した主要遺物は第10・11図に図示した。33は複合口縁をもつ壺形土器の胴部で、最大径上位に刻目突帯が廻る。外面は縦方向の刷毛目調整で、内面は撫で仕上げである。また、上方から垂れるように丹が付着している。34の口縁部は壺形土器に比較すると直立し、胴部も張ることから、単口縁壺と考える。器面調整は、外面が縦方向の刷毛目の後に口縁部は横撫で、内面は口縁部が横方向の刷毛目の後に撫でて、胴部には指圧痕が残る。

35～38は口縁部が外反する壺形土器で、胴部は長胴で丸底となるタイプである。全体の器面調整が観察できる37と38では、37の外面は口縁部から胴部上位を縦方向の刷毛目調整で、その下位はヘラ撫でである。口縁部は横撫で刷毛目を撫で消している。内面は口縁部が横撫で、胴部は縦方



第8図 北屋敷ツル遺跡2号住居跡出土遺物 (1/3)

向のヘラ磨きで、一部に指圧痕が残る。38もほぼ同様な器面調整であるが、外面は胴部下位まで刷毛目調整されており、胴部内面上位が横方向の2種類の刷毛目で、さらに粗いヘラ磨きがされている。また胴部下位は下方から掻き上げるようにヘラ削りされている。36～38の外面にはススが付着している。

39は胴部に2本以上の平行沈線が廻る鉢で、沈線以下は刷毛目調整されている。また内面にも刷毛目痕が残るがヘラ状工具で撫でている。

手捏ね

40・41は手捏ねの大小の鉢で、全面に指圧痕が残る。さらに41はミニチュア土器

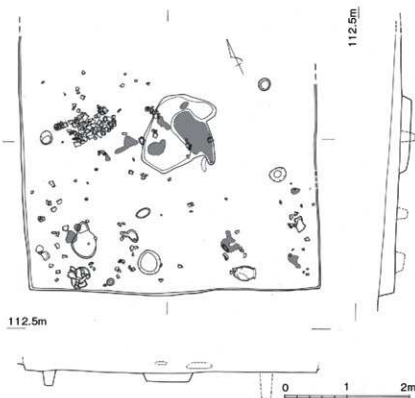
ミニチュア土器

で外面と口縁部内面が丹塗りされている。42は研磨により整形した、扁平な安山岩製の石製品

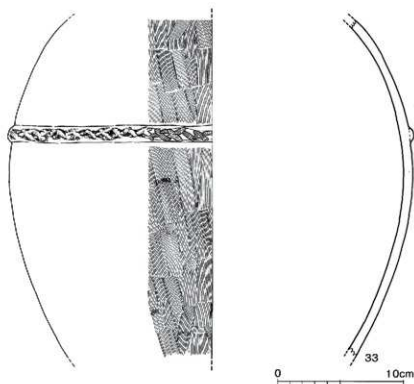
石製品

4号住居跡

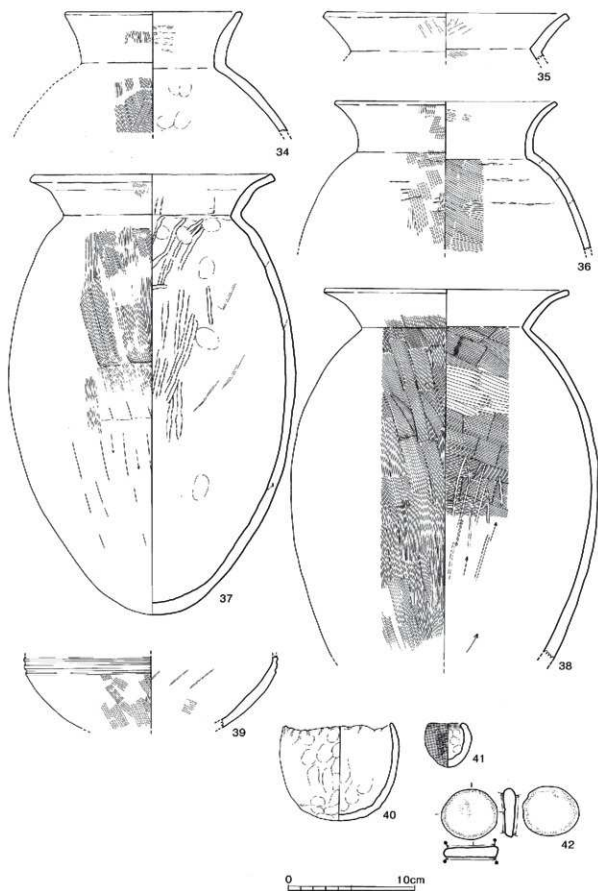
第12図に図示した4号住居跡は、調査区中央付近の最高所で検出された遺構であるが、やはり斜面地であるため、北側と東側の壁が削平されており、正確な規模を知ることはできない。最も壁が



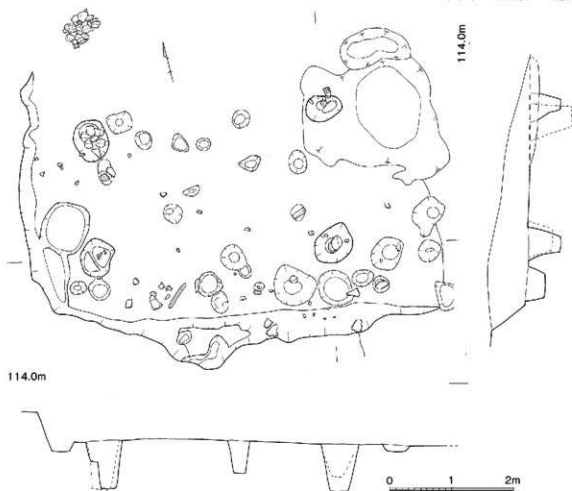
第9図 北屋敷ツル遺跡3号住居実測図 (1/60)



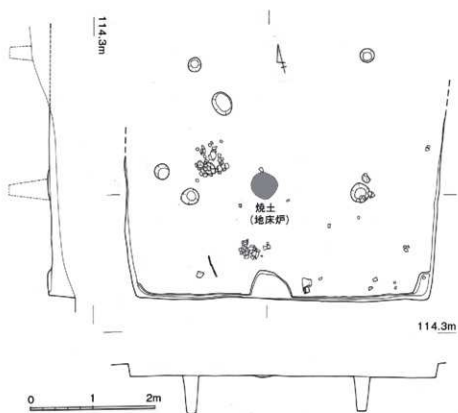
第10図 北屋敷ツル遺跡3号住居跡出土遺物①



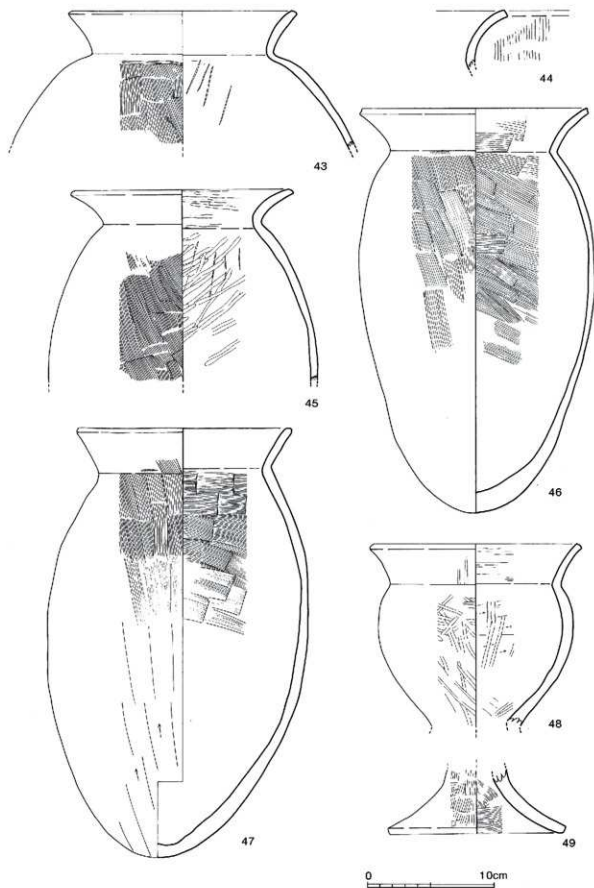
第11図 北屋敷ツル遺跡3号住居跡出土遺物② (1/3)



第12図 北屋敷ツル遺跡4号住居跡実測図 (1/60)



第13図 北屋敷ツル遺跡5号住居跡実測図 (1/60)



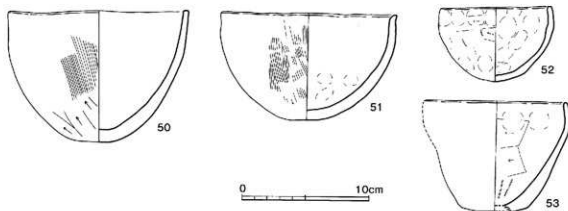
第14図 北屋敷ツル遺跡5号住居跡出土遺物① (1/3)

残されている場所は南西隅で、約60cmの高さである。床面は平坦で、南西隅を中心に東西6m、南北4mの範囲で残されており、それ以外は削平されている。また、上屋を支える柱穴はこの周辺が、柱穴群があるため、床面で多数検出されており、特定が困難である。

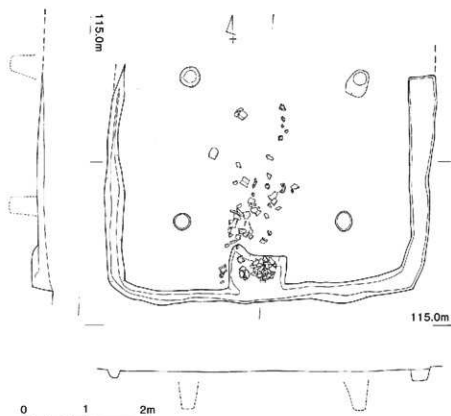
時期は、遺物は少量で、小破片ばかりであるため、図示していないが古墳時代前期と考える。

5号住居跡

第13図に図示した5号住居跡の規模は、東西約5mであるが、北壁が削平されているため南北の



第15図 北屋敷ツル遺跡5号住居跡出土遺物② (1/3)

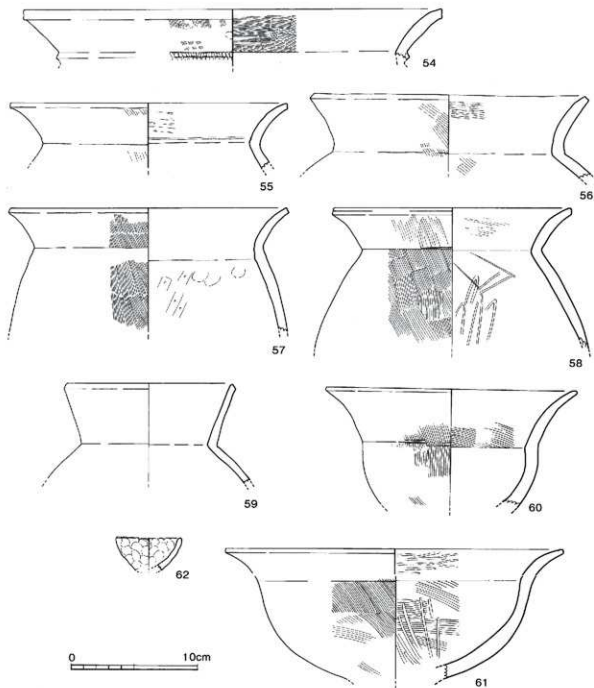


第16図 北屋敷ツル遺跡6号住居実測図 (1/60)

第2節 調査の成果

4ヶ所柱穴 規模は不明である。確認される南壁の深さは30cmで、平坦な床面からは4ヶ所で柱穴が検出された。さらに、南側の2本の柱穴の中間の床面で直径約40cmの範囲で炉跡と考えられる焼土が検出された。

5号住居から出土した主要遺物は第14・15図に図示した。43～47は甕形土器であるが、43は胴部が球状に張る形態で、口縁部は他の3点と比較すると直立し、23・24の器形に近い。45～47は長胴で丸底の底部を持つ形態である。器面調整は外面を縦方向の刷毛目で調整するが、口縁部外面は横撫でで仕上げるため撫で消されている。また、46は胴部下位に刷毛目は無く、47の胴部下位は緩いヘラ削りで下方から掻き上げられている。甕形土器の内面の器面調整は、45が口縁部は横、



第17図 北屋敷ツル遺跡6号住居跡出土遺物 (1/3)

胴部は斜目方向の粗いヘラ磨きであるが、46と47は胴部中位から上は横方向の刷毛目調整で、下位はなで仕上げである。45～47の外面にはススが附着している。

48は脚を持つ小型の鉢で、器面は内外面とも粗いヘラ磨きで調整している。49は脚である。外面が縦、内面は横方向の刷毛目で器面調整している。

50～53は丸底の鉢である。50・51の外面には刷毛目が残り、50の底部は下からヘラ削りされており、51の内面には指圧痕が残る。また、52・53は手捏ねによると推測でき、内外面指圧痕と削り痕が全面に見ることができる。

6号住居跡

第16図に図示した6号住居跡の規模は、東西5.2mであるが、北壁が削平されているため東西は不明である。床面は平坦で4ヶ所で柱穴が検出された他、壁溝や南壁沿い中央に土坑も確認されたが、炉跡は検出されなかった。

第17図に図示した遺物は、南壁沿いの土坑を中心に出土したものである。54～58は甕形土器で、54は頭部に突帯を一条廻らす。55～58はほぼ同じ形態の甕形土器である。器面調整も外面と口縁部内面を刷毛目調整した後、口縁部は横撫でしている。胴部内面は撫で仕上げであるが、57には指圧痕、58には粗いヘラ磨きが残る。

59は口縁部がほぼ直立するため、単口縁の壺形土器と考える。器面は撫で仕上げである。

脚付鉢

60・61は口縁部が延びて外反する鉢形をしており、脚が付く形態と考える。外面は刷毛目調整と撫で、内面も同様であるが、61には粗いヘラ磨きも観察できる。

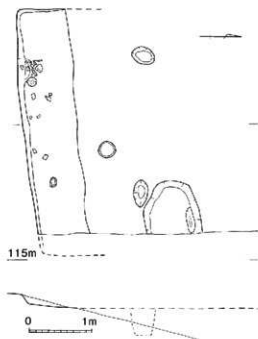
ミニチュア土器

62は手捏ねで造られたミニチュア土器である。全面に指圧痕が残る。

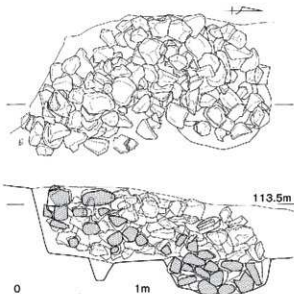
7号住居跡

第18図は7号住居であるが、南壁と西壁の一部が検出されたのみである。平坦な床面が検出されたため住居跡と判断した。

遺物は南壁付近で小破片がまとまって出土したが、図示できるような資料は見いだせなかった。



第18図 北屋敷ツル遺跡7号住居
実測図 (1/60)

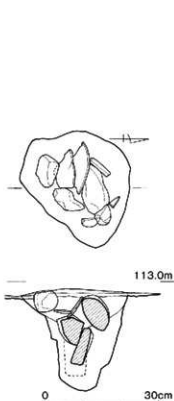


第19図 北屋敷ツル遺跡1号土坑
実測図 (1/30)

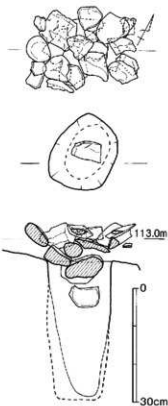
第2節 調査の成果

(2)土坑

- 備前焼大甕 1号土坑 第19図に図示した1号土坑は、4号住居跡の西南隅に掘り込まれた状態で検出された。土坑には拳大から小頭大の円礫が詰まっていた。遺物は第22図63の備前焼大甕の胴部破片が出土している。
- 2号土坑 2号土坑は第20図に図示したように、柱穴状堅穴に扁平礫や円礫が埋め込まれたように出土した。こうした礫と一緒に出土したのが第22図64・65の備前焼大甕の胴部と底部である。1号土坑と同一個体の可能性が高い。
- 同一個体 脚付鉢 3号土坑 3号土坑は直径約1m、深さ約40cmの土坑で、床面から第22図66の脚付鉢が出土した。器面は撫での後、胴部は粗いヘラ磨きされている。胴部に直径約3cmの孔が開けられている。
- 中世 5号土坑 第21図に図示した5号土坑は、直径約40cm深さ約80cmの柱穴状堅穴の上面に40cm×60cmの方形に石を配置している。遺物は出土しなかったが、他の遺構との比較から中世の可能性が高い。

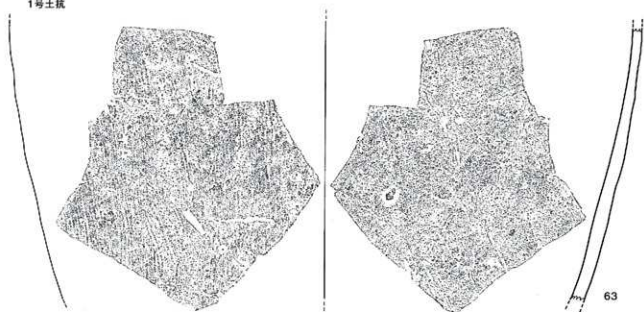


第20図 北屋敷ツル遺跡2号土坑実測図 (1/10)

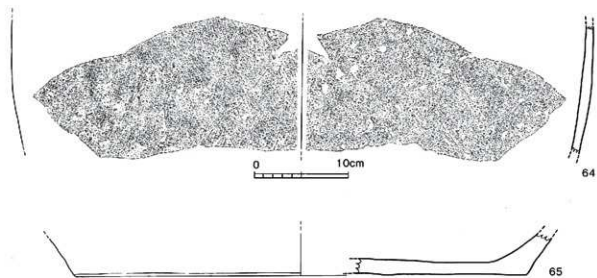


第21図 北屋敷ツル遺跡5号土坑実測図 (1/10)

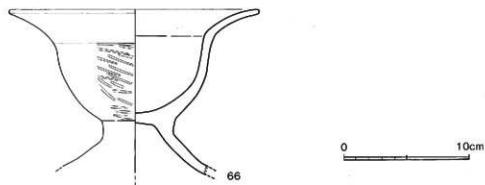
1号土坑



2号土坑



3号土坑



第22図 北屋敷ツル遺跡各土坑出土遺物 (1/3・1/4)

(3)溝

1号溝

1号溝は調査区中央部付近の南側に張り出した場所で検出された。調査区は全面北斜面であるが、その中でも高位置である。検出された溝は幅約30cmで、東端で南に直角に屈曲する。住居跡の埋戻側溝の可能性もある。遺物は小破片が出土したのみである。

2号溝

断面形V字形
2号溝は、調査区南側の高所平坦部から北に弧を描くように延び、斜面下位で消滅している。検出された遺構の規模は、長さ約35mで、遺存状態の良い好な場所では幅約2m、深さ約1mあり、断面形はV字形になる。

廃棄・投棄
溝内からは土器を中心とした多量な遺物が、廃棄・投棄された状態で出土した。器形は壺形土器が主に口縁部に櫛描波状文のある在地系の複合口縁壺、口縁部が外反する二重口縁壺、単口縁壺、甕形土器は胴部が球状に張るタイプと、長胴形の甕形土器がある。さらに頸部に突帯が廻る土器で、口縁径が大きく、器高が低い鉢形と器高が高い甕形土器、頸部が長細い長頸壺、小型の甕形土器、大型の鉢形土器、高坏形土器、脚付の鉢、口縁部が直口する碗形土器は器高が低いタイプと高いタイプがある。この他、甕形土器、ミニチュア土器、製塩土器など多種多様である。

製塩土器
櫛描波状文
複合口縁壺
第23～30図の67～91・107～109は口縁部外面に櫛描波状文のある複合口縁壺であるが、67～90は口縁部周辺の資料である。形態は口縁部が内傾又は直立し、その長さは頸部の長さとはほぼ同じである。その中でも80・81は口縁部が外反し、外面の櫛描波状文も一条で、他とは趣を異にする。器面調整は、内外面とも刷毛目調整を基本とし、外面は縦方向、内面は横で、これに頸部は内外面とも斜目方向が加わる。櫛描波状文は最終段階で施文されているようで、刷毛目の上に乗っている。また、74・75・77・79～83などは口縁部内面に刷毛目は無く、指圧痕が残されている。さらに67～71の口縁部は刷毛目調整のあと丹塗りが行われ、それを掻き取るように櫛描波状文が施文されている。その範囲は、67・69は頸部まで全面で、69は口縁部内面上位も塗布されている。また



北屋敷ツル遺跡 2号溝出土遺物状況

帯状に塗布 68・70の頸部は縦方向に帯状に塗布されており、72は口縁部外面と内面上位に塗られている。

頸部のくびれ部には突帯が一条廻る。この突帯は、断面が三角形で表面がなめらかな83～87や、指で摘みあげたような痕跡が残る80～82・90、格子状の刻み目が加わる88など三種類が確認できる。さらに88の肩部には凹形、90の頸部には1対の断面が勾玉状の浮文が、数カ所付けられている。

100～106はこの土器の特徴である複合口縁部を欠く資料である。92～97は頸部から胴部上位の資料である。92には頸部に突帯が無いが、他は93には斜めの刻目突帯、94・96には摘み上げ突帯、95・97には断面三角突帯が廻る。器面調整は外面が縦方向で94～97は粗いヘラ磨きか横又は斜目方向に加わる。内面は横方向の刷毛目であるが、97は縦方向である。また、95の肩部には櫛描波状文が施され、胴部には断面三角形の突帯が二条廻る。さらに、97の内面は赤色顔料が付着しており、朱又は丹を入れた容器と考える。

98・99・102・104・106は胴部突帯と周辺の資料である。器面調整は外面上位が縦方向、下位が斜目方向の刷毛目で、さらに170・172・174の下位は粗いヘラ磨きをしている。内面は横又は斜め方向の刷毛目であるが、105・106には指撫で痕が残る。外面の突帯は、断面が台形で、上面に刻み目が連続して加えられている。98・102は単純な斜め刻目であるが、99・106は綾杉状で、104は格子状である。

100・101・103・105は口縁部のみを欠く資料で、底部の形態が理解できる。100・105は完全な丸底であるが、101・103は平底の名残をわずかに留める。器面調整や胴部上位に廻る突帯も前述した各部位の資料と概ね同じであるが、胴部内面の底部近くの器面調整の刷毛目は縦方向が主体である。また、101の頸部には90と同様な断面が勾玉状の浮文が1対4ヶ所に付く。さらに103の胴部内面は、製作時の粘土帯の接合痕が明瞭で、幅は約7cmである。

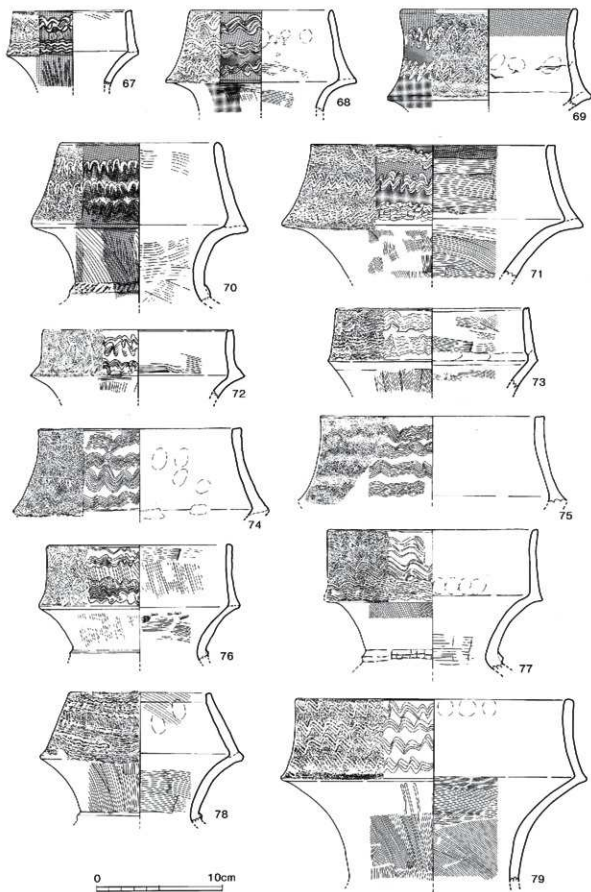
91・107～110は、複合口縁部に櫛描波状文を描く壺形土器の全体の形態を理解することができる資料である。器高が最大は91の57.5cmで最小は110の約40cmであるが、全体のプロポーションを見ると、多くは口縁部と卵卵形の胴部との比率が1対3であるが、107の頸部から上が大きく、胴部は球状で小さく、1対2に近い。また、110の頸部には92と同じく突帯がない。

111～120は複合口縁の壺形土器であるが、櫛描波状文を欠く。この文様の欠落は、それのみでなく、前述の櫛描波状文を有すると壺形土器の外反しながら立ちあがる口縁部形態と微妙に異なる。111の口縁部外面は斜目方向の刷毛目のみで、口縁部は直線的に外傾する。また、112の口縁部は内湾気味に立ち上がり、外面は横撫で仕上げで、屈曲部外面には刻目が加えられている。また頸部の締まりも緩く、他の複合口縁壺とも形態が異なり、北部九州的である。113の口縁部も111と類似し、頸部と口縁部の接合部が外側に突出する。口縁部外面は縦方向の刷毛目のみで仕上げられている。外面全面と内面の頸部から上位は丹塗りされ、胴部外面上位はヘラ磨きされている。

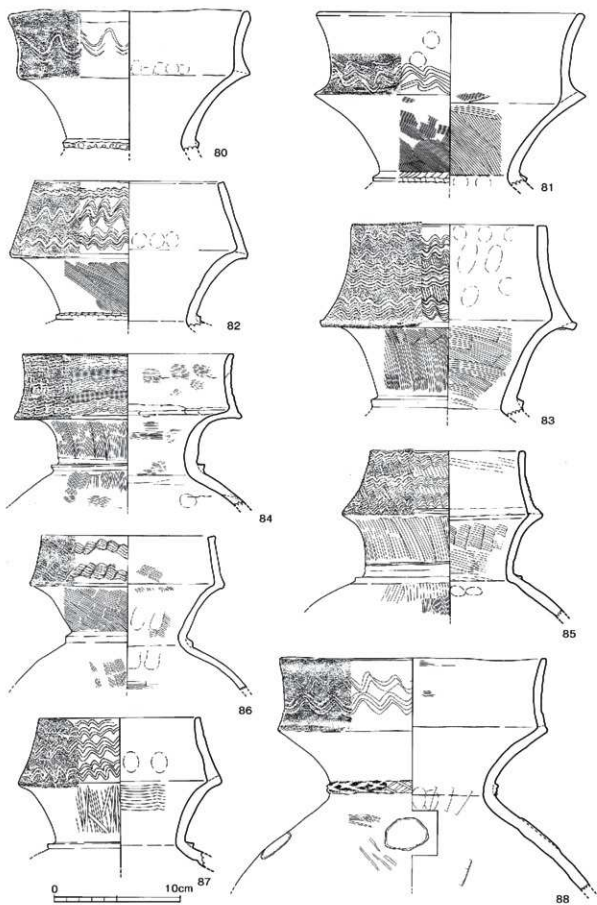
115～116は、口縁部のみを欠く資料であるが、口縁部外面は斜め方向の刷毛目で仕上げられている。115・116は口縁部内外面と頸部との接合部に帯状の丹塗りがされている。また、116の頸部には突帯が付けられていない。117は櫛描波状文のない口縁部が直立し、頸部は短く内面に稜を生じず屈曲するため突帯を持たない。118・119は同一個体の壺形土器である。櫛描波状文のない口縁部は直立し、緩くしめる頸部外面には突帯が付けられない。胴部はやや長く、丸底である。120も口縁部が直立し、外面は横撫で仕上げである。頸部には摘み上げの突帯が廻り、胴部外面は縦方向の刷毛目の後に、縦方向の粗いヘラ磨きで仕上げられている。

121～122の壺形土器は、伝播した土器の可能性が高い。121は頸部が直立し、口縁部が外反する二重口縁壺で、明らかに古墳時代に属する。122も頸部に在地的または古い様相を残すが、口縁部は外反し、胴部内面は横方向のヘラ削りで仕上げられている。123も同様で、口縁部は直立する二重口縁で口径が大きく、頸部の締まりも緩い。内面はヘラ削りで仕上げられ、器壁も薄い。

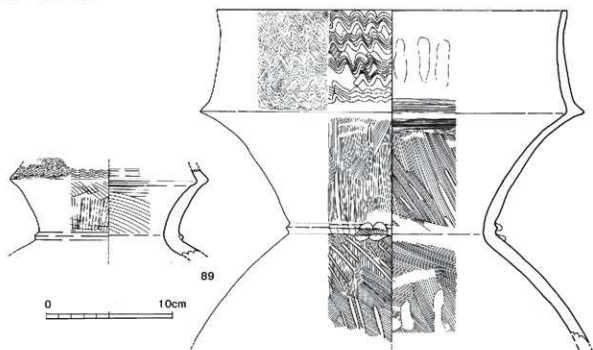
第2節 調査の成果



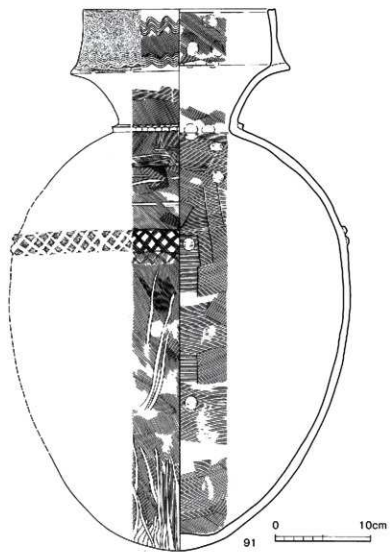
第23図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物① (1/3)



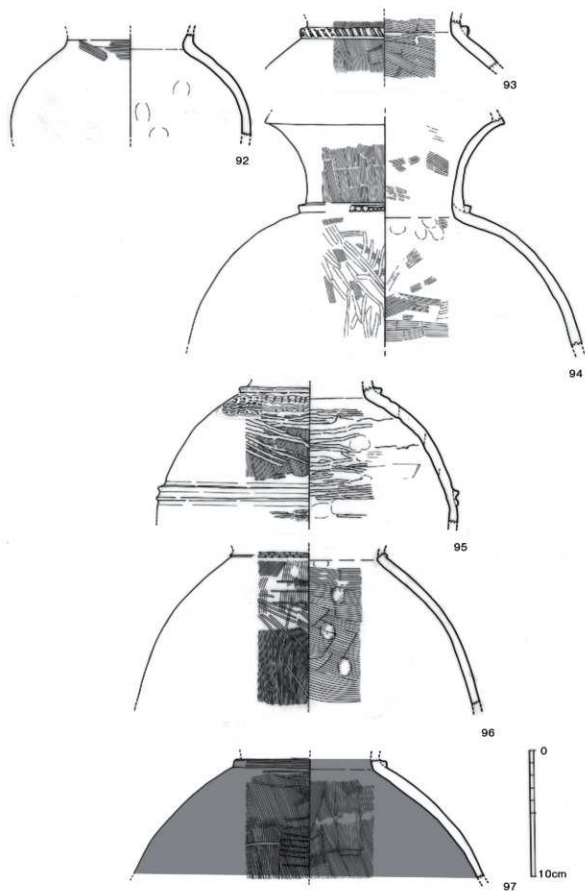
第24図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物② (1/3)



90

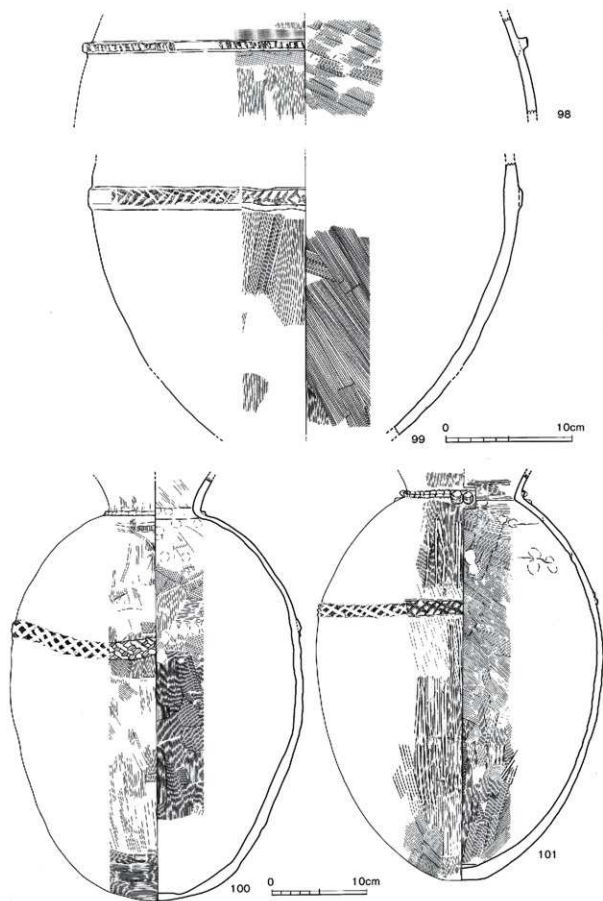


第25図 北屋敷ツル遺跡2号清出土遺物③ (1/3・1/4)



第26図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物④ (1/3)

第2節 調査の成果



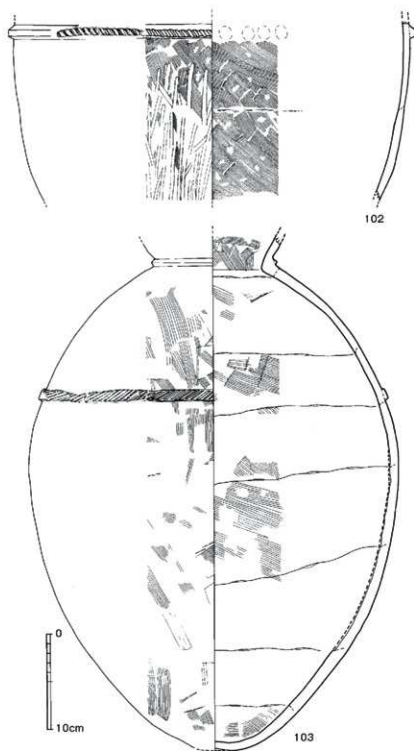
第27図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑤ (1/3・1/4)

単口縁壺

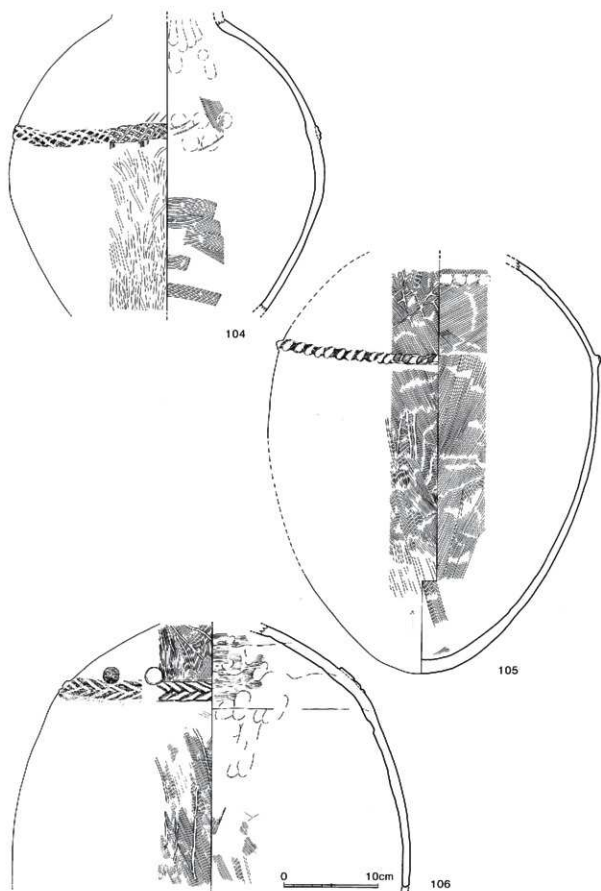
以上が複合口縁壺とその系統を継承するものであるが、同じく、頸部が締まり、胴部が張る形態でも、口縁部が立ちあがるのみの壺形土器がある。これを単口縁壺として第34～36図124～138に報告する。

124～138の共通する形態は、頸部の締まりがきつく、口縁部は外反するも直立気味になる129・132・137や、ほぼ直立する124～126・131・138、長く延びる127・129・133・135などがあり、壺形土器の短く外反する形態とは異なる。胴部の張りは、球形に近い132～137と長胴になる131と138のように二形態がある。また、複合口縁壺に見られる胴部の突帯はない。

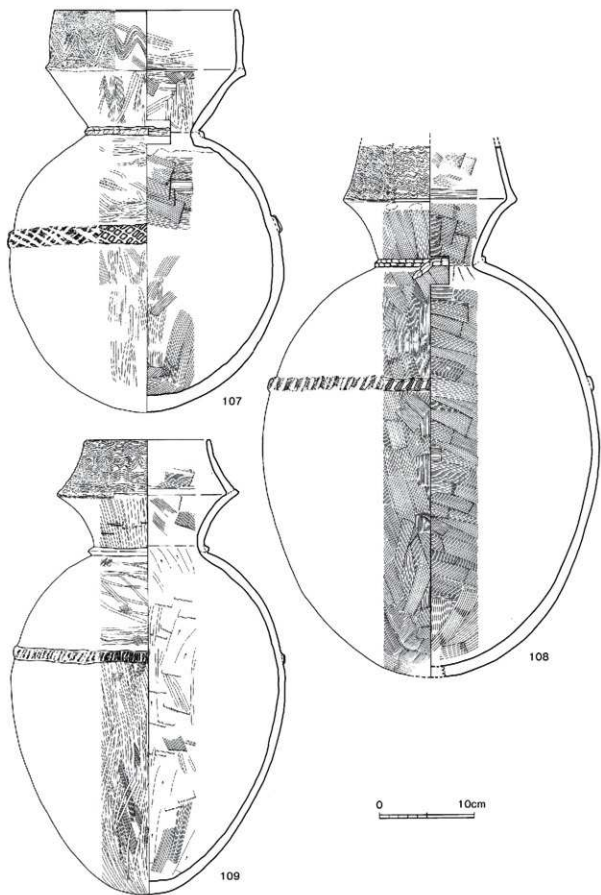
器面調整は、前述の壺形土器と同様で、外面は縦方向の刷毛目調整を行い、口縁部は横撫で、又は124は縦方向、129は横方向のヘラ磨きである。さらに胴部は、129・132・136・137はほぼ全面縦方向のヘラ磨きであるが、130・131は下位を中心にヘラ磨きしている。また、内面は、126・136・138の口縁部に横方向又は斜目方向の刷毛目が残されているが、124・129・131は横方向のヘラ磨きである。胴部内面は、128・129・134・138の上位には刷毛目が残されており、133・203は上位が横方向、中位は縦方向で、201の



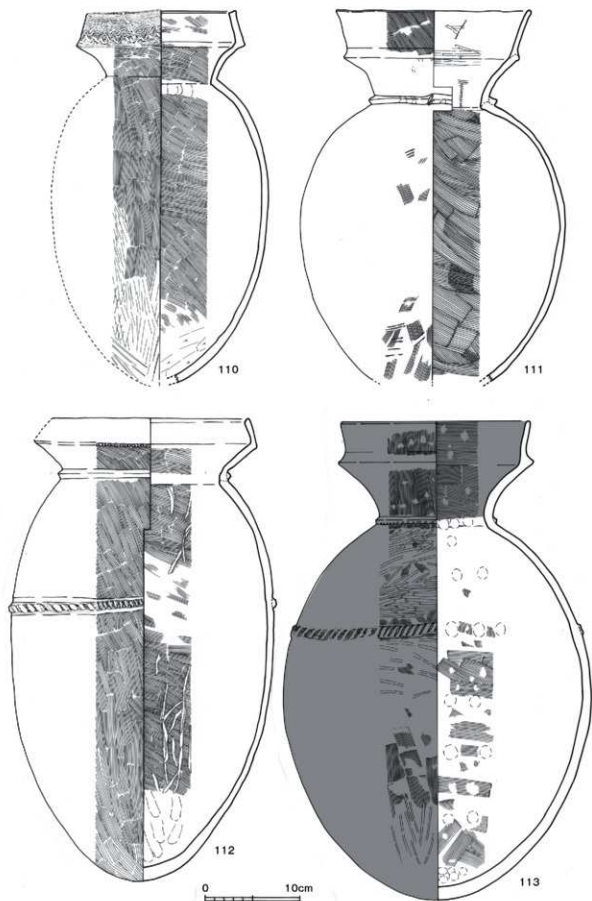
第28図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑥ (1/4)



第29図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑦ (1/4)



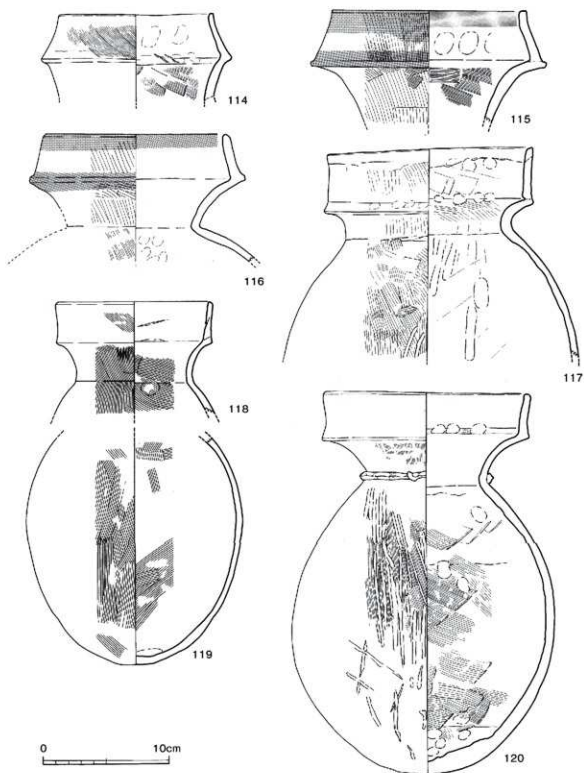
第30図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑧ (1/4)



第31図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ (1/4)

下位は横方向の刷毛目である。また、194・199は撫で仕上げであるが、129・130・134はヘラ削り痕があり、137・138はヘラ撫でである。

第37～54図139～252は甕形土器である。甕形土器は大まかに見ると、口縁部が外反するが、胴部が球状に張るタイプと、長胴形になるタイプの2形態がある。



第32図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ (1/3)

第2節 調査の結果

胴部が球状 前者を第37～40図139～164に図示したが、胴部が球状に張る中でも、器面調整の手法で異なる2系統がある。外面の器面調整は、両者ともほぼ同じで、縦方向の刷毛目を基調とし、口縁部は横撫いで、143・154の胴部上位には横方向の粗いヘラ磨き、147の胴部下位から底部にかけて、縦方向のヘラ削りであり、摩滅しているものも多い。

内面の器面調整は多様で、調整技法が明確な資料を見ると、基本的には143・144・162～164のように刷毛目調整があるが、さらに143・161・163は粗いヘラ磨きが認められ、158は縦方向の指圧痕が残るような強い指撫いで調整されている。さらに、特徴的な変形土器は、149～160で内面を底部から全面にわたり、ヘラ削りされており、口縁部が159は内端部、160は外端部が肥厚するなど、他地域からの影響を強く受けている。

これらの変形土器のうち、140・144・146・148・149・153～158・161・162・164の胴部や口縁部周辺にはススが付着している。なお、148は祭祀用と考えられ、外面と口縁部内面が丹塗り研磨で仕上げられているが、外面にススも付着している。

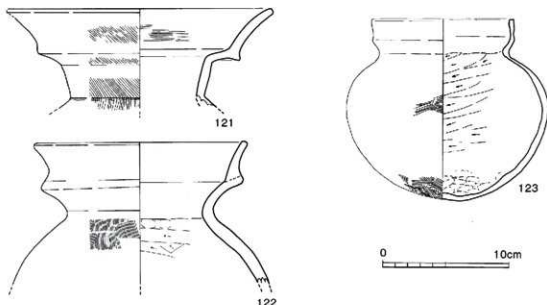
長胴形 第41～50図165～223は外反する口縁部に長胴形の胴部を持つ形態の変形土器である。胴部の形態は200・202・205・207・212・219のように一部、前述した球状に張るタイプに近いものもある。器面調整は、全体の状況が理解できる完形品に近い資料で見ると、外面は縦方向の刷毛目を基本とし、口縁部付近はさらに横方向の撫でが加えられ、多くは刷毛目の痕跡を残す。また、175・188・203には粗いヘラ磨きが認められ、211・212は胴部中位に、220は底部近くには叩き調整の痕跡が残る。

叩き調整

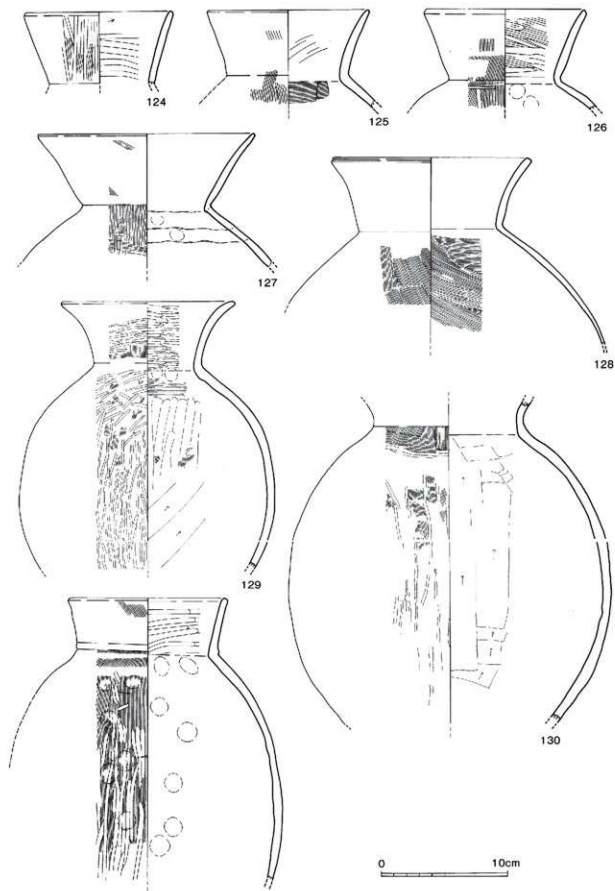
内面の器面調整は刷毛目を基本とするものの多様である。例えば、180・187・189・193・196～198・214・220は刷毛目のあとに粗い縦方向のヘラ磨きで仕上げられており、数は少ないが、190・209・210・215・223は底部近くをヘラ削りで器面調整している。そして、ヘラによる削りと磨きの両方が観察できる202・200・208・216などもある。この他、175は強い指撫でが推測される他、指圧痕が残るものや、撫でで最終的に仕上げているものなどもある。

こうした長胴形の変形土器も煮炊きで使用された痕跡は明らかで、特に180・185・191・199～203・205・213～219・221・223の底部周辺や胴部にはススが付着している。また、200・223の内面底部周辺には煮コゲの跡も観察できる。

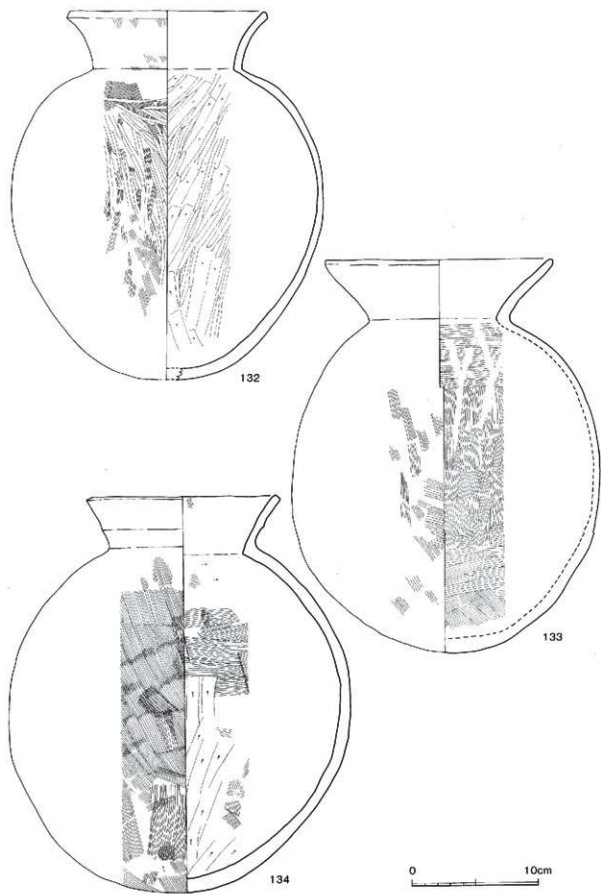
煮コゲ



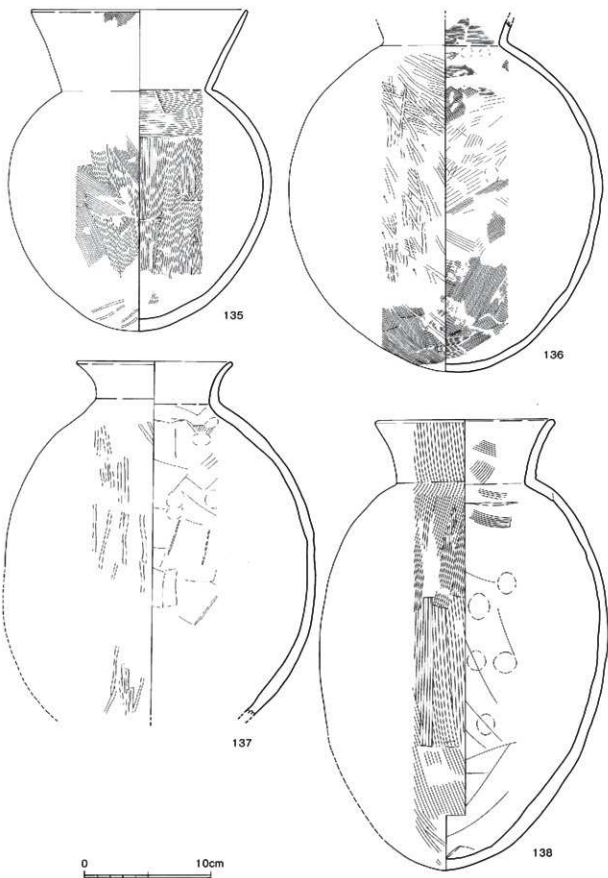
第33図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物① (1/3)



第34図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑫ (1/3)



第35図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑬



第36図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物④ (1/3)

煮炊き具

ところで、211・212は頸部のくびれが緩く、口縁部もあまり外反せず、円筒状であり、前述した二形態の甕形土器とも異なる。また、器面調整も、内外面ともに刷毛目を基調とするものの、外面に叩きの調整痕が残る、他地域からの搬入品と考える。両者とも、外面にスガが付着しており、煮炊き具として使用されている。

第50図224～第54図252は口縁部が欠落、又は底部のみの資料であるが、器面調整の状態から多くは甕形土器と考える。底部の形態は、227が平底気味、234がいびつな形態になる以外は、丸底又は尖底気味の丸底である。

外面の器面調整は、縦方向の刷毛目を基調とするが、235・237・238・242・243・250は胴部から丸底底部を粗いヘラ磨き、251・252には叩き調整の痕跡がある。また、内面も刷毛目調整が主体であるが、228・230・236・238・239・245・252には底部から掻き上げるようなヘラ削りが観察され、さらに239・245はヘラ磨きされている。その他、刷毛目の後に撫でによる平滑な仕上げもある。特に、246は指による削りに近く、凹線状の窪みが数条縦方向に残されている。

外面の状況は、二次焼成を受けているものが多く、249の底部近くは、剥落して器面の状況が不明である。また、232～235・237・238・241～245・248の底部から胴部にかけてはスガが付着しており、245の内面の底部には煮コゲの痕跡が認められる。

広口の甕

第55図253から第58図262は屈曲する頸部の外側に突帯を一条廻らす広口の甕形土器で、全形が理解できる258～262を見ると、口径が大きく器高が低い258～260と口径が小さく器高が高い261・262の二形態がある。そこで、口縁部周辺の資料である253～257を見ると、253は後者であり、255～257は前者の形態になると想定できる。ただ、254は口径が大きく長胴の形態が想定され、頸部の突帯にも刷毛目原体による刻み目に加えられ、他とは異なる。

器面調整は、外面が縦方向の刷毛目調整であるが、321はヘラ撫で、256は撫でで仕上げられている。また、内面は、259・261・262のように丁寧な刷毛目調整も認められるが、253・254は横方向のヘラ磨き、256～258の内面は撫でによる仕上げである。また、頸部の突帯は、断面三角形が主体であるが、先に述べたように254は刷毛目原体による格子状の刻目に加えられ、255の断面は台形であり、261は指先で抓み上げた痕跡が残る。

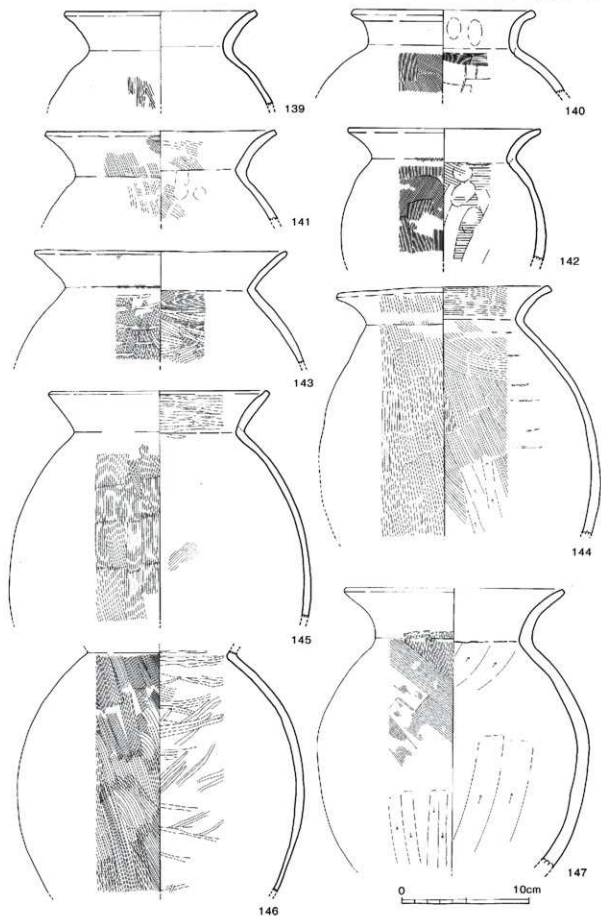
器面の状況は、260・261には底部から胴部最大径部にかけてスガが付着しており、一部は煮炊きに使用されている。

第59・60図263～265は外反する口縁部の口径と器高の数値が近く、頸部もあまりくびれない甕形土器である。前述の253～262の甕形土器から頸部に廻る突帯を欠落したものと看做される。

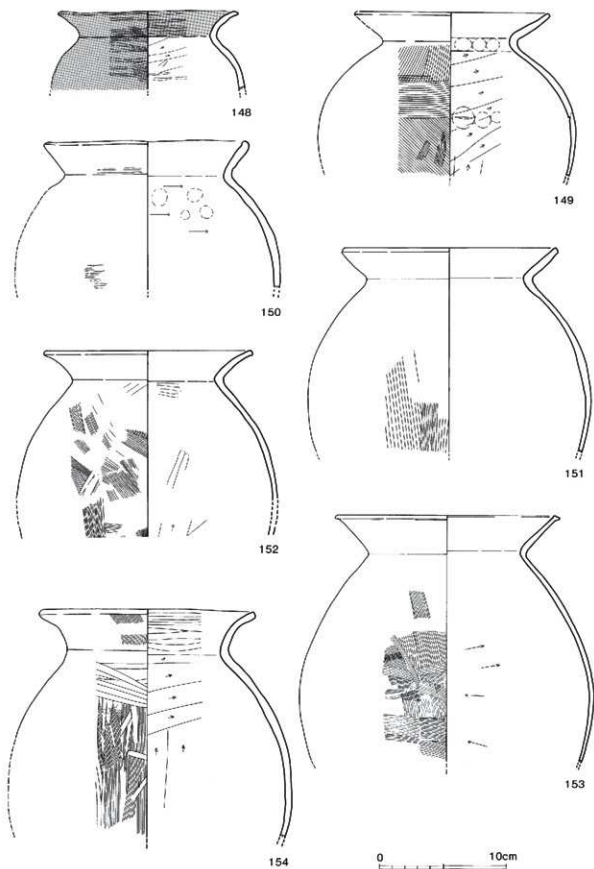
263は外反する口縁部が破打っている。胴部最大径はやや下位にあり、底部の器壁は厚く平底の名残を残す。器面調整は、外面が口縁部から底部にかけて縦方向の刷毛目で、さらにその上から粗いヘラ磨きに加えられている。また、内面も肩部和底部周辺に横方向の刷毛目があり、胴部は粗いヘラ磨きが縦方向に加えられている。さらに、底部内面に煮こげ跡が残されており、煮炊きに使用されている。

264の口縁部は、直線的に外傾する形態で、胴部の最大径はこれも下位にあり、底部は平底が残る。器面の内外面には約4cm幅の粘土積みの痕跡が残る。器面調整は内外面とも縦方向の刷毛目で行われているが、口縁部は外面に撫でと指圧痕、内面は横方向の刷毛目仕上げている。また、胴部内面の底部近くにはヘラ削りの痕跡が認められる。

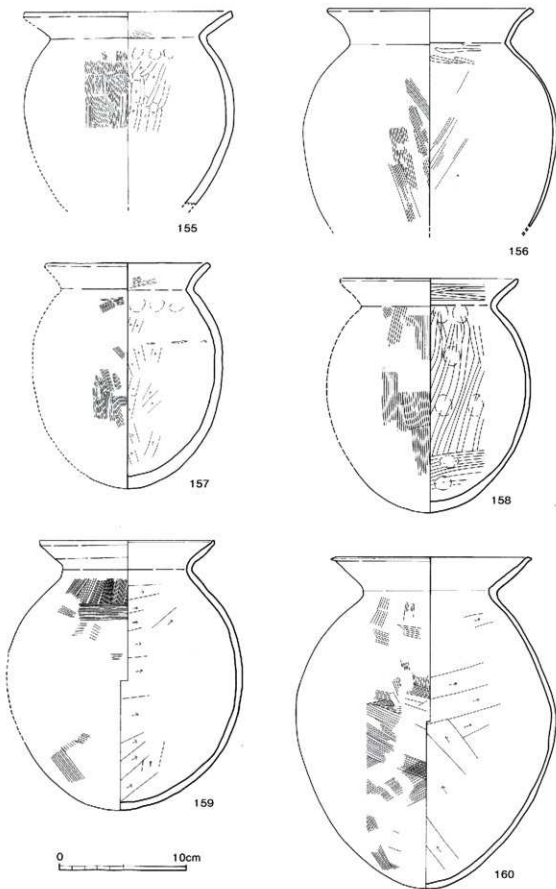
265は口縁部が外反し、胴部最大径が上位に位置し、丸底の底部を持つ器形である。器面調整は外面が縦方向の刷毛目で、さらに口縁部は横撫で、胴部下位は粗いヘラ撫でが加えられている。内面は、胴部上位に横又は斜め方向の刷毛目で、指圧痕が残されている。外面全体にスガが付着しており、煮炊きに使用されたことが判る。



第37図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ (1/3)



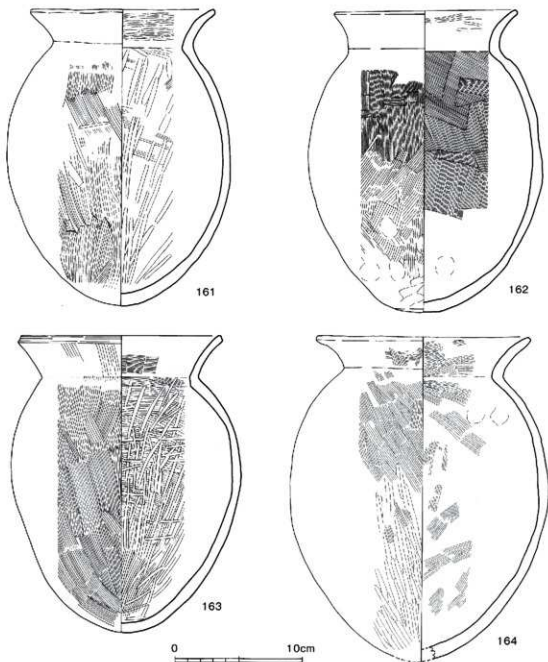
第38図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑩



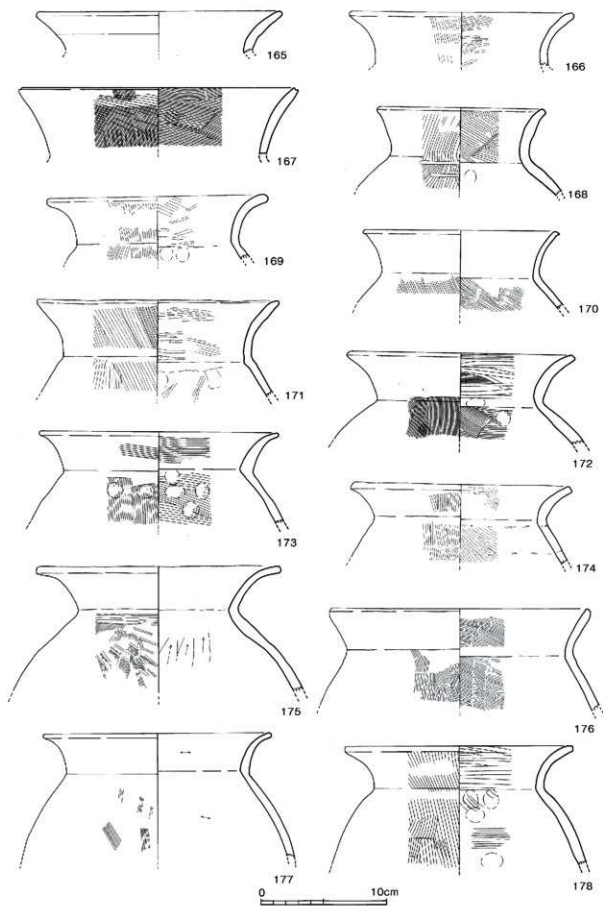
第39図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑦ (1/3)

第61図266～275は球状に胴部が張る。139～164の中でも、口径と器高の数値比が近い161～小型化した変 164の小型化した変形土器である。このため、器形はもとより、器面調整も同じ技法が採用されている。すなわち、外面は基本的に縦方向の刷毛目調整であるが、266は斜め方向で、271は肩部と胴部で異なる刷毛目器具を使用し、底部周辺はヘラ磨きしている。また、272は刷毛目の後に撫で、275は刷毛目の後にヘラ磨きが加えられている。この他、267～269の外面は撫でのみの仕上げである。

内面の器面調整は多様で、266はヘラ削りで指押さえの痕跡も残る。また、268はヘラ削りの後撫でて平滑にしており、削り痕が明確でないが、267や269も同じ手法と考えられる。一方刷毛目調整は270～275で観察することができ、270は全面にわたり横や斜め方向に残されており、272は刷毛目の後に撫で調整が加えられている。さらに、271・274は底部以外に刷毛目調整がされ、273は下位をヘラ削り、275は粗いヘラ磨きで仕上げている。

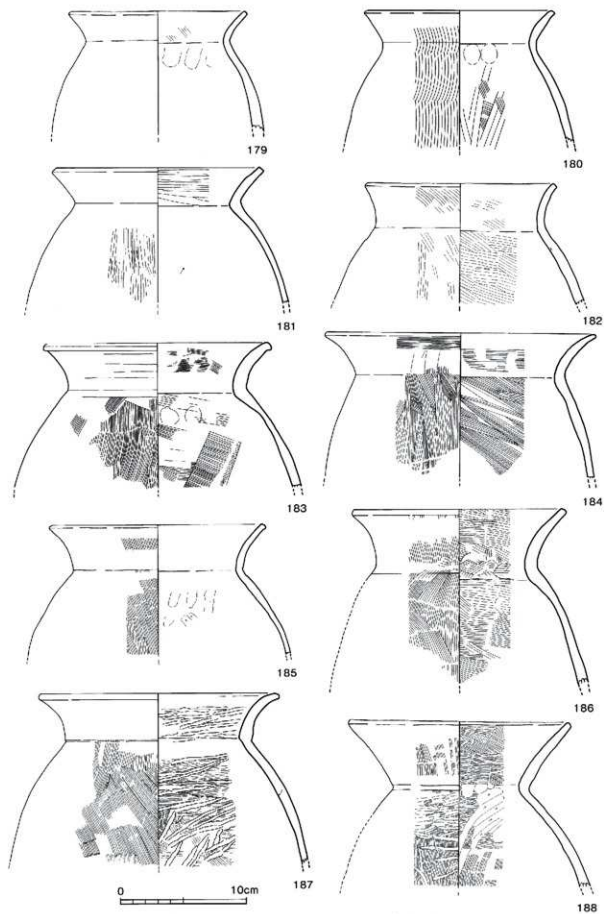


第40図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物® (1/3)

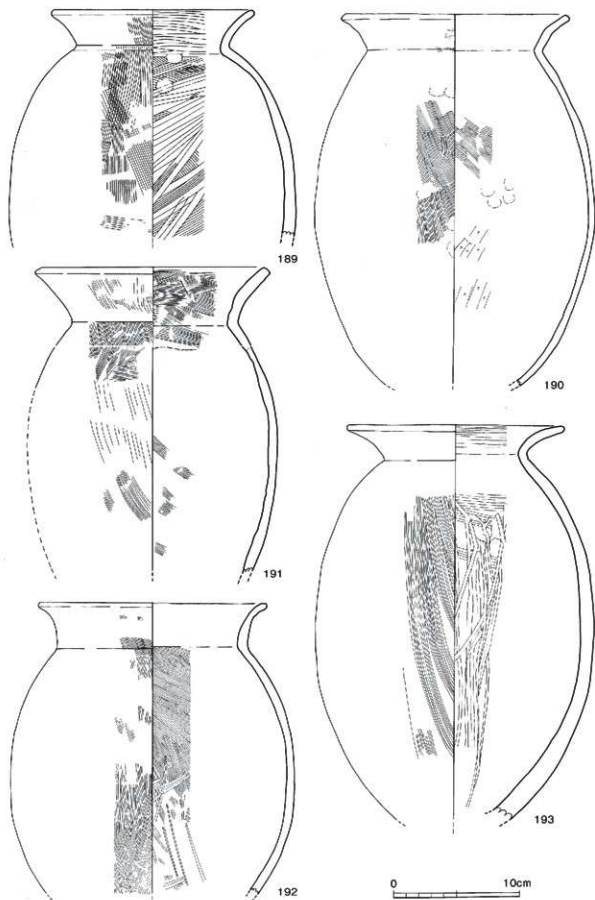


第41図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ (1/3)

第2節 調査の成果

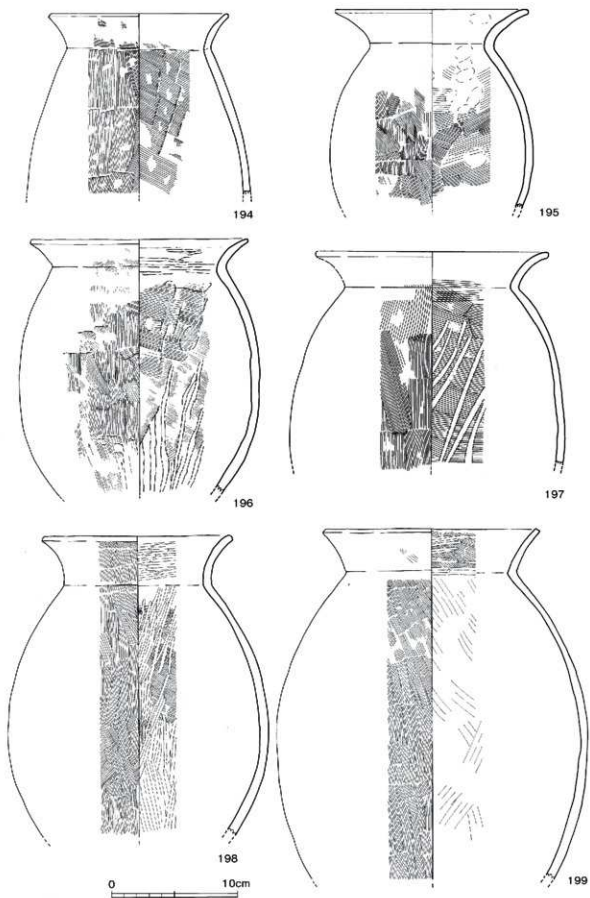


第42図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ (1/3)



第43図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物② (1/3)

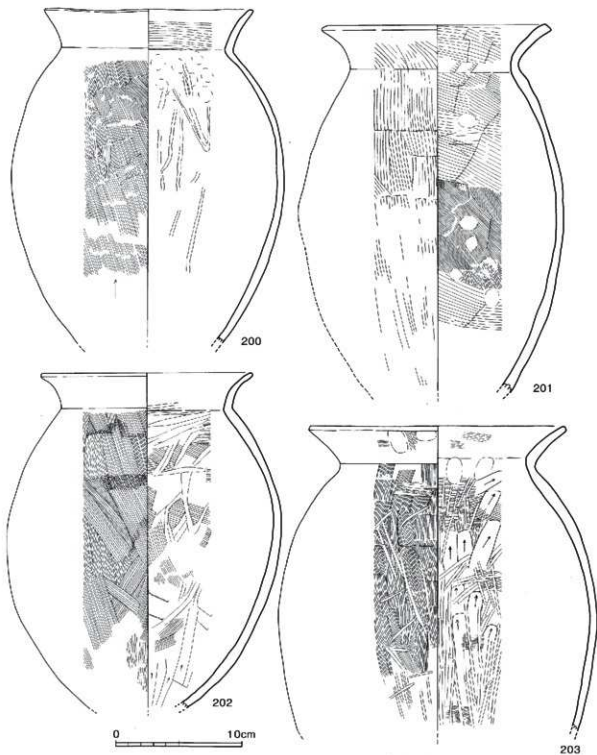
第2節 調査の成果



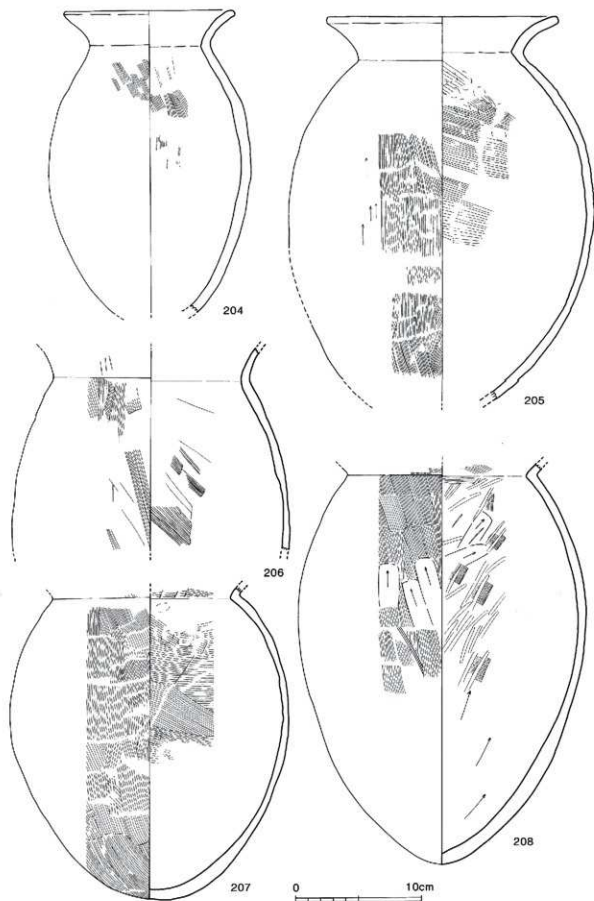
第44図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物② (1/3)

外面の状況は、272～275の比較的大型の甕形土器の胴部にはススが付着しており、煮炊きを使用していることが判る。

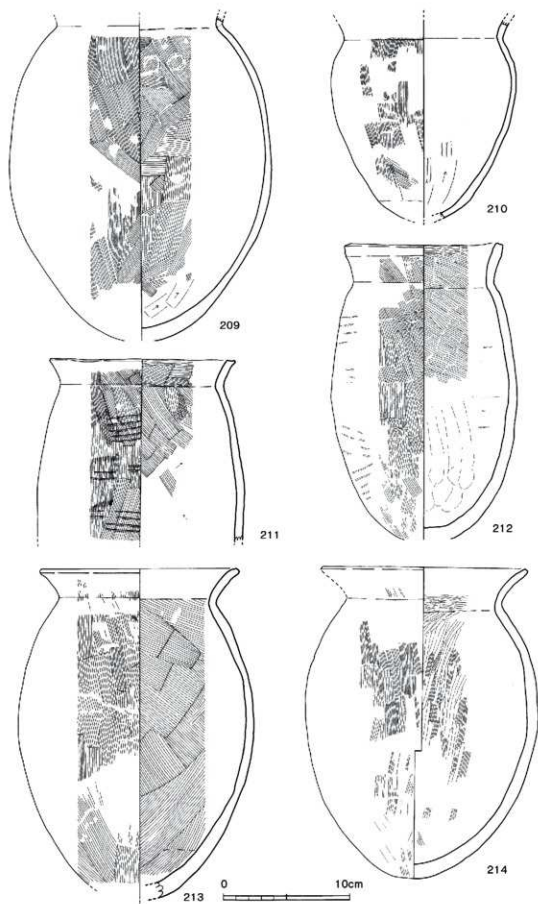
小型丸底壺 第62図276から第64図286は各種小型丸底壺である。第62図は口縁部が短い短頸壺である。276の外面は縦方向の刷毛目の後に、口縁部周辺が横撫で、底部はヘラ削りで仕上げ、内面は撫でである。さらに外面全面と口縁部内面にかけて丹塗りしており、祭祀土器と考える。277は口縁部を欠くが、内外面に刷毛目調整がされ、さらに外面肩部は撫で、内面には指圧痕が残る。279は口縁部



第45図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㉔ (1/3)



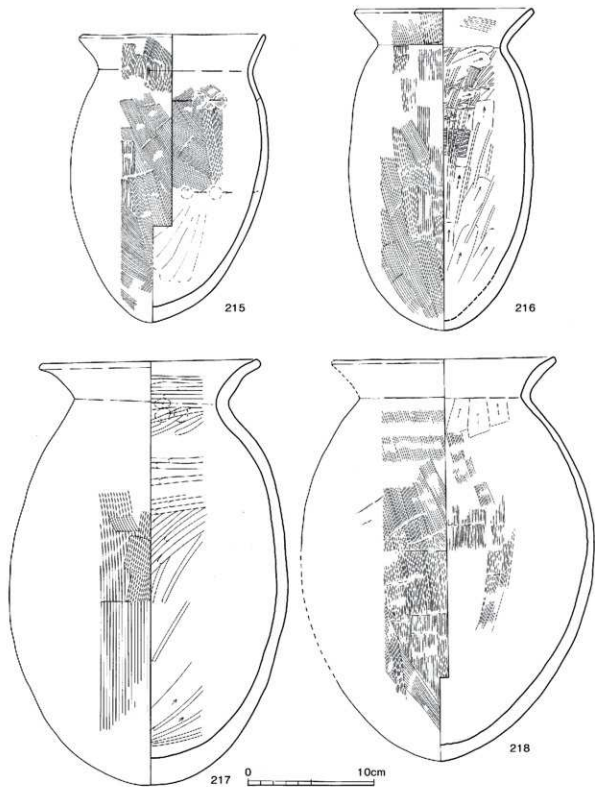
第46図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物② (1/3)



第47図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑥ (1/3)

第2節 調査の成果

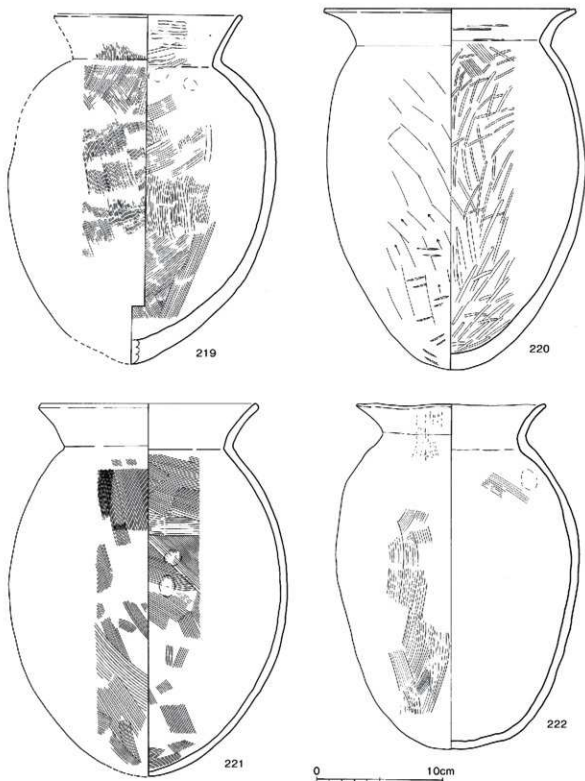
が内湾気味に立ちあがる。口縁部外面は縦方向の削り、胴部の刷毛目は上位が縦、底部近くは横方向で、さらに粗くヘラ磨きしている。口縁部内面は斜め方向のヘラ磨き、胴部はヘラ削りで形を整えている。279は全体的に摩滅しているが、胴部外面には縦方向の刷毛目が残されており、内面は指圧痕があり、撫で仕上げと考える。280の口縁部も内湾気味に立ちあがる。器面調整は、口縁部



第48図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑧ (1/3)

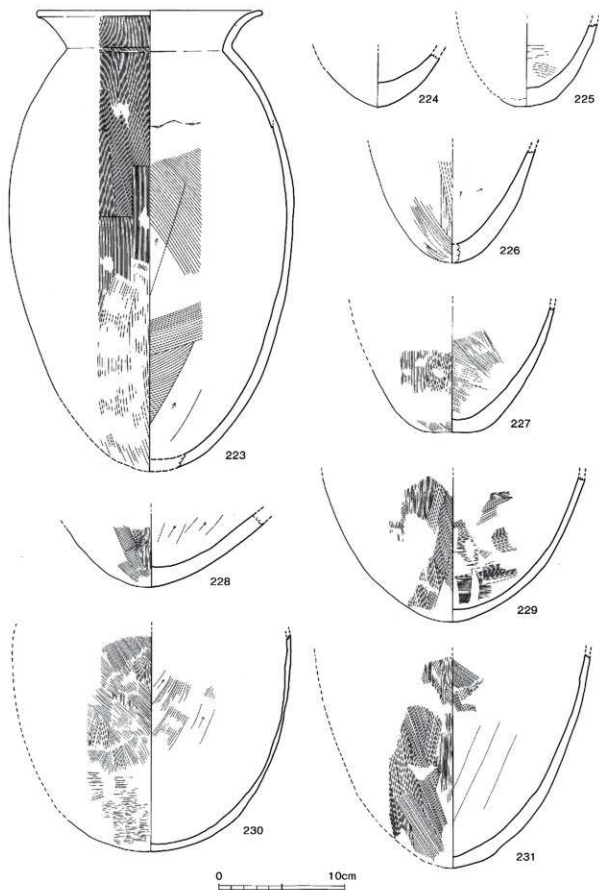
内外面と胴部外面は刷毛目調整で、さらに撫でで仕上げられているが、胴部内面は全面ヘラ削りで器壁を薄く仕上げている。

第63図は第62図に比較すると口縁部が長く立ちあがる壺形土器である。281は内湾気味に立ちあがる口縁部のみの資料であるが、外面は口縁端部が横撫で、その下位に櫛描波状文が巡り、その下

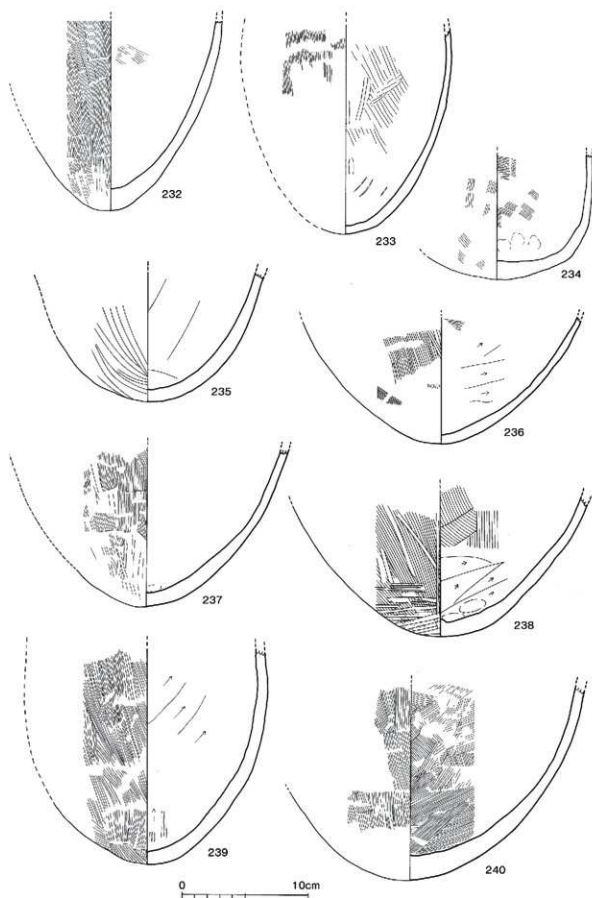


第49図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑦ (1/3)

第2節 調査の成果

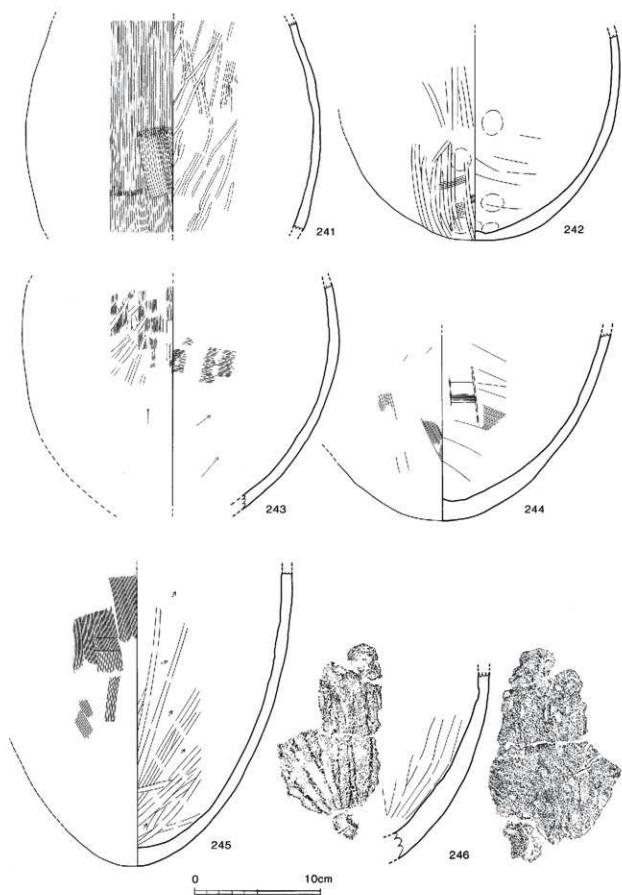


第50図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑧ (1/3)

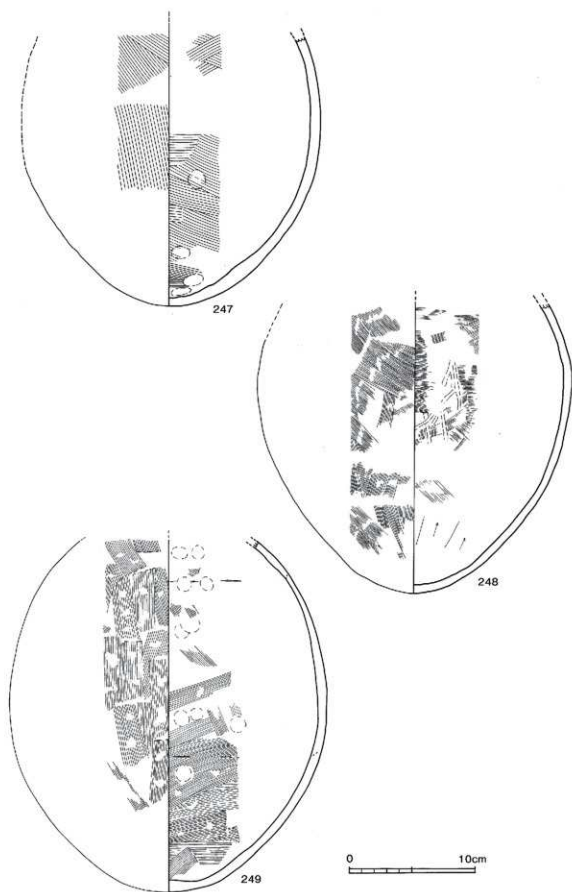


第51図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物② (1/3)

第2節 調査の成果



第52図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ (1/3)



第53図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊸ (1/3)

位から斜め方向の刷毛目で仕上げられている。内面は撫でて指痕が残る。

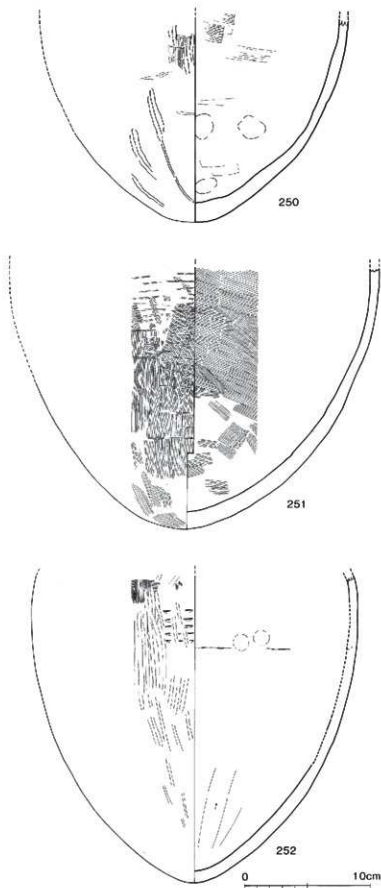
M字突帯

282は口縁端部を欠くが、内湾気味に立ちあがることは想定できる。口縁部と胴部の境のくびれ部に断面三角形、胴部最大径部の上位に断面M字状の突帯が廻り、さらにこの間の肩部に円形の浮文で飾られている。そして、丸底底部の先端に円形の粘土を貼り付けている。器面調整は、外面が縦方向や斜め方向の刷毛目であるが、内面は撫でて平滑に仕上げている。

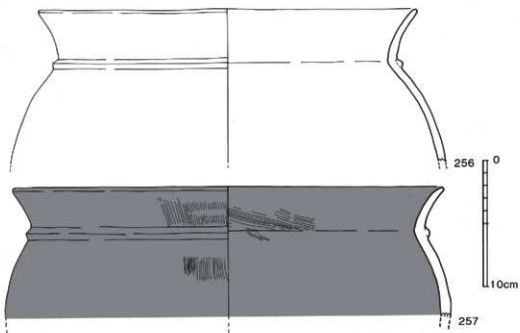
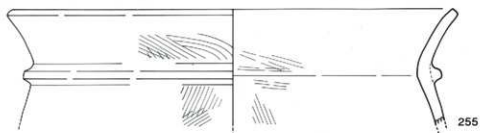
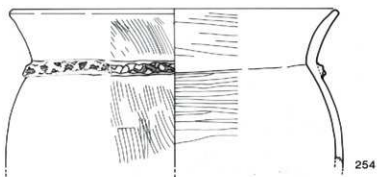
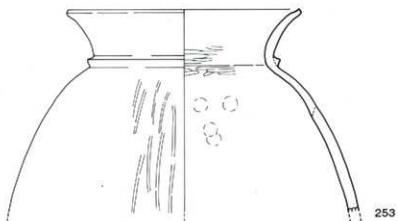
円盤状浮文

283は282と同じ形態で、器面調整も外面が刷毛目、内面は撫であるが、ヘラ状の道具を用いており、その痕跡が残る。文様も、肩部に四ヶ所施文された円盤状の浮文に竹管で刺突した円形のスタンプ文が付く。さらに胴部に廻る断面台形の突帯には縦方向の刻目が連続して加えられている。

284~286は282・283と同じ器形であるが、突帯や浮文、底部の突起を欠く。284の口縁部は内湾気味に立ちあがり、胴部は中位で稜を生じるように算盤玉状に張る丸底壺である。器面調整は、外面が口縁部から胴部中位まで刷毛目で、胴部下位はヘラ磨きである。また、口縁部内面は、刷毛



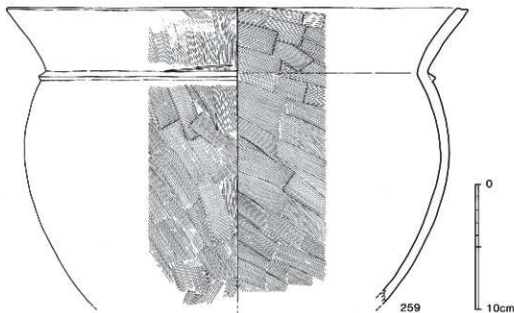
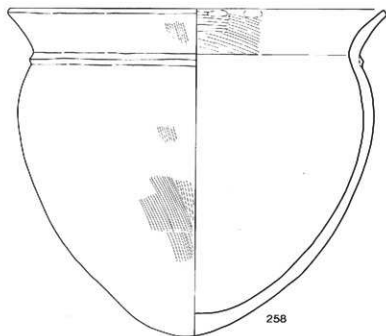
第54図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物② (1/3)



第55図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊸ (1/3)

目の後に撫で、胴部内面は撫でのみで指圧痕が残る。さらにこの土器は外面全体と、口縁部内面が丹塗りされている。

285の口縁部はほぼ直線的に伸び、胴部は球状に張り、底部は欠ける。器面調整は、口縁部外面が縦方向、胴部外面は肩部と底部周辺が横、中央部が斜め方向のヘラ磨きで、内面は口縁部が斜め方向のヘラ磨き、胴部は撫で、肩部周辺には指圧痕と粘土の継ぎ目が観察できる。286は外面を丹塗り研磨した丸底壺である。口縁部を欠くが、胴部の状況から285と同じ形態と考える。内面の丹塗りは頸部付近まで及んでいない。器面は、外面が刷毛目の後にヘラ磨きで、内面は頸部付近が撫で、胴部は粗い刷毛目で調整している。



第56図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物③ (1/3)

小型丸底壺 第64図に図示した遺物は小型の丸底壺であるが、形態は多様である。287・288は口縁部が開く第62図の形態の壺をさらに小型化した状態で、手ね感が強い。特に287は小型であるが器壁が厚く、器面全体に指痕が残されている。器面調整は、口縁部外面が撫で、胴部上位が刷毛目、下位がヘラ削りで仕上げられており、内面は撫でである。289は口縁部が直口する形態で、278の小型化に近い。器面は、内面に刷毛目の調整痕が残るが、外面は撫で仕上げである。

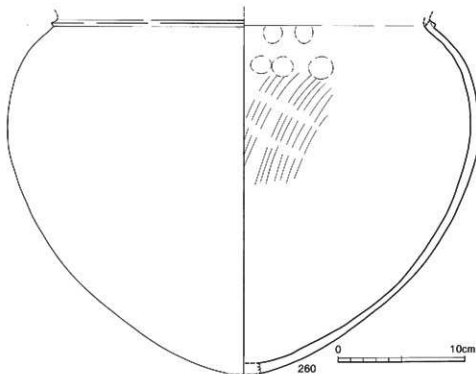
290～294は口縁部を欠く資料である。290・291は底部で、290の外面は刷毛目、内面は撫でで器面調整している。291は内外面とも底部から上方にヘラ削りされており、胴部中に指痕が残る。292は頸部が細い小型丸底壺で、胴部外面下位はヘラ削りで、上位は指痕が残る。その範囲は丹塗りされている。内面は撫でである。293は器壁の厚い小型丸底壺である。外面は刷毛目調整で、内面は強い指痕で痕が残る。また、外面全面を丹塗りしており、口縁部内面にも見ることができる。294は他の小型丸底壺とは趣を異にする。口縁部は欠けるが、大きく開くことが想定できる。また底部は尖り気味の丸底で、胴部中には焼成前の穿孔が見られる。器面調整は、胴部外面上位が縦方向の刷毛目で、下位は撫で、内面は口縁部と胴部下位から中位が横方向の刷毛目で仕上げている。

295・296は口縁部が最大径となる塊状の小型丸底壺である。2点とも良質な粘土を用い、均質な仕上がりにある。295の底部にはヘラ削り痕が残る、296は全面ヘラ磨きで器面調整している。

鍋状土器

第65図は外反する口縁部の先端が最大径となり、器高が低く、丸底になる器形で、鍋のような形態の一群の土器である。297は口縁部と底部を欠くが、器面は内外面とも刷毛目のあとヘラ磨きで調整しており、さらに全面丹塗りしている。298・299はやや小型であるが、298の外面底部はヘラ削りで、内面は横又は斜め方向の刷毛目で器面調整しており、底部周辺にはススが付着している。299・300いずれも刷毛目とその後にヘラ磨きを加えて内外面の器面調整を行っており、299の内面にはススが付着しており煮炊きに使用したと考えられる。

301も他と同様に内外面を刷毛目とヘラ磨きで器面調整しているが、胴部は内外面ともに比較的



第57図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ (1/3)

丁家にヘラ磨きで仕上げている。302はこの形態で最大口径を持つ。器面調整は、内外面とも刷毛目で平坦にし、さらに横方向を主体としたヘラ磨きを加えて仕上げている。この土器の底部から胴部にかけてススが付着しており、煮炊きに使っている。

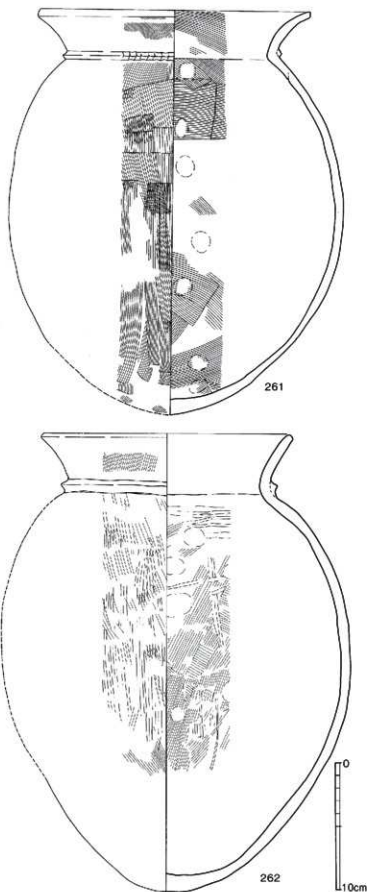
高坏・脚

第66・67図の303～321は高坏及びその脚部である。303は脚端部を欠く資料であるが、坏部は大きく外反し、口縁端部は尖るように仕上げ、坏内底部はほぼ平坦である。脚部は下位で屈曲し

焼成前穿孔

ラッパ状に開き、屈曲部には円形の焼成前の穿孔が、外から内に向けて四ヶ所に開けられている。器面調整は、坏部が内外面とも刷毛目の後にヘラ磨きされており、脚部は縦方向の刷毛目の後に、屈曲部を境に上下に分けて縦方向のヘラ磨きをしている。また内面は撫で調整で、上位には絞りの痕跡が残る。そして最終的には脚部内面以外を丹塗りで仕上げている。

304の坏部も口縁部が大きく外反するが、坏内底部は緩く窪む。脚部は坏部の接合部からラッパ状に広がる。器面調整は、坏部外面が縦方向の刷毛目の後に口縁部は縦方向のヘラ磨き、屈曲部下位



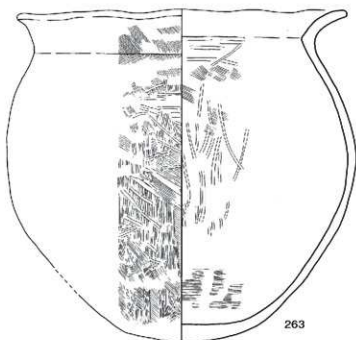
第58図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ (1/3)

は横方向のヘラ磨きで、内面は横方向の刷毛目の後に同じ方向のヘラ磨きをしている。坏部外面は縦方向の刷毛目の後に同方向のヘラ磨きで、内面は上位に絞り痕、中位に刷毛目、脚端部は横方向の撫でで仕上げている。

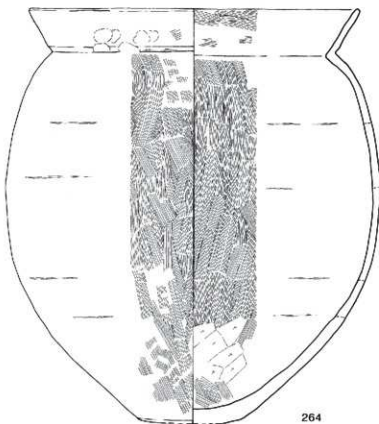
305の高坏は口縁部が長く直線的に延び、坏内底部はほぼ平坦である。このため側面観が逆台形となっている。脚部は内側が大きく空き、下位で屈曲して開く。坏部の器面調整には顕著な刷毛目痕を見ることができず、内外面とも撫でのあとに、内面は横方向、外面は縦方向のヘラ磨きである。これに対し、脚部外面は屈曲部上位が撫での後にヘラ磨き、下位は削り状の痕跡が残る。また内部は横方向の刷毛目痕跡が残る。

特殊な高坏

306の高坏の器形は特殊で、坏内底部は皿状に緩く窪むが、口縁部は外反して延び、さらに端部に複合口縁帯の口縁部のような立ち上がりが付付けられている。また脚部は坏部との接合部からラッパ状に開き、その中位には不規則な位置に四ヶ所、縦長の不定形な穿孔が焼成前に外側から開けられている。器面調整は坏部の立ちあがり部については、内外面ともに斜め方



263



264

0 10cm

第59図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑦(1/3)

向の刷毛目であるが、内面は横方向のヘラ磨き、外面は縦方向の刷毛目の後に横方向の粗いヘラ磨きが観察できる。坏部外面は縦や斜め方向の刷毛目で、脚端部と内面は撫で仕上げである。

以上が全形を把握できる資料であるが、307～321は坏部・脚部などの各部位の破片である。307の坏部は坏底部の器壁が厚く、坏底部と口縁部の接合部が明瞭である。器面は外面が横撫で、内面は横方向のヘラ磨きで、回転を利用した調整痕である。308は口縁端部を欠くが、305と類似する器形と考える。器面は外面が縦方向の刷毛目の後に粗い横方向のヘラ磨き、内面は口縁部近くが斜め、以下が横方向のヘラ磨きで調整し、最後に全面丹塗りしている。また、外部屈曲部と口縁端内面にススが附着している。309は坏底部の資料である。器面は内面が中心部に向けた縦方向、外面も縦方向のヘラ磨きで、最後に丹塗りしている。

310～313は坏部と脚端部を欠く資料である。310と312は脚部の中位で屈曲するタイプで、312は坏部の接合部からラッパ状に開く。311は不明である。器面は310が撫での後に軽いヘラ磨きで、311～313の外面は縦方向の刷毛目の後に同方向の粗いヘラ磨きをしており、最終的に312・313は丹塗りしている。内面は上位に絞りの痕跡が残るが、312・313の下部は横方向の刷毛目痕が観察できる。

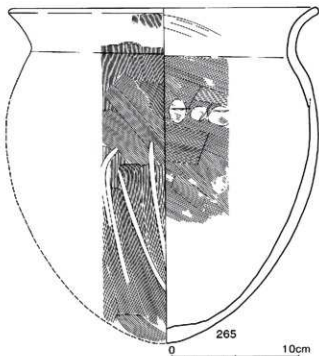
314～321は脚部の資料である。脚は大きさに差があるものの、概ね坏接合部から「八」字状に広がるが、314は下位で、315・317は上位で屈曲して開く。特に317の上位は中空にならず、土柱となっている。314・315・317には焼成前の円形の透かしが外から内側に向けて、314・315は四ヶ所、317は五ヶ所穿かれている。器面調整は外面が、縦方向の刷毛目の後に同方向のヘラ磨きがされているが、314～318は比較的粗く、刷毛目が残るが、319・320は丁寧である。内面は314・317が撫で、315・316・318・319は横又は斜め方向の刷毛目で仕上げているが、319はヘラ撫で状である。さらに315～317の外面は丹塗りしている。

321は全面撫でで仕上げられており、外からの円形透かしが二段に入り、数も多い。脚环の鉢又は円筒器台の可能性を持つ。

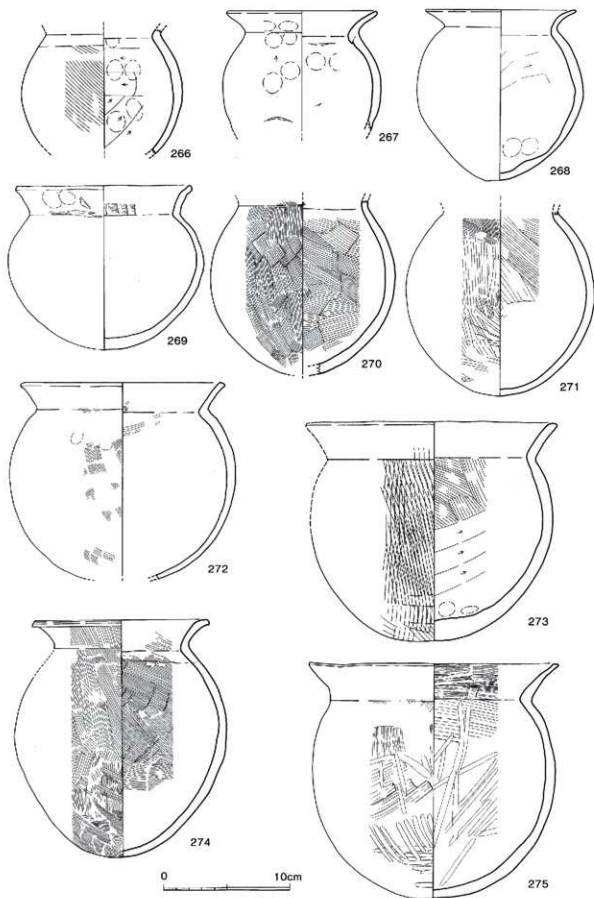
円筒器台
脚付鉢

第68・69図322～344は脚付の鉢である。脚は高坏と異なり、高さが低く、上部の鉢との接合部の面積が広い。脚のみの資料はこの点を目安に判断した。また、上部の鉢の形態も324～332の口縁部が外反するものや、333の口縁部が直口する境状のもの、334のボール状になるものなど、多様であるが、脚が付く形態でまとめた。さらに脚の形態も高坏の脚に近い335などから、342・343の鉢の底部に粘土を環状に付け外側に広げた低いものまでである。

322～332は口縁部が外反する形態の鉢に脚が付く資料である。322～324・331は脚が付く位置までの破片ではないが、器形から判断した。また、このタイプの資料でも、外反する口縁部の位置や長さで鉢の形態が異なる。322～326・331・332は鉢の中位から



第60図 北屋数ツル遺跡2号溝出土遺物⑧ (1/3)



第61図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ (1/3)

やや上位にかけての位置で屈曲し、大きく外反する形態である。その状況は、331以外は内面に稜を生じており、332の口縁部はあまり外反しない。

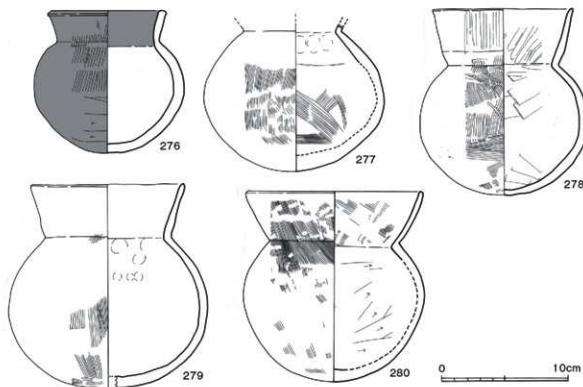
器面調整は、外面が縦方向の刷毛目であるが、323は横又は斜め方向の刷毛目の痕跡が残されている。さらに323・325は縦方向の粗いヘラ磨きを加えられているが、324は横方向である。内面も最初は横方向の刷毛目で調整されているが、その後には324は横方向、323・326は底部近くが縦方向、325は底部周辺のみ、332は屈曲部下位が横方向のヘラ磨きを加えられている。そして、324・325の内外面には最後に丹塗りをしている。

最下層出土

327～330の鉢は口縁部が短く屈曲外反する鉢に脚が付く形態で、322～326・331・332とは趣が異なる。327は脚端部を欠く資料であるが、口縁部が緩く如意状に外反する。器面は外面縦方向、内面が横又は斜め方向の刷毛目で調整しているが、外面は摩滅している。また脚部内面も横方向の刷毛目が観察される。溝の最下層から出土している。328は脚部を欠くが、胴部はほぼ直立し、口縁部が短く外反する。外面は上位を横方向、中位から下位を縦方向の刷毛目で器面調整し、さらに横方向の粗いヘラ磨きを加えている。内面は縦方向の刷毛目の後に縦いへら削りで仕上げている。

329・330はほぼ完形品である。329は328と類似する器形で、直立する胴部に短く外反する口縁部を持つ。外面は口縁部と脚部が横方向の撫で、胴部は縦方向の刷毛目である。内面は、内底部以外は横方向の連続した刷毛目で、脚部内側も同様である。外面には黒色斑が観察できる。330は胴部が外傾し、口縁部も他の3点に比較すると長く延びる。外面は口縁部から脚部まで短い単位の刷毛目で仕上げられており、内面は脚部が撫でであるが、鉢部は横方向の密な刷毛目の後に粗いヘラ磨きを加えられている。外面には黒色斑が観察できる。

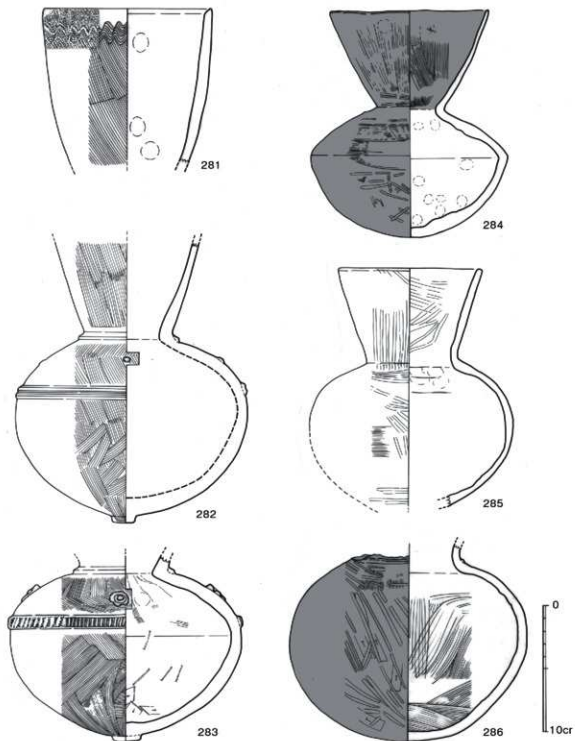
333は碗状の器種に脚が付くもので、器面調整に刷毛を用いず、内外面ともに撫での後にヘラ磨きで仕上げている。334は球状に胴部が張り、口縁部が短く立ちあがる形態の鉢に脚部が付く。脚部は欠くが、底部周辺の器面調整や、器面の変化で脚付と判断できる。外面から口縁部内面にかけ



第62図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物④ (1/3)

ては丹塗り研磨で、胴部内面は指圧痕やヘラ削りの痕跡が残る。

315～344は脚部を中心とした資料である。しかし、その形態は、「八」字状に広がる336・339～341・344、筒状になり中位で屈曲して広がる337、丸底の底部に環状の粘土を貼り付けたような低い脚が付く342・343などがある。315の外側は、粗い刷毛目の後に丹塗りで、脚部内面には刷毛目痕が残る。336は外側横方向の刷毛目の後に撫で、鉢部内面も同様であるが、脚部内面は撫でである。337の器面は脚内部以外縦方向の丁寧なヘラ磨きである。鉢部も比較的小型である。



第63図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物④ (1/3)

338も器壁が薄く丁寧な仕上がりで、器面は粗い刷毛目痕が残る。339の脚部は内外面撫でであるが、鉢部の内面には刷毛目が残る。340は刷毛目の後に撫でで仕上げているが、脚部上位に未貫通の1対の孔痕跡がある。全面ススが附着している。341は板状の道具で外面は縦方向、内面は横方向の撫でで仕上げているが、鉢部内面はヘラ磨きされている。342の脚部は外面が縦方向、内面が横方向の刷毛目調整である。343の外面は刷毛目の後に脚部は撫でで仕上げているが、鉢部は指圧痕が残り、内面には粗い刷毛目が残る。344は横方向の撫で仕上げであるが、内面には脚部を鉢部に取り付ける際の補強用の粘土塊が観察できる。

小型の鉢

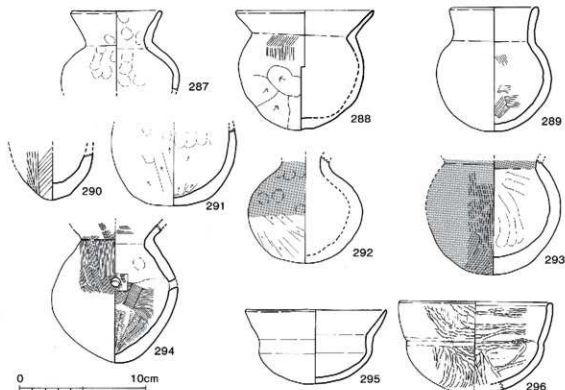
第70・71図345～368は丸底の底部から口縁部にかけて、内湾気味に立ちあがり、口縁部は屈曲しない形態になる小型の鉢である。しかし、器形は器高や口縁部形態で見ると4形態に分類できる。皿状になる345～349、浅鉢状の350～354、器高が高く深みを持つ塊形の355～365、口縁部がわずかに外反する比較的大型の366～368に分類できる。

皿状

皿状になる345は口縁端部が横撫で、胴部には内外面に指圧痕が残り、手握ね感が強い。346はほぼ完形品で、口縁部は横撫で、内部は細かい刷毛目、外面は削り状の撫で跡が観察される。437も完形品で、外面は粗い刷毛目、内面は撫でで仕上げられ、外面に黒色斑がある。348は外面が斜めの刷毛目の後に横撫で、内面は撫でで器面調整している。349の口唇部は横撫でであるが、外面は縦や斜め方向の刷毛目で、内面は撫での後に縦方向のヘラ磨きで器面を整えている。

浅鉢状

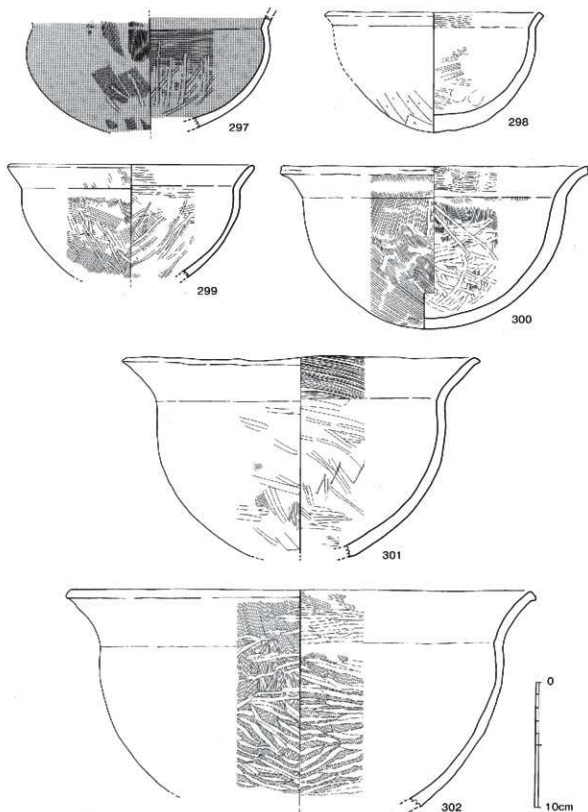
浅鉢状の350・351は、外面が横や斜め方向の刷毛目で、その後には撫で、内面は撫での後にヘラ磨きされている。352は外面が横方向の削り痕跡があり、さらに撫でが加えられ、指圧痕が残る。内側は内底部から口縁部にかけて放射状のヘラ磨き痕が観察される。353は外面が、縦や斜め方向の刷毛目の後に横撫で、内面は斜め方向の刷毛目で、内底部はヘラ磨きで器面を整えている。354は口縁外端部を凹むように強く撫で、外面は斜め方向の刷毛目、内面は横撫での後に横方向の丁寧なヘラ磨きで器面調整している。



第64図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物④ (1/3)

埴形

器高が高い埴形の355は口縁部が内湾し、外面が横から斜め方向の刷毛目、内面が撫での後に、外面は斜め、内面は縦方向にヘラ磨きされ、さらに全面丹塗りで仕上げられている。356・357は遺存状況が悪く、器面に剥落が目立つ。残された部分からは、全面ヘラ磨きで、356は外面のみ、



第65図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物④ (1/3)

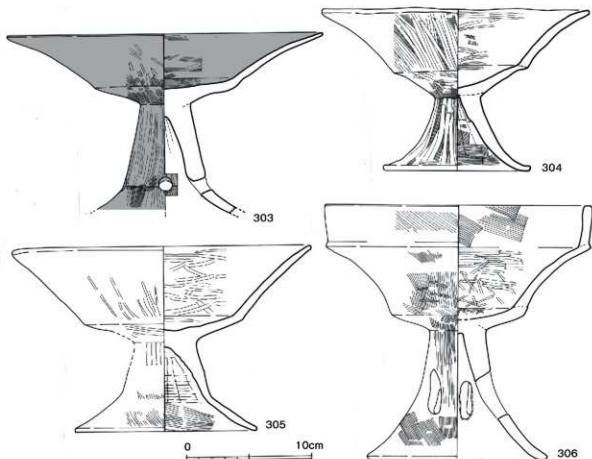
357は全面が丹塗りされていることが判る。358の口縁部周辺は横撫でで、内外面はヘラ削りで、さらに横撫でしているが、底部に削りの痕跡が残る。359は内外面ともに斜め方向の刷毛目の後にヘラ磨きされており、さらに外面から口縁部内側まで丹塗りしている。360は内外面ともに斜め方向のヘラ磨きで、内面はさらにヘラ磨きで器面を整えている。361の口縁部外面は横撫でであるが、他は横方向を主体とした刷毛目で、内面底部周辺はさらにヘラ磨きを加えている。362は内外面ともに縦又は斜め方向の刷毛目で、外面下位は撫での跡がある。

363~365は口径に比較し器高が最も高くなる形態で、363の外面は粗い刷毛目で、内面には細かい横方向の刷毛目の後に撫でや指圧痕が残る。364は口縁部撫で、内外面ともに斜め方向の刷毛目の後に、口唇部は横、内外面は縦方向を主体のヘラ磨きで器面調整している。365は、ほぼ完形品で、内外面ともに、斜め方向の刷毛目の後に外面は撫で、内面はヘラ磨きで器面を整えている。

口縁端部がわずかに外反する366は、口縁部は横撫でであるが、外面は縦、内面は斜めの刷毛目調整で終わっている。367の外面は口縁部が横撫で、胴部は縦方向の刷毛目の後に横方向を主体のヘラ磨き、内面は横方向の刷毛目の後に縦方向のヘラ磨きで仕上げている。368の外面は縦方向の刷毛目の後撫で、内面は斜め方向の刷毛目の後に横方向のヘラ磨きで、器面を整えている。なお内面底部に丹塗りの痕跡があり、位置から丹を入れた容器と考える。

瓶

第72図369~374は底部に焼成前の穿孔がある器種で、瓶と考える。この器種の判定は底部のみで可能であり、6点が検出できた。369は全体を理解できる資料であるが、底部に直径2cmの孔が開けられ、全面指撫の後に縦方向の主体の刷毛目が付けられ、内面は口縁部を残してヘラ削りされている。全体的に器壁が厚く、全体にススが附着している。370~372は底部の穿孔部周辺であ

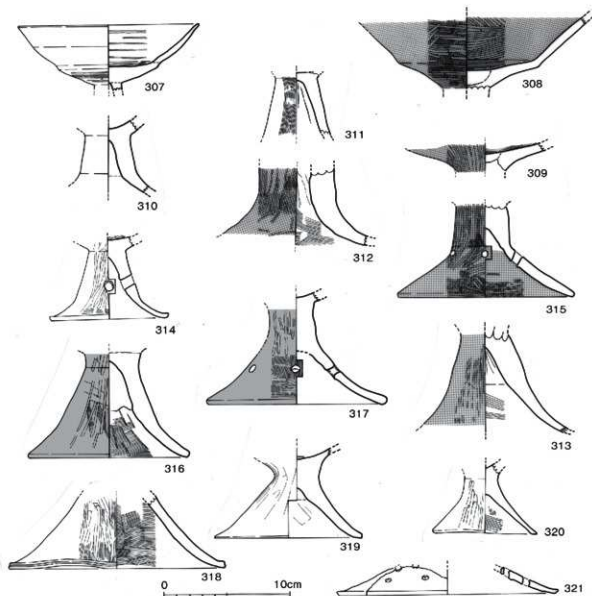


第66図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物等 (1/3)

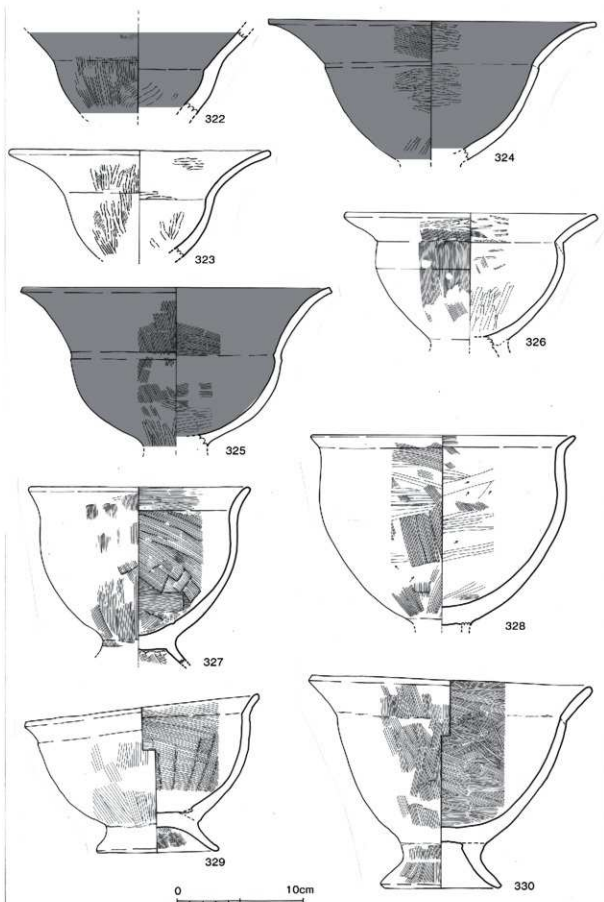
るが、器面は刷毛目調整で、外面縦方向が371・372、横方向が370、内面縦方向が372、横・斜め方向が370・371であり、370・372の底部はヘラ削痕が残されている。

373の胴部は内外面ともに縦方向の削りで形を整え、さらに外面は縦方向の刷毛目、内面上位を刷毛目であるが、下位はヘラ磨きしている。374は穿孔部が突出し、強調される造りである。外面は縦方向、内面は斜め方向の刷毛目で、穿孔部周辺は指押さえて形を整えている。外面の一部と穿孔部内面にススが附着している。

ミニチュア土器 第72図375～390はいずれも小型で、手捏ねされているため、指圧痕が明瞭に残り、ミニチュア土器と考える。375～383は345～365を模した形態と考えられ、皿状の375・376、浅鉢状の377・378、口径に対し器高が高い塊状になる379～383と分類できる。成形にあたっては、手捏ねであるため、口縁部は小さく波打ち、指押さえの痕跡を残しながら仕上げている。中には、378の内面には刷毛目状の横撫で痕、381の外面に刷毛目、382の内面の横方向のヘラ磨きとヘラ削り、383の内面全面の横方向の刷毛目による器面調整など、一般の土器と同様な器面調整痕を残すものもある。384は球形丸底の胴部に、短く直口する口縁部が付く器形であることから、小型丸底壺の



第67図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ (1/3)



第68図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑥ (1/3)

276~280・289を模した土器と考える。

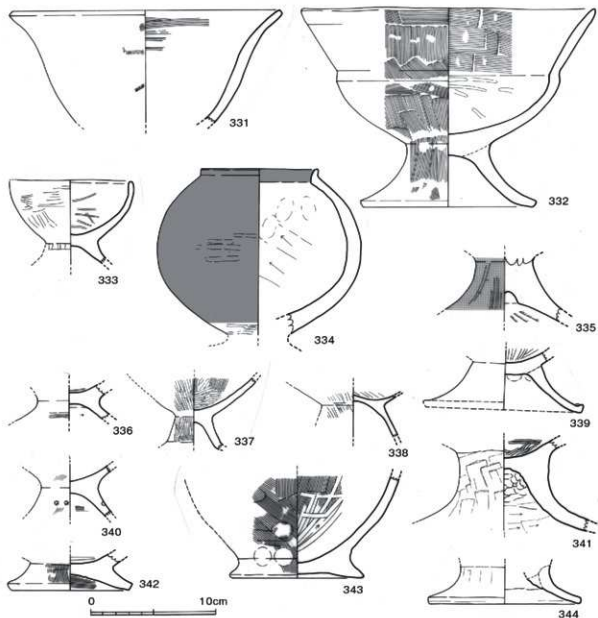
385は厚い底部が平底状になっているが、自から立つことはできない。379に類似する形態であり、先に挙げた壺形に属すると考える。外面は撫で、底部周辺に指押さえ痕があり、内面は不定方向に刷毛目で器面調整し、最後に撫でを加えている。口縁部外面には丹が帯状に塗られている。

386は甕形土器を模したと考える。胴部上位が外反し、横撫でで口縁部を形成し、胴部外面は指押さえ、内面の一部には斜めの刷毛目が観察できる。さらに器面は全面にわたり丹塗りしている。

387も甕形土器を模した形態である。口縁部の一部を欠く資料で、全面に指押さえ痕が残る。尖り気味の丸底や中位で最大径となる胴部、外反する口縁部など、写實的に模倣している。

388は口縁端部を欠くが、残された部分から、内側に屈曲することが判る。このことから、複合口縁の壺形土器を模していることが理解できる。ミニチュア土器であるが、器面に指押さえ痕跡を残さず丁寧に撫でて仕上げている。

389は薄い器壁で直立する口縁部下に刻み目のある突帯を廻らせ、胴部は内側に段を設けて器壁



第69図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑦ (1/3)

第2節 調査の結果

を厚くし、丸底の形態となる。この形態を相似形で拡大した器種は無いが、直立する口縁部や内側の段などから、頸部のくびれを省略した複合口縁壺を摸したと考える。外面は撫でで平滑に仕上げているが、内面には指押さえ痕が残る。

390は底部から胴部の資料で、器形は不明であるが、外面が撫で仕上げ、内面に指押さえ痕が残り、器壁が厚い。

第72図391~393も小型土器である。391は脚付の鉢で、327~330のミニチュア土器とも理解することも出来るが、造りが丁寧で、手捏ね感が乏しい。胴部は内外面とも撫でであるが指押さえ痕が残る。胴部下位から脚部は刷毛目で器面を整えている。胴部下位から脚部、脚部の接地部までススが附着している。

丹入容器

392は口縁部と脚端部を欠くが、391と同形態と考える。器面は外面が横方向の刷毛目の後に内外面ともに縦方向のヘラ磨きで丁寧に仕上げているが、脚部接合部には指押さえ痕が残る。なお、鉢部内面には丹塗りされており、丹を入れる容器の可能性を持つ。

製塩土器

393は胴部以上を欠く資料であるが、脚部は横撫で、胴部との接合部は内外に指痕が残る。胴部外面は斜め方向の叩き調整の痕跡が残り、内面は刷毛目痕があるが、剥落が激しい。全体的に二次焼成を受けており、他の県内遺跡の類例から製塩土器と考える。

砥石

第73・74図394~404は2号溝から出土した大量の土器に伴う石器・土製品である。394は自然面を持つ安山岩製の横剥削片を素材とし、打面と反対側の側縁の主要剥離面側に二次加工を加えて刃部を形成している。打面部分は欠損している。

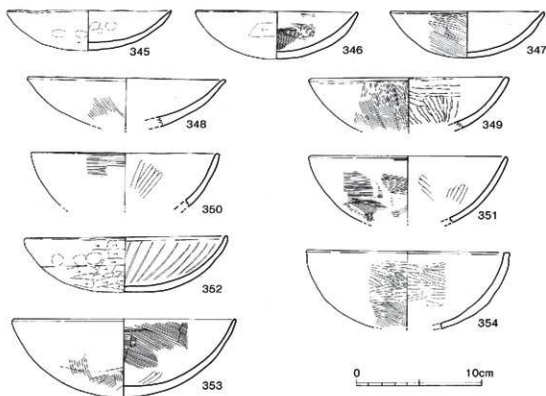
フイゴ羽口

395は砥石である。大部分を欠くため、三面で使用の痕跡を認めることが出来るが、本来は四面とも使用されていたと考える。泥岩製で、仕上げ砥石である。

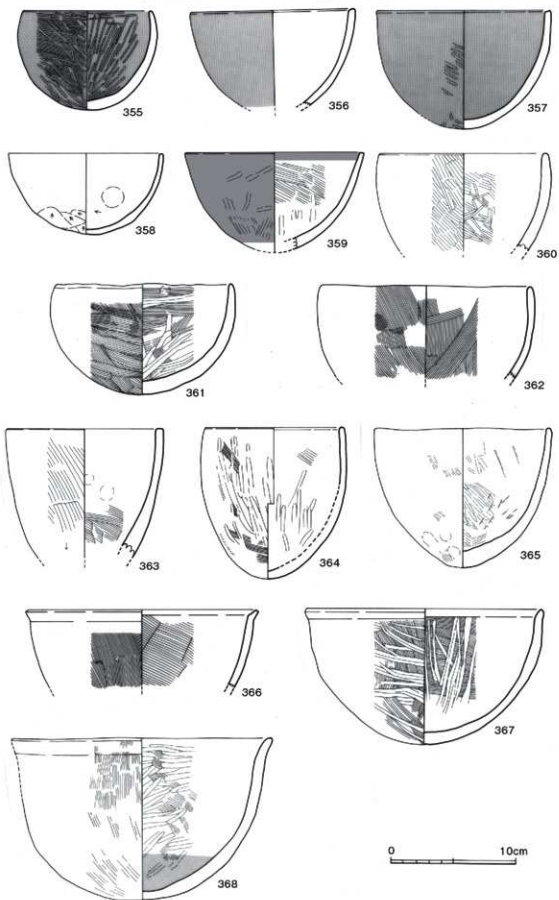
磨石・叩石

396は土製品であるが、直径約8cm、内径約5cmの円筒形が想定され、フイゴの羽口と考える。

397~404は安山岩製の河原石を素材とした磨石・叩石である。いずれも掌中に収まる程度の石



第70図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑧ (1/3)

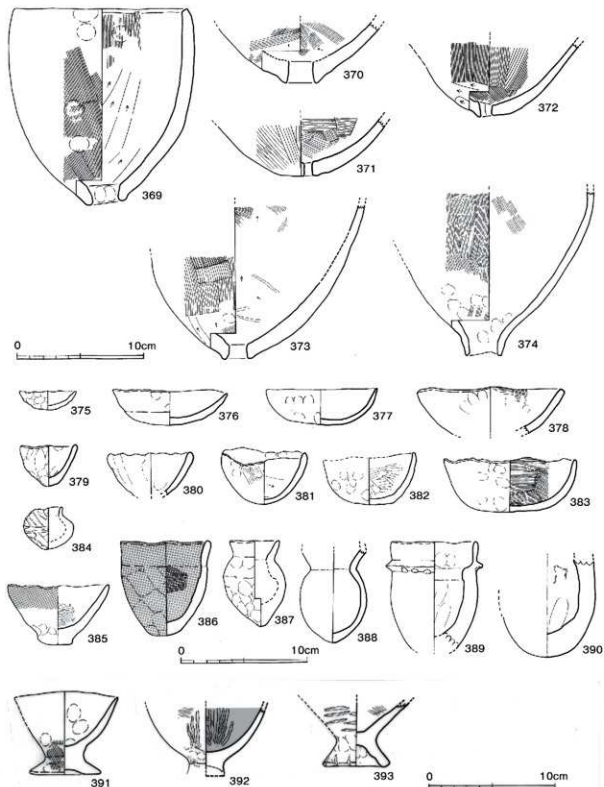


第71図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ (1/3)

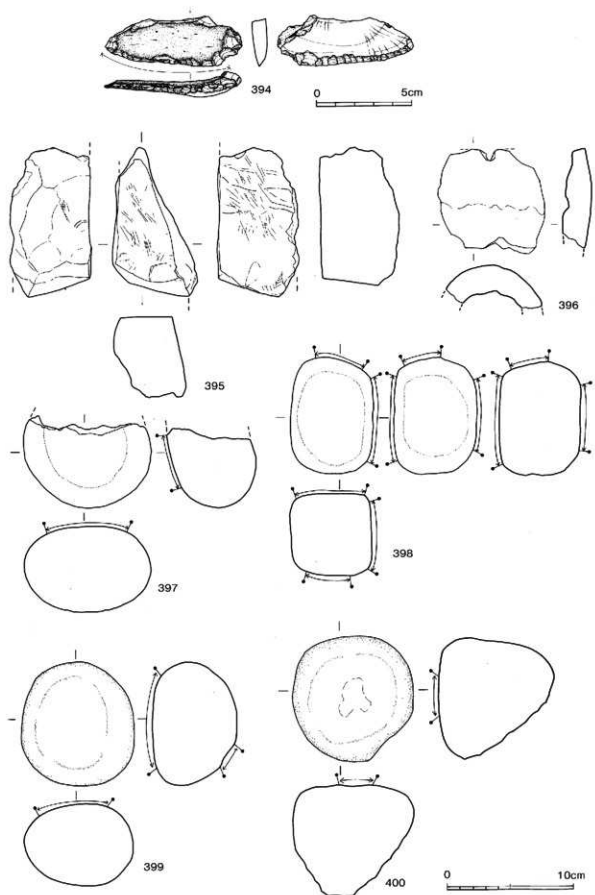
第2節 調査の成果

材を用いている。397は半分欠けている。398は一部を欠くが、図上の下端面が未使用で、それ以外はほぼ全面に磨滅痕が残る。399～402は一面にのみ使用痕が観察されるが、399は磨り面の反対側、400・402は磨り面と同じ面に敲打痕が残り、叩石としても用いられている。

403は叩石である。両面の中央部に敲打痕跡が観察できる。周辺には明確な磨り面が形成されて



第72図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑨ (1/3)

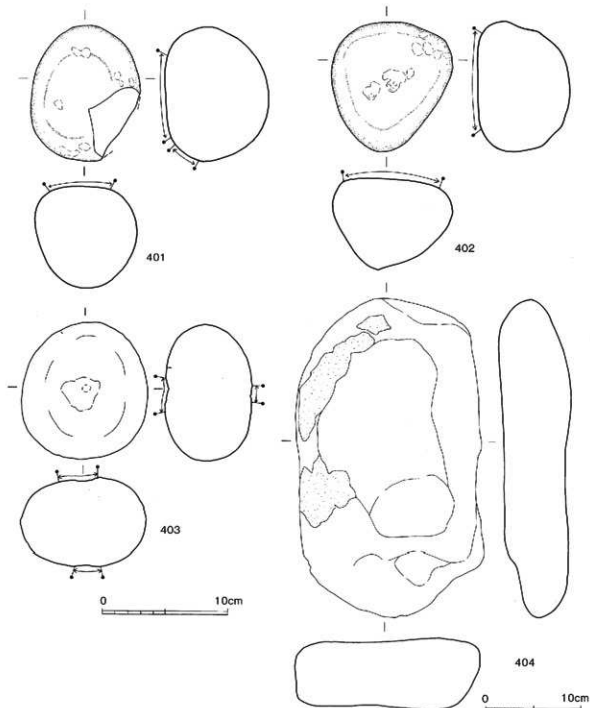


第73図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物⑥

いない。

石皿 404は石皿と考える。扁平な安山岩製で、図示した一面にのみ中央部に使用痕が残るが、火災等により被熱しており、周辺部は赤色に変化し、剥落している。

以上、北屋敷ツル遺跡2号溝から出土した遺物は、弥生時代終末から四世紀末～五世紀初頭の遺物が混在する状況である。その器種も多様であり、集落内で使用していたほとんどの土器が存在すると想定でき、土器の時期幅が、同時に集落の存続時期とも考えることができる。また、溝の北端部は、調査区北側にある低地へと続いた状況で途切れている。一方、溝は調査区外となる南の高台へと続くが、集落を囲むか、台地を区切るかは判断することができない。



第74図 北屋敷ツル遺跡2号溝出土遺物㊦ (1/3・1/4)

(4) 各地区出土遺物

第75～78図405～435は、北屋敷ツル遺跡の遺構検出中あるいは、縄文時代包含層を調査中に混入して出土した遺物である。

複合口縁壺

405・406は複合口縁壺形土器の口縁部である。2点とも内外面刷毛目調整の後に外面に櫛描波状文を施文しており、さらに406は内外面ともに丹塗りしている。

407は、2号溝を検出中に上面から出土した破片を接合したもので、2号溝出土としても間違いない。口縁部外面は櫛描波状文の後に山形の沈線文が加えられており、頸部から下位は縦方向主体の刷毛目調整で、さらに粗い縦方向のヘラ磨きをしている。また、頸部と胴部の接合部には揃み上げたような断面三角形の突帯が廻り、リボン状の浮文が付く。さらに胴部上位にも突帯が廻り、矢羽根状の刻み目が加えられ、その上位に扁平な瓢箪形の浮文が貼り付けられている。口縁部内面は縦方向の指押さえの後に横方向の丁寧なヘラ磨きで、頸部から胴部上位に欠けては横または斜め方向、胴部下位は縦方向の刷毛目調整をしており、さらに粗いヘラ磨きを加えられている。なお、最終的には、外面全面を丹塗りしている。

408・409は、縄文時代包含層を掘り下げ中に検出できなかった弥生時代の遺構から出土したものである。408は壺形土器の頸部を欠く資料で、胴部外面は縦方向の刷毛目調整の後に粗いヘラ磨きで、内面は肩部に指圧痕が残る。上位は横、下位は縦にヘラ磨きされているが、全体的には撫でて平滑に仕上げている。409は、外面が縦方向主体の刷毛目であるが、底部周辺は磨滅している。内面は上位が斜め方向主体の刷毛目で、下位はヘラ削りで器壁を薄くしている。

壺形土器

410～414は壺形土器である。410は外面横撫で、内面横方向のヘラ磨きの口縁部である。411は、胴部が比較的球状に張る壺形土器であろう。口縁部内外面ともに横撫で、外面は縦方向、内面は斜め方向の浅い刷毛目で器面調整している。

412～415は長胴形の胴部を持つ壺形土器である。412の外面は、縦方向主体の刷毛目調整の後に口縁部は横撫で、頸部は粗い横方向のヘラ磨き、胴部は撫でて指押さえが残る。内面は上位から下位にかけて、横・斜め・縦に方向を変化させながら刷毛目で器面を平滑に仕上げている。なお外面には全面にスガが付着している。413は外面が縦方向の刷毛目調整の後に口縁部を横撫で、内面は胴部上位を横、中位から下位を縦方向の細かい刷毛目で、口縁部は横方向のヘラ磨きで仕上げている。414は口縁部と底部を欠くが、胴部外面は縦方向、内面は斜め方向主体で、底部近くは横方向の刷毛目調整で整えている。なお、外面にはスガが付着している。

415は小さな平底を残す壺形土器の底部である。外面刷毛目、内面ヘラ状の工具で撫でている。外面にはスガが付着し、内面には煮焦げの跡が残る。

鉢形土器

416～418は口縁部の形態は異なるが、器高に対し口径が大きいことから鉢形土器として報告する。416は、口縁部が大きく広がり最大径となる。器面調整の刷毛目は外面を縦、内面は口縁部のみに予行方向に観察できる。417も口縁部が大きく開くが、胴部も張る。器面調整は、外面が縦、内面が横方向であるが、最終的には撫でて消されている。418は、口縁部が短く屈曲する。器面は、口縁部は内外面横方向のヘラ研磨で、胴部は内外面縦方向主体の刷毛目調整で、内面はさらに縦方向のヘラ磨きをしている。

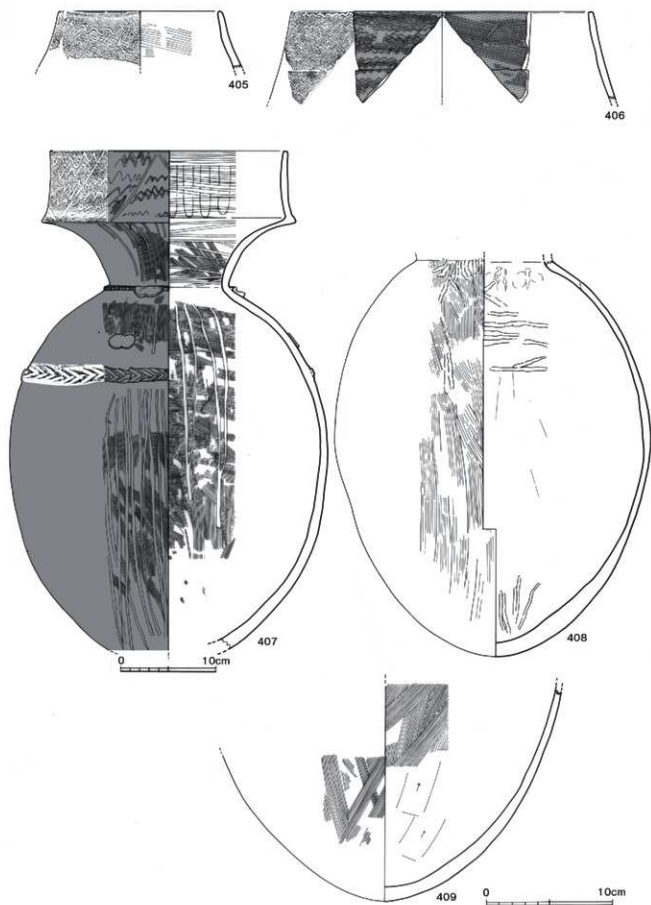
高坏・器台

419は高坏または器台の口縁部である。口縁部は肥厚し、平坦面を形成している。そこに櫛描波状文と小さな円盤状の浮文を付けている。口縁部以外は丁寧な横方向のヘラ磨きで仕上げ、全面丹塗りしている。420の高坏は脚部を欠くが、口縁部は外傾し、先端部で反る。内底部はほぼ平坦である。全面横方向の撫でである。

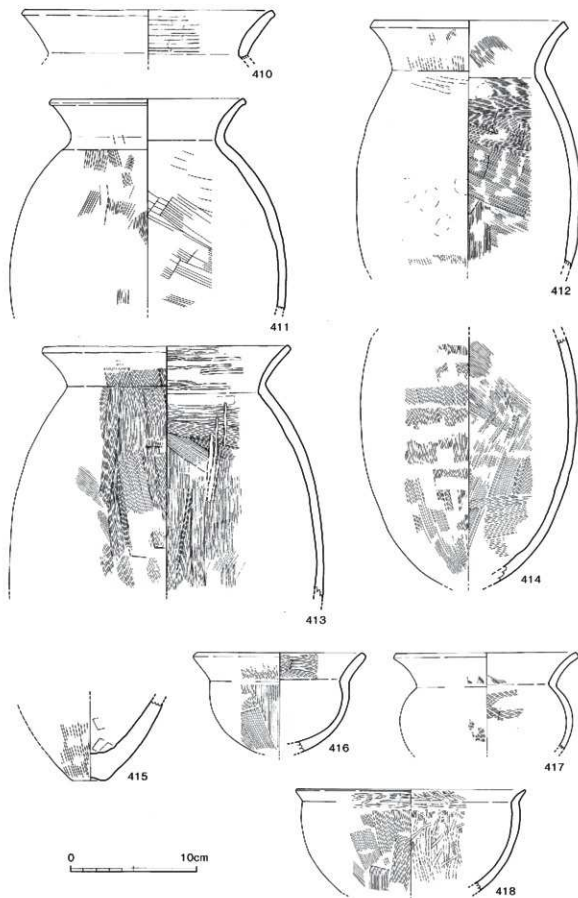
壺形土器

421～423は口縁部が直口する壺形土器である。421の口縁部外面には三条の平行沈線が施文されている。外面は斜め方向の刷毛目、内面はヘラ磨きである。422は外面が斜め方向の刷毛目で、

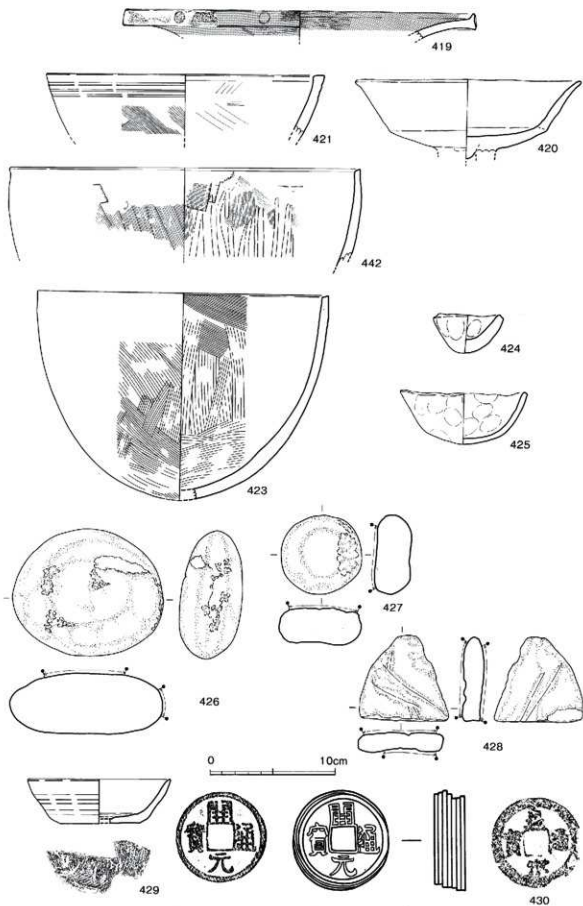
第2節 調査の成果



第75図 北屋敷ツル遺跡各地区出土遺物① (1/3・1/4)



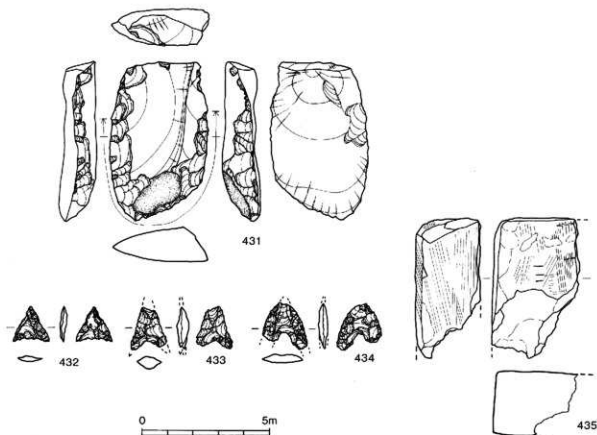
第76図 北屋敷ツル遺跡各地区出土遺物② (1/3)



第77図 北屋敷ツル遺跡各地区出土遺物③

内面は横や縦方向の刷毛目の後に縦方向のヘラ磨きである。

- ミニチュア土器 424・425は手握ねされた壙形土器で、全体に指押さえの痕跡が残る。ミニチュア土器である。
- 磨石 426・427は安山岩の円礫を素材にした磨石である。426の磨面は一面であるが、側縁に敲打痕跡があり、叩石としても使われている。427も使用面は一面のみであるが、同じ面の端に敲打痕が残されている。
- 軽石製品 428は縄文時代の包含層から出土した軽石製品である。扁平で三角形をし、両面に断面V字の溝が残されている。砥石の可能性もある。
- 土師質土器 429・430は中世の遺物である。429は土師質土器の坏で、糸切り底である。口縁部の立ち上がりが高く、口径も小さいことから15世紀前半と考える。430は融着した7枚の銭貨である。片面に唐の621年初鑄の「開元通寶」、もう一面に北宋の1038年初鑄の「皇宋通寶」が判読できる。
- 431は流紋岩製の縦長剥片を素材とし、主要剥離面側から打面以外の縁辺部に二次加工を加えた削器または掻器である。石器素材や加工状況から旧石器時代の石器である。
- 旧石器 石鏃 432～435は石鏃である。432は2号住居跡出土で、基部の抉りがほとんど無く、小型で三角形をしている。サスカイト製である。433は先端部と脚部の一部を欠く姫島産黒曜石製の石鏃である。434は先端部と両脚部の端部を欠く石鏃で、基部の抉りが深い。姫島産黒曜石製である。3点の石鏃の内、抉りの深い434は縄文時代に帰属する可能性が強い。
- 砥石 435は砥石の破片と考える。割れ口以外の全ての面に使用痕を思わせる線状の痕跡を観察することができる。頁岩製である。



第78図 北屋敷ツル遺跡各地区出土遺物④

第3節 結語

県道小狭間大分線に伴い発掘調査した北屋敷ツル遺跡の場所は、遺跡の主体部があると想定できる標高約110mの高台から北側の谷水田部分に続く急斜面部で、遺跡本体の北側縁辺の一部を明らかにしたに過ぎない。それでも発掘調査で確認された時代は、古墳時代前期の集落を中心に、古くは旧石器時代・縄文時代中・後・晩期、新しくは15世紀代までの遺物が出土した。

旧石器時代 旧石器時代の遺物は流紋岩製の石器が1点のみ、遺構検出時に出土したが、周辺には旧石器時代のナイフ形石器や剥片を出土した下黒野遺跡や赤野原遺跡がある。旧石器時代の遺跡は台地の縁辺に立地する 경우가多く、調査区の南側の高台の平坦部に、有望な包含層が存在する可能性が高い。

縄文時代 縄文時代の遺物も出土量は少ないが、中期の土器は瀬戸内系で、後期初頭の土器群は、東九州的な様相を示し、同じ大分水系の支流である大分市野津原町下原遺跡の状況と類似している。また、晩期後半の土器群は下黒野遺跡の様相と類似している。縄文時代についても、調査区南側の高台平坦地に良好な状況で遺構や包含層が残されている可能性を示している。

今回の調査区の主体となるのは古墳時代前期の集落で、第5章で報告する由布川小学校遺跡から出土した土器に比較すると、北屋敷ツル遺跡の土器は新しい傾向が強い。また、調査区が遺跡の本体の北側急斜面地であるにもかかわらず、7基の堅穴住居跡を確認し、地形的に考えても南側高台に大規模な集落の存在が想定できる。

ところで、大分県内の弥生時代後期から古墳時代前期の集落は、沖積平野の微高地上のみならず、あらゆる場所で確認され、発掘調査が行われている。北屋敷ツル遺跡に類似する地形では、阿蘇外輪山に源を發し、別府湾に注ぐ大野川の上・中流域の標高200～600mの火山性台地上でも、多くの集落遺跡が調査されている。

こうした遺跡の特徴は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、集落遺跡が爆発的に出現する。遺跡からは鉄鍬・鉄斧・刀子などの狩猟・戦闘・加工用の鉄製品に加え、収獲具である鉄製の摘録も多く出土する。このことから、集落を支える生産体制として、台地を浸食する谷部での水田耕作や台地上での雑穀栽培などを想定している。

雑穀栽培 ところで、北屋敷ツル遺跡の周辺地形を見ると、由布山・鶴見山の山塊から東に延びる尾根の先端が、標高約100～110mで平坦部を形成している。しかし、台地上は平坦ではなく、中央部に東西方向に延びる浅い谷が開析しており、現在は近世の水路整備により水田化し、南側と北側の土地利用状況は宅地と畑地である。

鉄製摘録 発掘調査は、この水田部と宅地・畑地の境界部分の調査であったため、生産道具として良好な資料はないが、東に約400m離れた由布川小学校遺跡からは大野川中上流域と同様な鉄製の摘録が出土している。このことから、由布川小学校遺跡同様に、周辺の低湿地を利用して稲作や雑穀を栽培していたことが想定される。さらに、磨石・叩石・石皿の出土は堅果類の食用処理を意味する。こうした遺物の存在が、集落を支えていたことを推測させる。

堅果類 また、距離的に近い由布川小学校遺跡との間には低湿地があるため、連続しないが、互いに関連したと推測される。時期も由布川小学校遺跡が弥生時代後期中頃出現するのに対し、北屋敷ツル遺跡は古墳時代からであり、台地上の同じ谷部での生産活動の結果、集落の拡大として、後者をとらえることもできる。

集落拡大

第4章 石風呂遺跡

第1節 調査の方法と遺跡の概要

1 調査の方法と経緯

県道小決間大分線の道路改良工事に伴う発掘調査は、周知遺跡である由布川小学校遺跡内を通過するため、平成5年度に確認調査を行い、平成6年8月から本調査を実施した。ところが、周辺の道路工事予定地内を踏査すると、遺跡が存在する可能性が高い地形や、遺物の散布地を確認した。そこで、由布川小学校遺跡を調査中の平成6年12月5日から12月7日の間、遺跡の有無を確認するために試掘調査を行った。その結果、3ヶ所は発掘調査が必要な遺跡であることがわかった。

この3ヶ所の名称は、試掘調査時点では、由布川小学校遺跡の連続と考え、Ⅰ～Ⅳ区に続き、Ⅴ区・Ⅵ区・Ⅶ区とした。本調査を実施するにあたり、字図調査と周辺の微地形を観察したところ、Ⅴ・Ⅵ区は字名が石風呂で、Ⅶ区が北屋敷ツルに該当することがわかった。そこで、Ⅴ・Ⅵ区を字名に従い石風呂遺跡として発掘調査を行った。

石風呂遺跡の調査は平成7年5月11日から開始した。調査区内には南北方向に里道・町道や水路が横切るために、調査区全面を一気に表土掘削することが不可能であった。そこで、これらを生かしながら、西側から表土掘削を行い、1区・2区・3区・4区と区分けた。その結果、調査面積は約2100㎡となり、平成7年10月13日で調査は終了した。

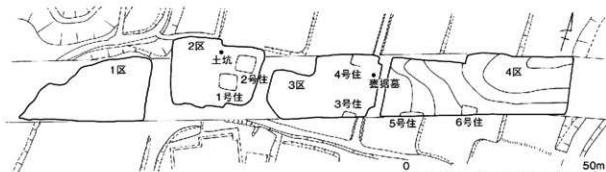
なお、調査区は、字名が異なるため、別遺跡として調査し、報告するが、地形的に見ても、遺構の展開からも、当遺跡は北屋敷ツル遺跡と一連のもので連続する。

2 調査の概要

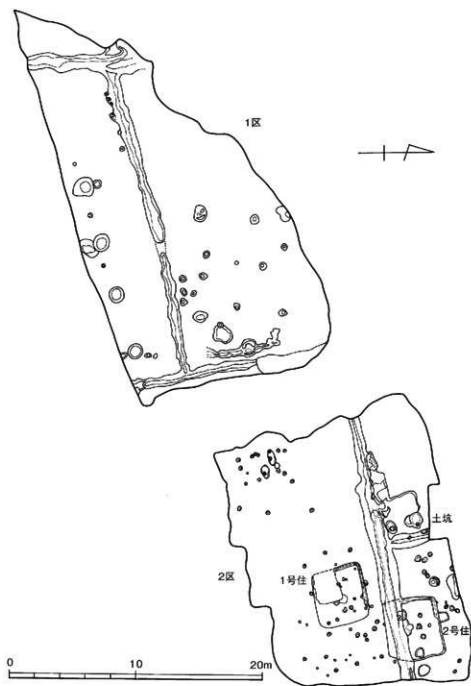
調査の結果、弥生時代後期末から古墳時代前期と中世・近世の遺構を検出した。弥生時代後期末から古墳時代前期の主要遺構は、西端の1区ではほとんど確認されず、2～4区にかけて、一部のみ検出したものを含むと、堅穴住居跡6基・土坑・小児壺棺1基を確認した。傾向として浅い谷の頭部を取り巻くように展開する。

また、中世から近世にかけての遺構は、掘立柱建物跡・溝状遺構を検出した。掘立柱建物は3区東側から4区西側にかけて集中的に検出された。特に、4区西側は規則性を持った配置をしており、少なくとも数棟の掘立柱建物が復元できる。さらに柱穴内から、底部に穿孔のある糸切り底の土師質土器小皿が出土し、中世と判断できる。近世の遺構として、1・2区で溝が確認され、近世陶磁器が多数出土している。溝の方向は、現在の水田と一致している。

なお、資料に一部不明な部分があり、掘立柱建物の復元図は図示できなかった。また、遺物の一部にも北屋敷ツル遺跡を当初石風呂遺跡Ⅶ区として調査したため、混乱がある。



第79図 石風呂遺跡調査区全体図 (1/1000)

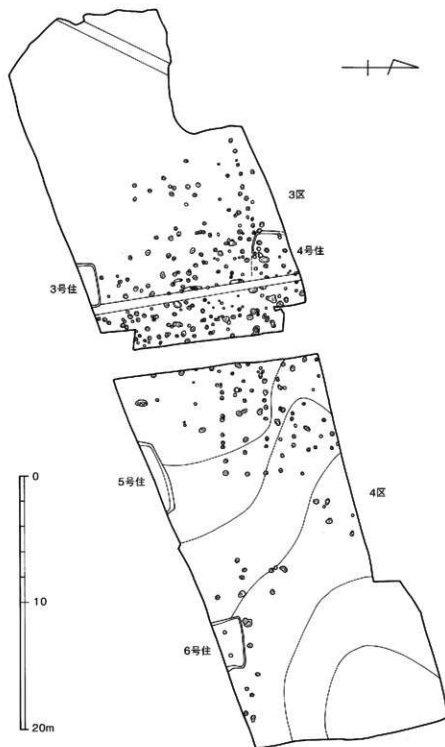


第80図 石風呂遺跡1・2区遺構分布図 (1/300)

第2節 調査の成果

1 遺構

石風呂遺跡の調査区は台地中央部を東西方向に延びる浅い谷の谷頭部分にあたる。水路や里道の関係で1～4区に分けて調査を実施したが、第80図に1・2区、第81図に3・4区を図示した。全体の傾向として、谷頭を囲むように遺構が分布し、最西端の1区では近世の遺構以外は検出されない。



第81図 石風呂遺跡3・4区遺構分布図

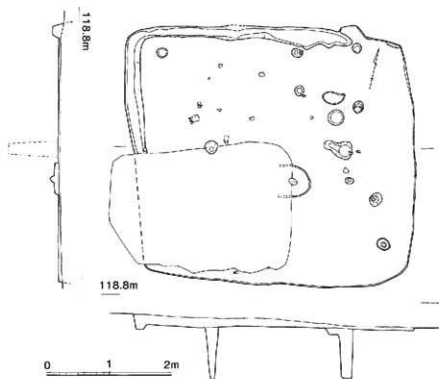
(1)住居跡

竪穴住居跡は6基確認したが、4号住居跡は上面が削平されており、5号住居と6号住居は大部分が調査区外となっていた。そこで、全体を確認できた1・2号住居、焼失住居の3号住居を報告する。

1号住居

(第82図)

1号住居は2区で検出された竪穴住居で、南北約40m、東西約4.5mの長方形をしている。南西部が攪乱されているが、中央部の長軸方向に柱穴が2ヶ所検出された。また、西壁と北壁沿いの床面では壁溝が確認されている。住居跡の時期は古墳時代初頭と考える。

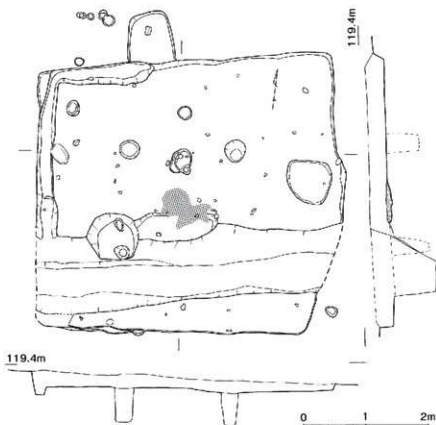


第82図 石風呂遺跡1号住居跡実測図 (1/60)

2号住居

(第83図)

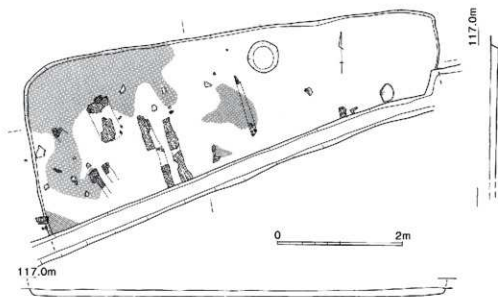
2号住居は1号住居の東北側に隣接して検出された東西約4.7m、南北約4.3m



第83図 石風呂遺跡2号住居跡実測図 (1/60)

地床炉

の竪穴住居である。住居の南側を東西方向に近世の溝が掘り込まれている。床面では中央北寄り
東西方向に2ヶ所柱穴が検出されており、中央部では地床炉と考えられる焼土が広がっている。さ



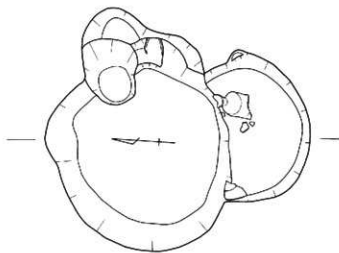
第84図 石風呂遺跡3号住居跡実測図 (1/60)

らに南側の柱穴も、近世溝で掘削された部分に2本が想定され、四本柱の住居と考えられる。

3号住居 (第84図)

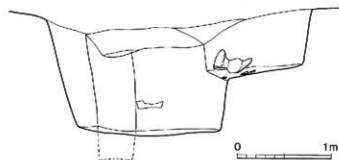
3号住居は3区の南側壁沿いで検出された。同様な状態で4区で5・6号住居も検出されている。大部分が調査区外であるため、竪穴住居の規模が東西約6.0mである以外は、柱の数など不明である。ただ、床面を検出した際に、南北方向に並ぶ炭化材や焼土が確認され、火災を受けた住居の可能性が強いことが推測できる。住居跡の時期は古墳時代初頭と考える。

火災住居



(2)土坑 (第85図)

図示した、土坑は2区の北寄りで検出した。遺構は上面の直径約2.0m、底面径約1.5m、深さ約1.2mと上面径約1.6m、底面径1.3m、深さ0.7mの二つの



第85図 石風呂遺跡土坑実測図

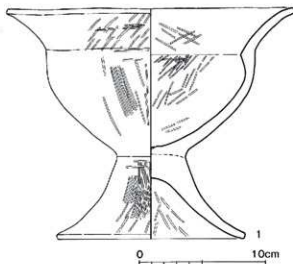
第2節 調査の成果

円形堅穴土坑が切り合っている。前後の関係は、第86図に図示した遺物が出土した小さい土坑が古い。

脚付鉢

1は脚付の鉢で、床面直上からの出土で、遺構の最終的な時期を示す。外面は、口縁部が横方向、胴部から脚部にかけては縦方向の刷毛目調整の後に、口縁部は斜め、胴部以下は縦方向主体のヘラ磨きで器面調整している。内面は、口縁部が斜目、胴部と脚部内側は縦方向のヘラ磨きで整えている。

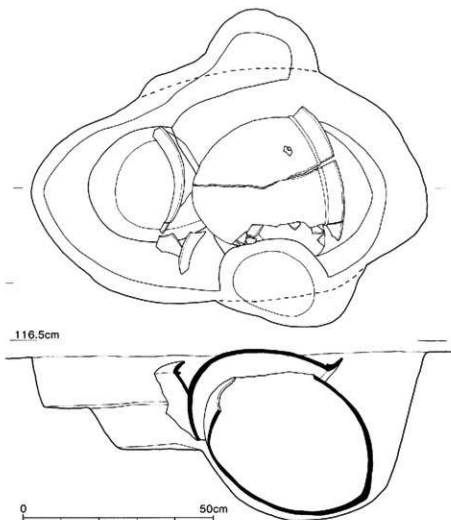
時期は弥生時代後期末から古墳時代初頭と考える。



第86図 石風呂遺跡土坑出土遺物

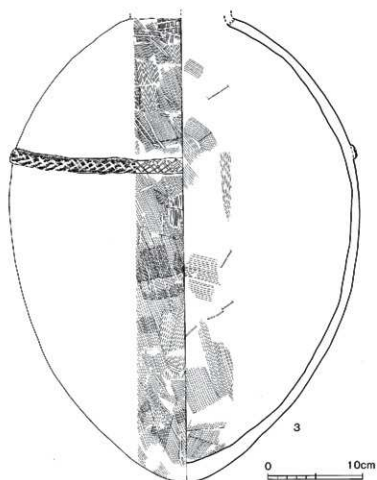
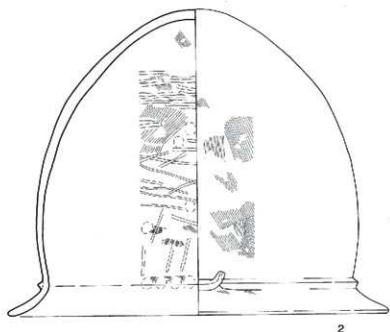
(3) 甕棺墓 (第87図)

甕棺墓は、3区の東壁近くで検出



第87図 石風呂遺跡甕棺墓実測図 (1/30)

した小児甕棺である。3区から4区にかけて南側壁沿いで検出した3基の住居跡の北側で、地形的には谷頭にあたる。埋納状況は、斜めに複合口縁壺形土器の肩部から口縁部を欠いた部分を納め、



第88図 石風呂遺跡甕棺墓実測図

さらに口径の大きい甕形土器を被せている。内側最長軸で約50cmである。

第88図2・3は使用された土器を図示したものであるが、2は頸部に断面三角形の突帯がめぐる甕形土器で、外面は刷毛目、内面は刷毛目の後に粗いヘラ磨きで器面調整している。3は胴部に格子状の刻み目が付く突帯が廻り、内外面共に刷毛目で整えている。

古墳時代初頭の土器を転用している。

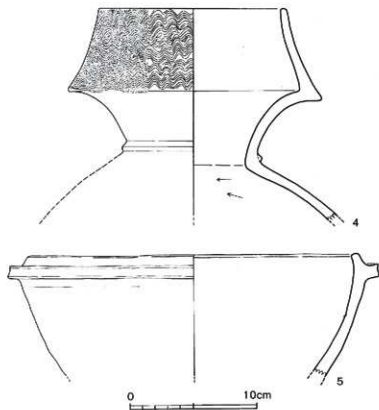
2 各地区出土遺物

第89・90図の4～6は調査中に出土したもので、4は口縁部に櫛垣波状文のある複合口縁壺で、5は口縁部に断面が「コ」の字状になる突帯が廻る土鍋形土器である。この土器の時期は中世の可能性も考えられる。

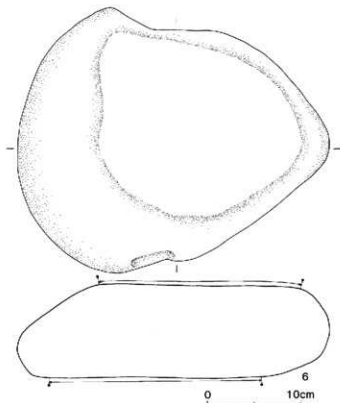
土鍋

石皿

6は石皿である。安山岩製の河原石を素材とし、両面に使用の痕跡が認められ、摩耗している。



第89図 石風呂遺跡出土土器 (1/3)



第90図 石風呂遺跡Ⅳ区出土土器 (1/4)

第3節 結語

石風呂遺跡は、北屋敷ツル遺跡の西側に位置し、市道を挟んで字名が変わるため区切られ、調査された遺跡である。本来は連続する弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺跡である。地形的に見た石風呂遺跡の調査位置は、標高約100mの洪積世台地の南側縁に沿いに展開する弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落後の西端部にあたる。さらに、この集落の北側にある東西方向に由延びる浅い窪地の低湿地の谷頭付近でもある。

谷頭

第79図に示すように、1区から3区の地形は削平も考慮すべきであるが、ほぼ平坦である。しかし4区の地形は、等高線が示すように、東方向に急激に窪み、東北隅が一番低くなっており、谷頭の形状を示している。こうした中、検出された弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構は、住居跡・土坑・小児甕棺である。その配置を見ると、1区は削平のため検出されていないが、2区では東寄り中央で住居跡が2棟、北寄りで土坑、3区では南壁と北壁にかかってそれぞれ1基と東壁中央付近で小児甕棺、4区では南壁沿いで2基が検出されている。

拡大するムラ

こうした遺構の展開を見ると、集落の広がりや、台地の南縁沿いから谷頭部を囲みながら北側縁辺部にも続いていると想定することができる。しかも、石風呂遺跡で確認された遺構の時期は、古墳時代前期が中心と考えられ、拡大するムラの先端部に近いと言える。

由布川遺跡・北屋敷ツル遺跡を含む調査の結果は、標高約100mの洪積世の台地上であるが、中心部に形成された鞍部の湿地を開発し、弥生時代後期中葉に谷水田の経営を始めたと考えられる。その結果、食料の安定供給がもたらされ、集落構成員の増化、集落の規模拡大が生じたことを意味する。

5世紀後半

しかし、この弥生・古墳集落は、5世紀後半以降に継続されることなく、須恵器出現の頃には、台地上から姿を消す。

次にこの場所が利用された痕跡が残るのは、15世紀代である。3区から4区にかけて柱穴状の小穴が多数検出され、一部には規則性を持つものも確認できる。この中から北屋敷ツル遺跡で報告した429と同様な糸切り底の土師質土器の坏が出土している。この状況から、掘立柱建物数が数棟建ち並んでいたことが想定できる。しかもその場所は、谷頭部である。

守護大名大友氏
挾間氏

中世の由布市挾間町は豊後国守護大名の大友氏に繋がる挾間氏が支配する地域であった。しかし、主たる支配地は、大分川やその支流の黒川・山王川が流れるものの、河川面との段差が大きく、水田開発を実施するには困難な地形である。ちなみに現在の水田は、近世の水路開発以後に可能となったものである。こうした状況下で、水田開発が可能な場所は、台地上の谷状の窪地や谷間から流れ出る小河川沿いの湿地、山地が侵食され形成された谷間などであったろう。

こうした中、岩風呂遺跡の東に延びる窪地も水田適地として再注目された可能性が強い。由布川小学校遺跡Ⅱ区で検出された溝で囲まれた掘立柱建物群も同じ状況下で出現したとも考えることができる。

水田再開発

こうして、台地上の水田再開発が行われ、さらに近世に大分川水系の水路開発が、水稲栽培に不可欠な水の供給をもたらし、より安定した水田経営へと繋がっていると見ることが出来る。

第5章 由布川小学校遺跡

第1節 調査の経緯と遺跡の概要

1 調査の経緯

周知遺跡であった由布川小学校遺跡は、工事着工に先立ち、平成6年3月中旬、予定地内の平坦部分を中心にトレンチを8本設定し、確認調査を実施した。現地は水田で、床土を除くと、その下位には黒色土・黒褐色土が厚く堆積していた。確認調査の結果、由布川小学校の南側から西側にかけて、約400mの間に遺構や遺物が確認され、平成6年度に本調査を実施することとした。

本調査は平成6年8月1日から開始し、確認調査の結果、遺構・遺物が確認された部分を拡張しながら行う方法を取った。しかし、約400mの間には由布川小学校の通学路や農用水路、農道などがあり、そこで調査区は分断せざるを得なかった。その結果、調査区を東からⅠ区・Ⅱ区・Ⅲ区・Ⅳ区とし、発掘調査は次年度の平成7年5月2日に全調査区約3300㎡を終了した。

2 調査の概要

由布川小学校遺跡が立地するのは、標高約110mの台地上の遺跡であるが、微地形で見ると、北側と南側に東西方向に細長い浅い窪地があり、その間は幅約100mの細長い微高地が形成されている。こうした地形から見ると、遺跡の中心地は由布川小学校の運動場と推測でき、今回の道路改良予定地はその周辺部の調査となる。

なお、この窪地は東に行くにつれ標高を低くし、由布川小学校の東側の団地を迂回するように続く。そして由布川小学校北側の東西方向の窪地と合流し、賀来川に続く谷川が形成されている。Ⅰ区は由布川小学校の運動場の南側にあたり、窪地部分にあたる。このため、黒色土の堆積が厚く、遺物包含層状になっており、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての遺物が出土した。

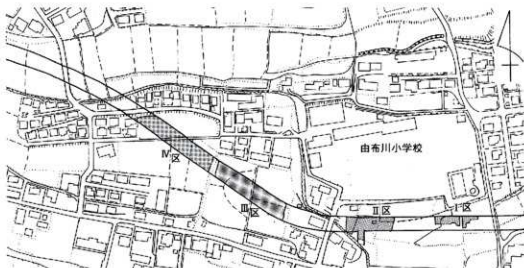
遺物包含層
方形区画
溝

Ⅱ区も運動場の南側であるが、厚い黒色土・黒褐色土の下位の暗褐色土・黄褐色土上面で、南側に延びる方形区画の溝と掘立柱建物群を検出した。出土遺物から、時期は16世紀代と考える。

Ⅲ区は運動場の西南部に位置するが、南側の窪地の範囲に含まれるためか、溝が検出されたのみで、遺物包含層状になっており、弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物が出土している。

竪穴住居跡
小児壺棺

Ⅳ区は由布川小学校の西側に位置し、遺跡の中心地と推測する運動場へ続く微高地部分となっている。このため、調査区内から10基に近い竪穴住居跡や小児壺棺などが検出された。



第91図 由布川小学校遺跡調査区位置図 (1/4000)

第2節 調査の成果

1 I区

I区は今回の道路改良工事の中でも最東端にあたりと同時に、由布川小学校遺跡の南側窪地の最深部になる。調査は確認調査の状況を基に、遺構・遺物の出土状況に応じて調査区を拡張した。第92図がその調査区であるが、中央に畦道があるため東側と西側の2ヶ所に分かれた。東側は70㎡、西側は約210㎡で、両区とも窪地のため、黒色土・黒褐色土の堆積が厚く、黒色土の下部から黒褐色土の上部にかけて遺物が出土した。

遺物が出土した位置を黒点で図示したが、東区と西区の境部分を中心に出土している。この他、西区で土坑を一基検出しているが、時期は不明である。

(1)遺構

調査区は黒色土・黒褐色土で覆われているため、遺構の検出は困難であったが、深く掘り込まれた土坑が一基、黒褐色土の下層の茶褐色土を検出面として確認された。遺構の規模は、長軸約3.8m、短軸約1.7mであるが、時期は不明である。

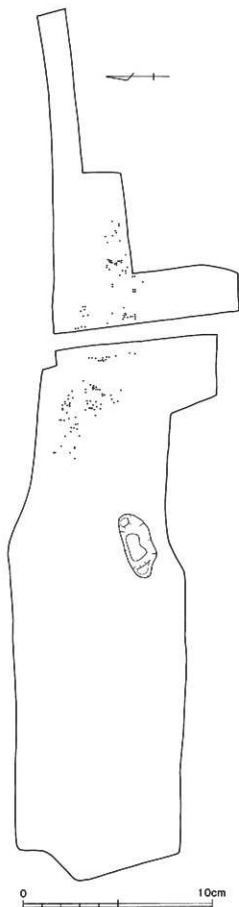
(2)遺物

I区から出土した主要遺物は、第93～95図に14点を図示した。

土坑

1～5は複合口縁の壺形土器である。1の口縁部外面は縦方向の刷毛目の後に、櫛描波状文を三段巡らしている。さらに、丹を口縁端部に横方向に塗り、そこから、縦方向に間を置きながら、六分割するように下方に垂直に塗る。そして、その間に縦方向の楕円形状に1～2ヶ所丹を点状に付けて、文様効果を上げている。内面は横撫で、頸部との接合部は指押さえてある。頸部内面には斜目方向の刷毛目調整が観察される。

2の口縁部外面は、横撫で調整の後に二段の櫛描波状文が施文されており、内面は指圧痕が残り、さらに横撫でされている。頸部外面は縦方向の刷毛目調整がされているが、上位は横撫で

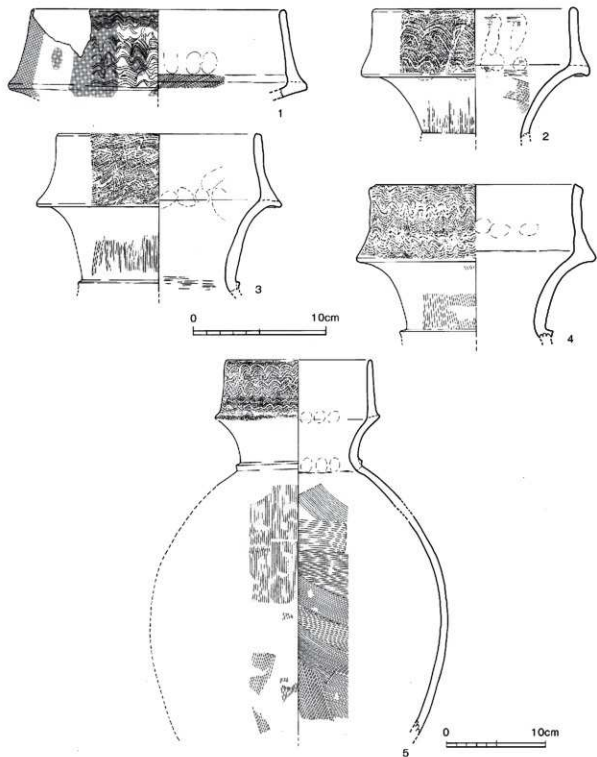


第92図 由布川小学校遺跡 I区全体図 (1/2000)

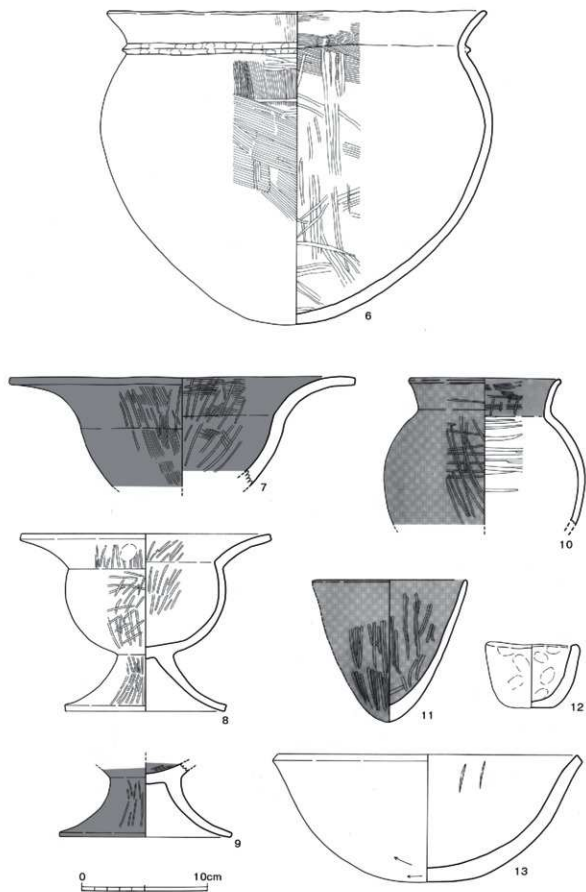
第2節 調査の成果

で消えている。内面は横撫で仕上げである。頸部の外面と胴部の接合部には突帯が廻るようで、横方向に直線的に刷毛目が撫で消されている。

3の口縁部外面は雑な櫛描波状文が全面に施文されている。内面は横方向の刷毛目の後横撫で仕上げで、さらに頸部との接合部には指圧痕が残る。頸部外面は縦方向の刷毛目があるが、撫で消されており、内面は横撫でである。頸部と胴部の接合部の外面には補強のためか、突帯が一条廻る。



第93図 由布川小学校遺跡1区出土遺物(1)



第94図 由布川小学校遺跡 I 区出土物(2)

4の口縁部外面は拂掃波状文が上から順に三段に施文されている。内面は横方向の撫で仕上げで、さらに、頸部との接合部近くには指圧痕が残る。頸部外面は縦方向の刷毛目があるが、上位は撫で消されており、内面は横撫でである。頸部と胴部の接合部の外面には補強のためか、突帯が一条廻る。

5は胴部まで復元できた資料である。口縁部外面は拂掃波状文が上から順に三段に施文され、内面は横方向の撫で仕上げで、さらに頸部との接合部近くには指圧痕が残る。頸部外面は縦方向の刷毛目があるが、上位は撫で消されており、内面は横撫でである。頸部と胴部の接合部の外面には補強のためか、突帯が一条廻り、内面には指圧痕が付く。胴部は卵形に張り、最大径は胴部中位になり、外面は縦方向、内面は斜方向・横方向の刷毛目で器面調整が行われている。

広口壺

6は口径に対し、器高が低い鉢形に近い広口甕である。外反する口縁部と上位を最大径とする胴部のくびれには、突帯が一条、指先で押しつけたような指圧痕を残しながら廻らせている。外面の器面調整は、口縁部が縦方向の刷毛目の後横撫で、胴部は上位を縦方向、胴部中位を横及び斜め方向の刷毛目で仕上げられており、下位は撫でである。内面は、口縁部が横方向、頸部が斜め方向の刷毛目で、胴部はまばらな刷毛目の後、縦方向の鈍磨き痕を残す。

脚付鉢

7~9は脚付きの鉢で、全体の形態は8で理解できる。7は鉢部で、大きく外反する口縁部を持つが、胴部の張りは小さい。これに対し、8は口縁部は短いが、胴部が張り、頸部には内外面ともに稜が生じている。脚部は、八の字状に開き、端部の断面はコの字状になる。7の器面調整は、口縁部外面が縦方向、内面は横方向の刷毛目で、内面は縦方向の磨きが加わる。8は内外面ともに口縁部から脚部にかけて縦方向の鈍磨きであるが、胴部外面は横や斜め方向も加わる。脚の内面は撫で仕上げである。9の脚部も同様で、外面は縦方向の鈍磨きであるが、内面は撫でである。

小型の壺

10は口縁部が直口気味になる小型の壺である。器面調整は口縁部外面が横撫で、胴部は縦方向と横方向の刷毛目である。内面は口縁部が横方向の刷毛目のあと縦方向の鈍磨きで、胴部内面は横方向の鈍磨きである。こうした器面調整の後に、外面は全面、内面は口縁部のみを丹塗りされている。

鉢

11は尖底気味になる鉢である。器面調整は、口縁部が横方向の撫でであるが、胴部から底部にかけては、縦方向の鈍磨きで仕上げ、さらに内外面ともに丹塗りされている。

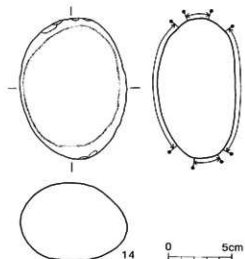
12は小型の鉢である。手捏ねされた感があり、口唇部は波打ち、器面には指圧痕が残る。

13は口径の大きい丸底の鉢で、口縁部がわずかに外反する。器面調整は、全体的に撫でであるが、内面は鈍状工具による。また、底部外面は下から口縁部に向けて鈍削り状の調整が観察できる。

磨石

14は両面使用された磨石である。安山岩製である。

地形的に見て、I区は遺跡の中心地と想定する由布川小学校運動場の南側の低地である。出土する遺物も包含層状であり、北側の集落から流れ込み、又は廃棄された遺物と想定する。



第95図 由布川小学校遺跡 I 区出土遺物(3)



第96図 由布川小学校遺跡Ⅱ区遺構分布図 (1/100)

2 II区

谷頭

II区はI区と同じく、由布川小学校遺跡の中心部と想定する運動場の南側に東西に細長く窪む浅い谷頭状の地形の中に位置する。この調査区も確認調査では、表土下に厚い黒色土・黒褐色土が堆積していたが、遺構検出面である暗褐色土・黄褐色土の上面で柱穴状の掘り込みと溝状の遺構を検出した。

方形区画
掘立柱建物

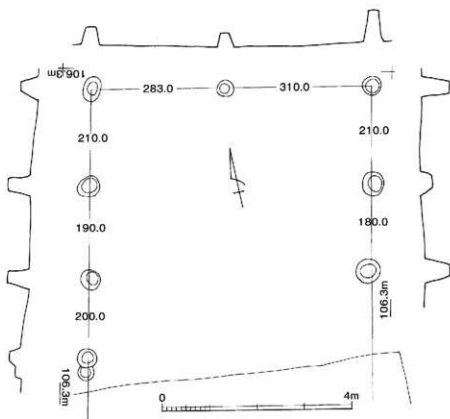
本調査では、確認調査で遺構を検出した場所を中心に、調査区を工事予定地内いっばいに拡張し調査を実施した。その結果、第96図に図示したように、南側に展開する方形区画の溝と、それを中心に掘立柱建物の遺構が検出された。調査面積は約500㎡に達した。

(1)遺構

1) 溝

検出された溝の規模は、東西方向に溝の外側約26m、内側約24.5mで、南北方向は南側が区画外になるため、不明である。また溝の形態は、東北隅は段状の掘り込みであるが、西北隅は単純である。両隅とも隅丸状に曲がる。検出面での東と西側の溝の幅は約80cmで、深さは浅く、10cm以下である。また、北側を区画する溝も幅約1mで、深さは約30cmの断面逆台形になる。

全体的に見て溝の深さが極めて浅いが、本来の生活面が現在の地表面に近い可能性が強く、黒色土・黒褐色土の中で遺構が検出できなかったことも十分考えられる。そうすれば、機能していた溝は幅2m近くの逆台形の形態で、深さも1m以上が想定できる。



第97図 由布川小学校遺跡II区建物1実測図(1/80)

2) 掘立柱建物

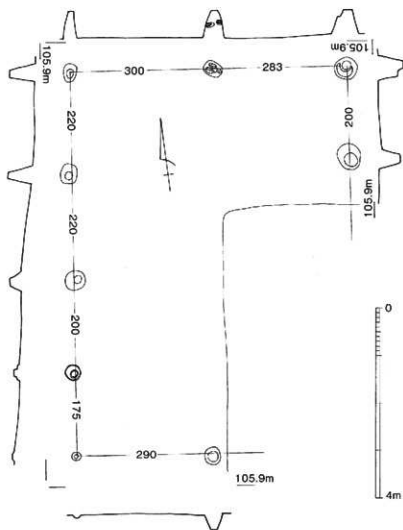
掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴状の遺構は、溝で囲まれた範囲の中で多数検出された。特に、中央部で、多数の柱穴状遺構が検出され、掘立柱建物を同じ場所で、繰り返したものと想定した。そこで、これらの柱穴状遺構を観察し、組み合わせを検討した結果、方形区画内で7棟の掘立柱建物を検出し、それを建物1～7とした。それらの遺構を観察して、組み合わせると、少なくともほぼ同じ方位をとる7棟の建物の存在が重複して想定できた。この7棟の掘立柱建物の柱間から見た規模は、それぞれ異なる。

建物1 (第97図)

建物1は溝による方形区画の中の西端で検出された。検出された建物は、南側が調査区外にあるため、全容は把握できないが、東西2間、南北4間以上が想定できる。柱間の規模は3m前後で長い、南北は2m前後でやや短い。柱穴の深さは、40～80cmで、一定していない。

建物2 (第98図)

溝による方形区画の中央部付近の繰り返して建て替えの行われた掘立柱建物のひとつで、東南隅



第98図 由布川小学校遺跡Ⅱ区建物2実測図 (1/80)

は調査区外となっている。検出された建物は、東西2間、南北4間の規模である。東西方向の間隔は3m程度であるが、南北方向の間隔は2m前後で、建物1と規模がほぼ同じである。構成する柱穴は北側の中央に柱を固定するための小石が3個埋めている。また、南西隅の柱穴は、検出面からの深さは浅いが、底面の標高は105.1mで他の柱穴と同程度である。

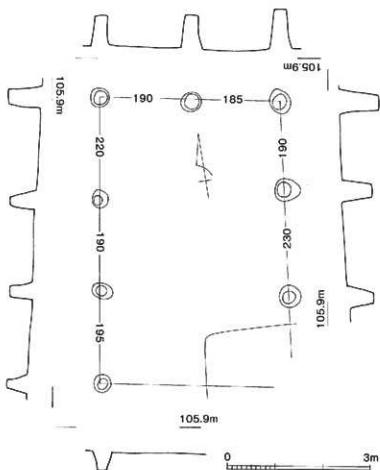
建物3 (第99図)

建物3は建物2の北側に重なりながら検出された東西2間、南北3間の掘立柱建物である。東西方向の柱穴の間隔は2m弱で、南北方向も2m前後であるが、間隔に統一性が希薄である。また、柱穴の深さはいずれも深く、50~80cmを測る。東南隅の柱穴は調査区外のため不明で、南側の2間の中央の柱穴も不明である。

建物4 (100図)

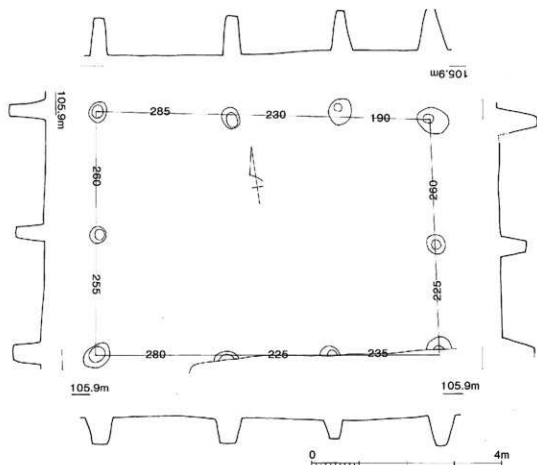
建物4は建物2の北部分、建物3の全体が重なるように検出された東西方向に長い掘立柱建物である。建物構造は、東西3間、南北2間で、南側の柱穴の3個は調査区外のため全体を調査できなかった。柱穴の間隔は、東西が285cmから190cmと間隔差があり、南北方向も225cmから260cmで統一性が乏しい。しかし柱穴の深さは80cm程度が多く、安定した構造である。

建物4は梁行きが東西方向を向く構造で、建物1~3とは異なる。

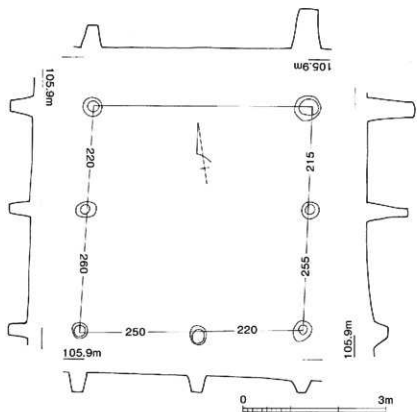


第99図 由布川小学校遺跡Ⅱ区建物3実測図 (1/80)

第2節 調査の成果



第100図 由布川小学校遺跡Ⅱ区建物4実測図(1/80)



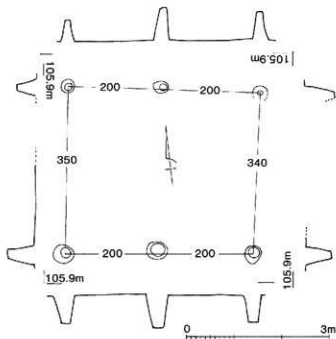
第101図 由布川小学校遺跡Ⅱ区建物5実測図(1/80)

建物5 (第101図)

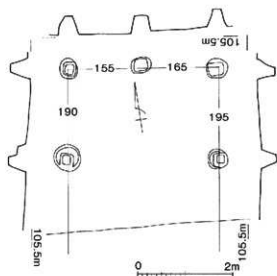
建物5は建物2の北部分に重なって検出された掘立柱建物である。東西・南北ともに2間の間隔を持つ柱間構造の建物であるが、北側の柱穴列の中央は不明である。柱穴の間隔は、220cmから260cmで、統一性に乏しい。また、柱穴の深さも東北側が深く80~100cmであるが、南側の柱穴列は30~50cmで浅いが検出面が深いためと考える。

建物6 (第102図)

建物6は方形区画を形づける北側の溝と重複して検出された。掘立柱建物の構造は、東西方向に2間、南方方向にも2間と想定できるが、南北方向の中央柱は、溝と重複するため確認できなかった。このため、南北方向の柱穴の間隔は約350cmと広い。また東西方向の柱穴の間隔は、200cmとは



第102図 由布川小学校遺跡Ⅱ区建物6実測図(1/80)



第103図 由布川小学校遺跡Ⅱ区建物7実測図(1/80)

は同じである。さらに柱穴の深さは80cm前後のものが多い。このことから、溝と重複する南北方向の中央の柱穴は、存在すれば痕跡を残したと考えられるが確認できなかった。本来なかった可能性が強い。

建物7（第103図）

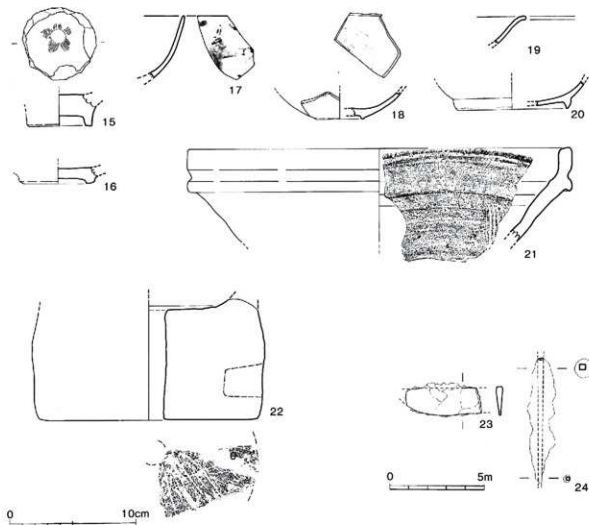
建物7は方形区画の中の東側で、建物1と同様に重複なしで検出された掘立柱建物である。東西方向に2間、南北方向にも2間以上があるが、南側は調査区外で発掘できなかった。柱穴の間隔は、東西方向が160cm前後、南北方向は190cm前後である。

この建物の特長は、柱穴の平面形が方形になり、特に底面の形態が著しい。深さは30～50cmと不揃いであるが、角材を使用した可能性を持つ。

(2)遺物

Ⅱ区の主要遺構である溝や掘立柱建物からの遺物の出土は少なく、時期を決めるのは困難であった。それでも遺構検出の際や、溝を掘り下げる際に遺物が出土し、それを図化したのが第104図である。これらの遺物から、遺構の時期を想定する。

龍泉窯系 15・16は龍泉窯系の青磁碗の底部である。15は見込に文様があり、軸は畳付きまでで、高台内



第104図 由布川小学校遺跡Ⅱ区出土遺物（1/2・1/3）

青磁碗 側は露胎である。16も同様であるが、高台が低く、器壁も薄い。また見込中央も露胎となっている。

17・18は青花の碗と皿である。17は口縁部、18が基筒底であるが、軸の色調や文様から近世の可能性が高い。

白磁 19・20は白磁で、19が皿、20は碗である。19は口縁部の形態から16世紀代の中国製と考えるが、20の碗は不明である。

備前焼 21は、備前焼の播鉢である。内面の播り目は粗で、口縁部外面には凹線がない。このことから、15世紀代と考える。

挽き白 22は挽き白の上白である。側面に引き手を挿入する穴が残されている。阿蘇凝灰岩の硬質な部分を素材にしている。

刀子 23・24は鉄製品である。23は刀子の破片で、錆の進行した24は鉄釘の一部である

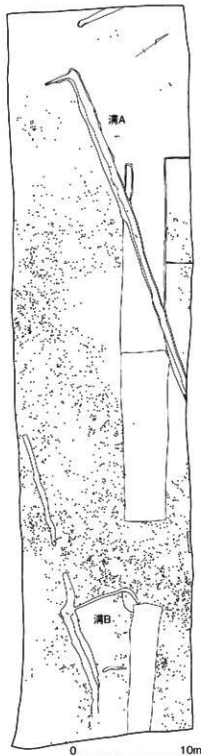
以上の遺物からⅡ区の遺構の時期は、室町時代末から江戸時代まで想定できるが、17・18の青花が流れ込みならば、15～16世紀の方形区画遺構と掘立柱建物と考える。

3 Ⅲ区

Ⅲ区は、由布川小学校遺跡の主要部と想定する小学校運動場の南西部に位置し、Ⅰ・Ⅱ区と続く南側の細長い窪地の谷頭部にあたる。このため、第105図に図示したように、道路改良事業の範囲に約60m×約14mの規模の約840㎡で調査区を設定したが、住居や貯蔵穴など、直接生活に関連する遺構は検出されず、厚く堆積した黒色土・黒褐色土が確認され、その下位の遺構検出面からは柱穴状の掘り込みが多数検出されたのみである。

(1) 遺構

検出された遺構は、柱穴状堅穴と溝がある。柱穴状堅穴は調査区の中央部で、東西方向に多数が幅約15mの帯状に検出された。このため、調査区の西北部と南東部が希薄である。また、柱穴状遺構の形状や規模も様々で、方向性も見いだすことができない。一部は高倉を含む掘立柱建物を構成するものも含まれる可能性もあるが、確認することはできなかった。ただ、帯状に検出された柱穴群の方向は、住居跡や小児用糞箱が検出された、Ⅳ区の微高地の南側でほぼ平行する。

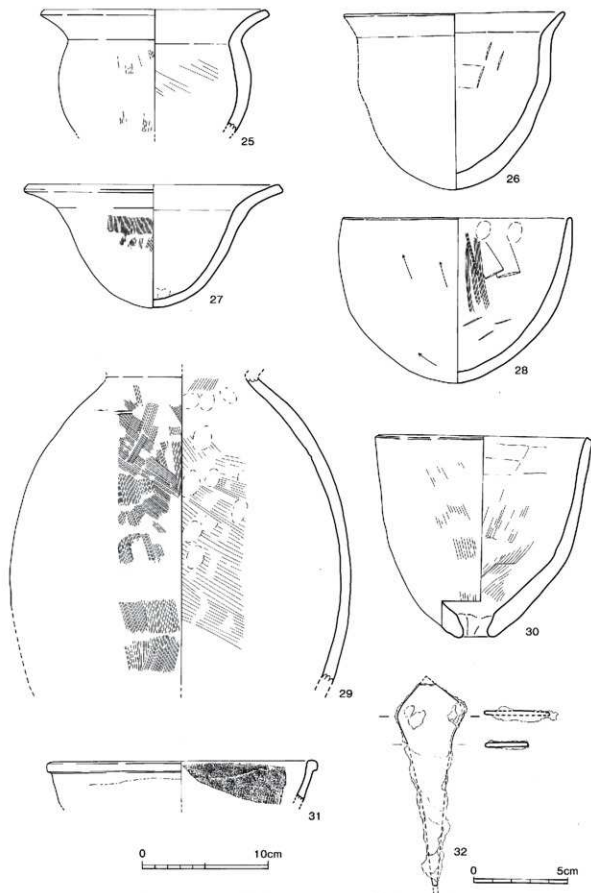


第105図 由布川小学校遺跡Ⅲ区全体図(1/300)

柱穴状

柱穴状遺構

第2節 調査の成果



第106図 由布川小学校遺跡Ⅲ区出土遺物① (1/3・1/2)

溝は2ヶ所で検出された。第105図の溝Aはほぼ直線的であり、遺構内の土から判断すると近代以降の掘り込みである。また、調査区の東南部で検出された溝B群は複数あるが、地表の水田の畦とはほぼ同じ位置であり、この地に農業用水路が引かれ、水田開発された近世以降と考える。

(2) 遺物

遺物は遺構を検出するための、黒色土・黒褐色土を掘り下げる際に出土した。数量的には少なく第106・107図に図示した。

鉢形土器

25～27は口縁部が外反する鉢形土器である。25は器壁が比較的厚い。器面調整は口縁部が横撫で、胴部は縦方向の刷毛目のあと撫で調整が行われている。内面は篋状の道具による撫でである。26の口縁部は短く外反する。器壁は口縁部から丸底の底部に近くなるにつれ厚くなる。器面は外面が撫で仕上げで、内面は篋状の道具による調整痕がある。全体に粗製である。これに対して、27は口縁部が大きく外反する丸底の鉢で、25・26に比較すると器壁は口縁部まで均一であり、丁寧な仕上げである。器面調整は、口縁部周辺が横撫でであるが、胴部は縦方向の刷毛目で、内面は丁寧な撫で、底部内側には指圧痕が残る。

壺形土器

28は口縁部が直口する丸底の壺形土器である。外面の器面調整は底部から口縁部方向に掻き上げるように施刃り痕が残り、内面も篋による撫で調整や、縦方向の細かい刷毛目痕が観察される。

甕形土器

29は器面調整や頸部の径から、長胴形の甕形土器の胴部と考える。口縁部と底部を欠くが、器面調整は外面が刷毛目の後撫でであるが、内面は指圧による調整のあと、斜め方向の粗い刷毛目で撫で、さらに刷毛目を消すように撫で仕上げである。

瓶

30は口縁部が直口する瓶である。内外面とも器面は口縁部周辺が横撫で、胴部は比較的粗い刷毛目で調整した後撫でている。底部の孔の径は2cmである。

陶製播鉢

31は口縁部が玉縁になる陶器製の播鉢である。口縁部周辺は薄い透明釉がかかり、その下位は露胎である。近世以降の資料である。

鉄鏝

32は先端部と茎の端部を欠くが、鉄製の鏝である。弥生時代終末から古墳時代初頭と考える。

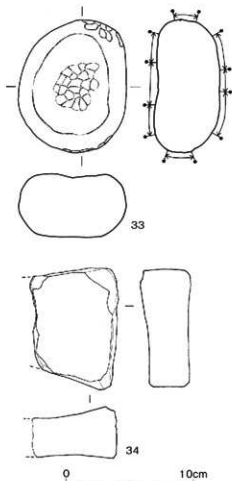
叩石

33は叩石である。掌中に入る程度の河原石の中央部に両面と、長軸方向の欄縁に敲打痕が残る。安山岩製である。

砥石

34は砥石の一部である。折れた面以外は全面に使用痕がある。

以上がⅢ区の調査成果であるが、出土する遺物の主要な時期は、Ⅰ区や、次に報告する集落を構成する要素である住居跡を検出したⅣ区とも同時期であり、集落周辺の状況と理解できる。



第107図 由布川小学校遺跡Ⅲ区
出土遺物② (1/3)

4 IV区

IV区は由布川小学校遺跡の中心部と想定する微高地の先端部にむけて、尾根状に東西方向に続く平坦地である。調査区は、Ⅲ区との間に南北方向に通じる里道があるため、区分しIV区とした。このため、調査区の東端はⅢ区の西端から約1m離れた位置で、西端は由布川小学校遺跡の北側の東西に細長い窪地の肩までとした。その結果調査区の規模は幅約14m、長さ約120mの約1680㎡となった。

土坑
小児甕棺
調査区内からは住居跡や土坑、小児甕棺などが検出されている。しかし、発掘調査から約20年が経過し、埋蔵文化財収蔵庫の移転や調査担当者も不在となり、遺構実測図の一部が把握できなくなっている。以下空中写真と残された出土遺物と調査日誌からIV区の状況を報告する。

(1) 住居跡

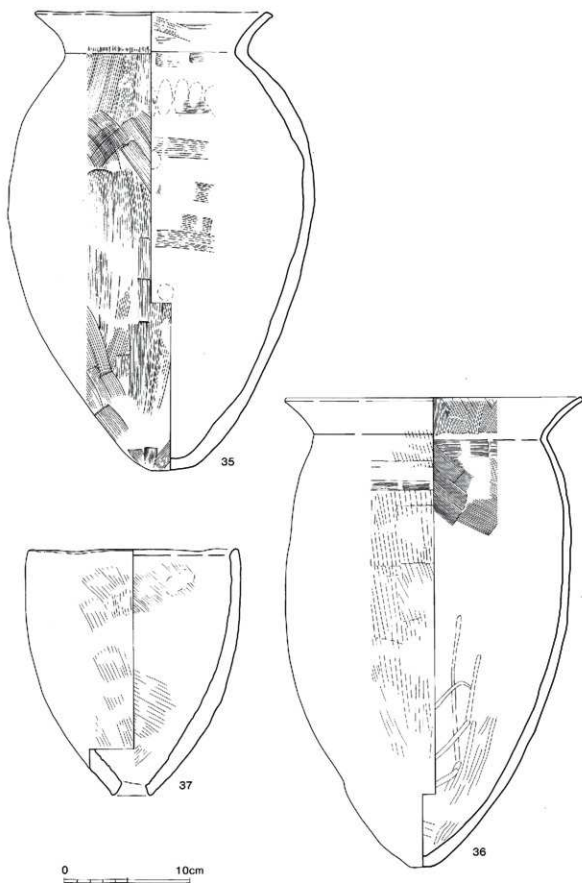
IV区の遺構は、空中写真で見える限り、竪穴住居と土坑が調査されている。竪穴住居には円形住居1棟と方形竪穴住居が写っている。これらの住居跡の数は、出土遺物の注記から見ると、1号住居から9号住居までがあり、少なくとも9基が確認されている。しかし、出土遺物と住居を結びつける図面がなく遺物の出土位置を知ることができない。このため、出土遺物を中心に報告を行い、同時破棄された遺物の組成を考える資料とした。



由布川小学校遺跡 住居跡



由布川小学校遺跡 住居跡



第108図 由布川小学校遺跡Ⅳ区1号住居出土遺物 (1/3)

1号住居跡

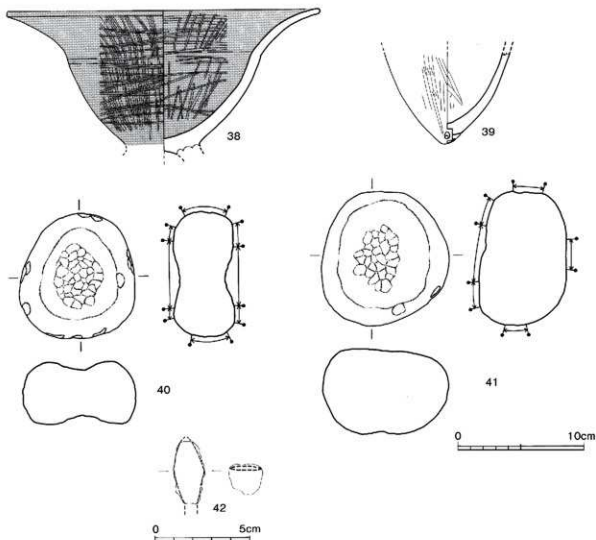
甕形土器

第108図は1号住居出土の主要遺物である。35・36は復元完形された甕形土器である。35は口縁部が相反し、頸部が締まり、胴部は上位で張り、最大径がそこに来る卵倒形をしている。底部は丸底気味ではあるが平底の名残がある。器面調整は口縁部外面が縦方向の刷毛目の後横撫で、胴部は縦方向の刷毛目で、最大径部は斜め方向が加わる。内面の器面調整は、肩部を中心に指圧で成形し、さらに横方向の粗い刷毛目で撫でている。さらに外面底部に周辺にはススが附着しており、胴部内面の中位には煮コゲ跡が残されている。

36は35に比較すると頸部の締まりが緩い甕形土器である。器壁は比較的薄く均一で、口縁部は外反するが、頸部の締まりが緩いため、胴部の張りが目立たない。底部は尖底気味になるが、接地面にわずかに平底の名残がある。外面の器面調整は、口縁部周辺が縦方向の刷毛目の後横撫で、胴部は、上位にかけて縦方向の粗い刷毛目であるが、下位は平滑撫で仕上げである。内面は口縁部が縦方向の刷毛目で、胴部上位は横又は斜め方向の細かい刷毛目であるが、下位は縦方向の粗い磨きである。胴部外面にはススが附着している。

瓶

37は瓶である。口縁部は手捏ねのためか、波打っており、内面には指圧痕が残る。底部には直



第109図 由布川小学校遺跡Ⅳ区2号住居跡出土遺物 (1/2・1/3)

径2cmの焼成前の孔が開いている。器面調整は内外面ともに斜め方向の刷毛目が観察できるが、撫で消されている部分も多い。

時期は弥生時代後期末と考える。

2号住居跡

脚付鉢

第109図は2号住居跡出土の主要遺物である。38は脚付きの鉢である。口縁部は大きく外反するが、胴部の張り小さい。器面は内外面とも平滑撫で仕上げの後、縦と横方向に施磨きされ、さらに全面に丹塗りが施されている。

鉢形土器

底部に小孔

叩石

39は鉢形をした容器であるが、尖底になる底部に焼成前の小孔が開けられており、逆さにすると釣鐘形になる土器である。器面は一部に刷毛目があるが、研磨された精製土器である。

40・41は安山岩製の叩石である。2点とも両面に敲打痕が残されており、40は側縁にも観察できる。

鉄鏃

42は茎と先端を欠く鉄鏃である。

時期は、弥生時代後期末と考える。

4号住居跡

4号住居跡出土の遺物は第110図に図示した。43は長胴の甕形土器で、器面調整は口縁部周辺が内外面ともに撫で仕上げであるが、胴部外面は縦方向の木目の細かい刷毛目が観察される。また、胴部内面は指尻痕や縦や横方向の木目の粗い刷毛目調整がされている。外面にススが附着している。

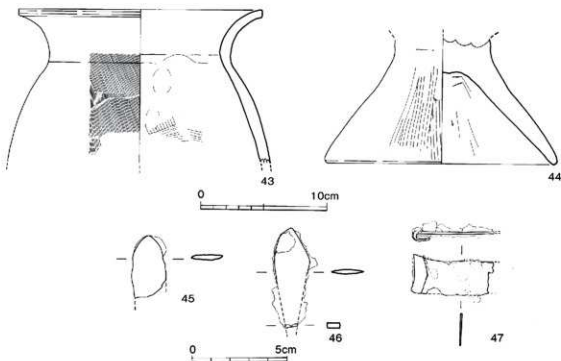
44は脚部のみである。外面は縦方向の刷毛目、内面は上から下方に施削り状の器面調整痕が残る。

鉄鏃

鉄製摘鎌

45～47は鉄製品である。45・46は鉄鏃で、45は先端部のみで、46は茎を欠く。47は長方形の鉄片の両端を折り曲げて製作した摘鎌である。片方の折り部を欠く。

時期は、弥生時代後期後葉と考える。



第110図 由布川小学校遺跡IV区4号住居出土遺物 (1/2・1/3)

5号住居跡

5号住居跡から出土した遺物は第111図48に図示した。口縁部が屈曲する甕形土器で、胴部の張りは弱い。器壁は均一で、器面調整は概ね撫で仕上げで、両面とも指圧痕が残る。

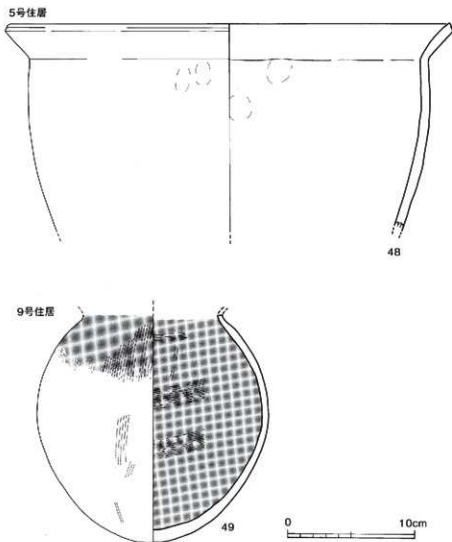
9号住居跡

9号住居跡から出土した遺物は第111図49に図示した。口縁部を欠くが、胴部が球状に張る丸底の甕形土器である。器面調整は外面が縦方向の刷毛目で、内面は横や斜目方向の刷毛目であるが、大部分撫で消されている。外面の上位と内面全面に丹が付着しており、丹を入れた容器の可能性が強い。

時期は古墳時代前期である。

(2) 土坑

調査区内からは土坑も多数検出されており、その数は遺物の注記に堅穴50まであり、この数字に近い土坑が調査されている。しかし、これも遺物と遺構を結びつける図面がなく、注記に従い報告する。土坑出土遺物は第112図50～52に図示している。



第111図 由布川小学校遺跡Ⅳ区5・9号住居出土遺物 (1/2・1/3)

竪穴38

50は竪穴38から出土した遺物であるが、平底が残る底部で、器種は外面に縦方向の磨きがあることから、壺形土器と考える。内面には指圧痕が残る。時期は弥生時代後期中葉と考える。

竪穴42

51は竪穴38から出土した遺物である。口縁部外面に二段の櫛播波状文のある複合口縁壺である。口縁部の立ち上がりの形態から時期は弥生時代後期中葉と考える。

竪穴50

鉄製摘鎌

52は竪穴50から出土した鉄製の摘鎌の約半分の破片である。

(3) 小児甕棺

小児甕棺は1基のみ検出されている。出土場所は不明であるが、第113図は出土状態の実測図である。口縁部を欠く壺形土器を地表面から約30度の角度で挿入して下甕とし、さらに大型の甕形土器を上甕として被せている。

第114・115図は甕棺に使用されていた土器であるが、第114図53は頭部から胴部中位の資料で、頭部周辺の土器は甕棺の土坑周辺で出土した。下甕の55と同一個体で、埋納作業中に打ち欠いたものと考えられる。頭部に一条、胴部に三条の断面三角形の突帯が走り、頭部の突帯には浮文が付く。55の底部は小さな平底が残る。器面調整は、外面が縦方向の刷毛目で、内面は斜目方向の撫で、指圧痕、胴部下位は縦方向の撫でがある。

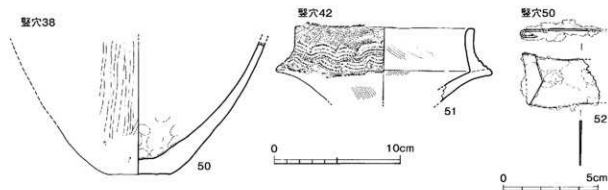
54は口縁部が外反し、底部が平底の甕形土器である。器面調整は外面が縦方向の刷毛目で、口縁部周辺は横撫でされている。内面は基本的には撫で仕上げで、胴部は籠状の道具で丁寧に縦方向に撫でられている。

甕棺の時期は、平底が残ることや、壺形土器に三角突帯が施文されることから、弥生時代後期中葉と考える。

(4) 包含層出土遺物

第116図の資料はⅣ区の遺構検出作業中に出土した遺物である。

56は複合口縁の壺形土器である。口縁部外面には二段の櫛播波状文が施文されている。内面には指圧痕が残る。57は56の形態の口縁部が付く頭部周辺の資料である。頭部には一条の突帯が指押さえて付けられ、末端が下方に垂れている。頭部外面は撫でであるが、内面は斜目方向の刷毛目調整をしている。胴部は、外面が刷毛目の跡に撫でと磨き、内面は籠状道具で縦方向の撫でである。58は底部に平底の名残の凹みが残る土器で、外面は刷毛目の後に縦方向の磨

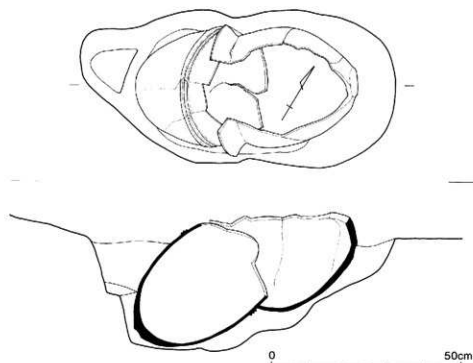


第112図 由布川小学校遺跡Ⅳ区竪穴遺構出土遺物 (1/2・1/3)

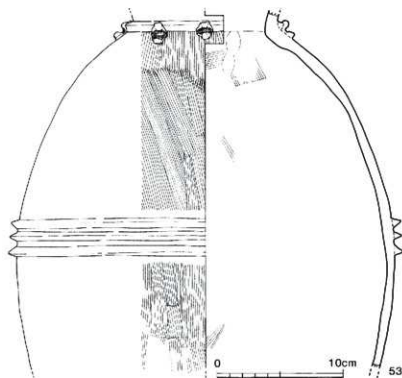
第2節 調査の成果

磨きをしており、壺形土器と考える。

56～58の口縁部・頸部周辺・胴部から底部の壺形土器の資料は、形態から見てほぼ同時期である。



第113図 由布川小学校遺跡Ⅳ区妻棺墓実測図 (1/10)



第114図 由布川小学校遺跡Ⅳ区妻棺墓 (1/3)

製塩土器 59は粗製で上げ底の底部である。底部周辺のみ資料であるが、全面二次焼成され、もろくなくっており、製塩土器の可能性が高い。

土製勾玉 60は土製勾玉の頭部の破片である。残された部分は丁字頭に九本の刻み目に加えられ、全面丹塗研磨されており、丁寧な仕上げである。

土師質土器 61は中世の土師質土器の坏で、底部には糸切り痕が残されている。口縁部は、胴部で屈曲して立ち上がる。口径は、12.8cmで、中世大友府内町跡遺跡の出土例から、14世紀代と考える。

鉄鍬 62~64は鉄鍬である。62は茎の端部を欠くが、ほぼ全形が判る。鍬身は紡錘形をし、茎の断面は方形である。63も茎の端部を欠くが、鍬身は62より長くなる。64はさらに鍬見が長くなり柳葉形になる。茎は端部を欠くが、矢柄と考えられる植物性の繊維が錆と一緒が付着している。

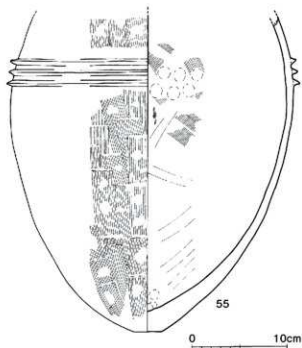
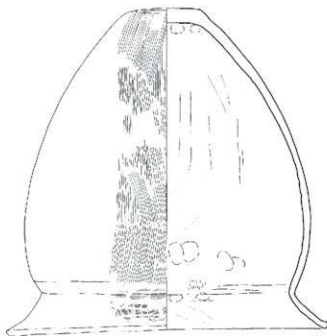
大野川中上流域 以上の鉄鍬は、大野川中上流域の弥生時代後期後葉から古墳時代初期の遺跡からの出土例に類似しており、由布川小学校遺跡もほぼ同時期であることから、この時期と考える。

打製石鍬 65・66は打製石鍬である。65の石材は姫島産黒曜石で、重量0.6gの完形品である。66の石鍬はサヌカイト製で、先端部のみ破片である。

石匙 67は横型の石匙で、石材はサヌカイトである。

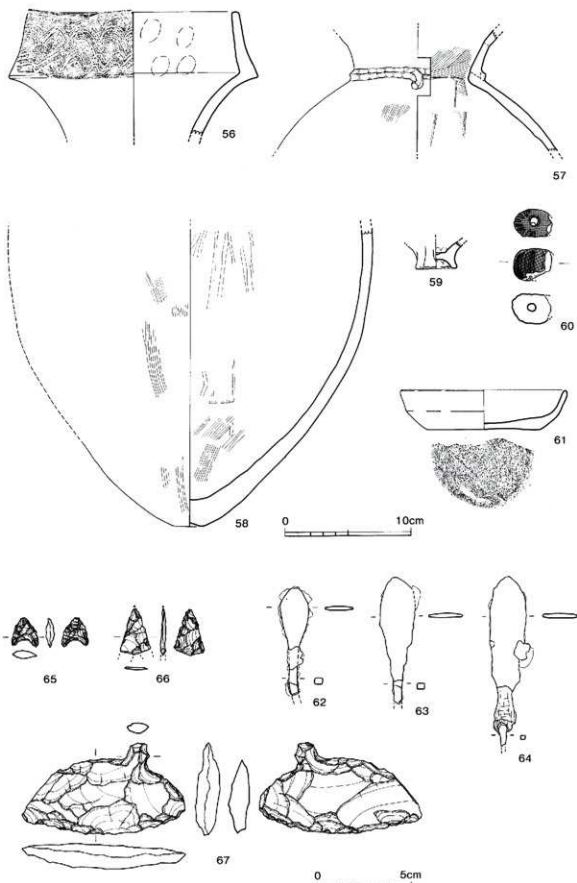
以上の石器は縄文時代に帰属する可能性が高い。

Ⅳ区からは、弥生時代の集落を構成する竪穴住居跡や土坑、小見用甕棺が検出された。地形的に見ても、遺跡の主体部と想定される由布川小学校運動場につづく、細長い平坦地であり、由布川小学校遺跡の西端の状況を見せられていると考える。また、出土遺物の鉄鍬や鉄製の摘鎌などの道具は、集落を支える生業を理解するおおきな手掛かりとなる。



第115図 由布川小学校遺跡Ⅳ区1号甕棺② (1/4)

第2節 調査の成果



第116図 由布川小学校遺跡Ⅳ区出土遺物 (1/2・1/3)

第3節 結語

由布川小学校周辺では1950年代に学校の東側で小児甕棺が出土し、西側には土器片が散布することが知られていた。このため、昭和50年（1975）に文化庁が刊行した全国遺跡地図には前者を由布川小学校東遺跡、後者を由布川小学校西遺跡として登録している。

その後、大分県教育委員会が県内の遺跡分布地図を作成するにあたり、再度この地域の調査を実施した結果、これらの遺跡は地形的に見ても一連の集落遺跡と理解することができ、平成5年（1993）に大分県教育委員会が刊行した大分県遺跡地図では由布川小学校遺跡として登録している。

今回の県道小狭間大分線の道路改良工事に伴う発掘調査は、路線が遺跡の中心部と想定される由布川小学校の敷地の南側になったため、遺跡の状況を知ることはできなかった。しかし、IV区が旧遺跡名の由布川小学校西遺跡部分にあたったため、集落のとしての由布川小学校遺跡の一端を知ることができた。

まず、由布川小学校遺跡の範囲であるが、標高約110mの洪積世台地上であるが、東西方向に浸食を受け、遺跡のある部分は北側と南側に細長い谷状の窪地が形成されている。この間に残された部分は周辺から見ると微高地になっており、西側が狭く東になるにつれ、平坦部の幅が広がっている。この地形上に立地するのが由布川小学校遺跡である。今回の調査でIV区とした調査区で住居跡を検出しており、遺跡の西側の限りがほぼ推測できる。そう考えると、由布川小学校遺跡は東西約500m、南北約70～150mの大規模な集落と想定できる。

この集落が営まれた期間は、出土土器を大分平野の土器編年で考えると、弥生時代後期中葉から古墳時代前期の4世紀後半頃までと考えられる。集落を構成する住居の形態は、方形が主体であるが、一部円形住居も存在する。また、集落内には廃棄土坑や小児甕棺が検出されており、ムラの中に小児を埋葬する状況は、この地域の同時期の集落と共通する。

由布川小学校遺跡は、少なくとも約三百年は継続して営まれた可能性が高く、集落規模も大きい。この集落を支えた背景となるのが、鉄製の摘鎌である。この道具は、収穫具である石包丁が鉄器化したものであり、稲作の存在を裏付ける遺物でもある。そこで、標高約110mの洪積世台地上であるが、水田稲作が可能な耕作地を考えると、遺跡周辺の東西に細長い窪地を想定することができる。すなわち、集落の周辺の低湿地で小規模な稲作が行われていたと考える。

その一方、縄文時代以来の伝統的な石器である磨石や叩石も出土している。この石器はドングリやクルミなどの堅果類を処理する道具と考えられており、縄文時代の食生活を支えた石器である。また、鉄鍬はイノシシやシカなどの中型動物を対象とした狩猟具とも考えられ、集落周辺の山林での狩猟も想定できる。この他、製塩土器も出土しており、海岸部との交流なども見て取れる。

以上のように、由布川小学校遺跡の発掘調査では、遺跡の主要部を調査したわけではないが、検出された遺構や出土した遺物から、集落景観を復元することができた。特に出土した2点の摘鎌や7点の鉄製品の普及の鉄鍬は調査した位置や面積から見ると多く、注目される。この地域の鉄製品の普及状況を知ることができると期待される。

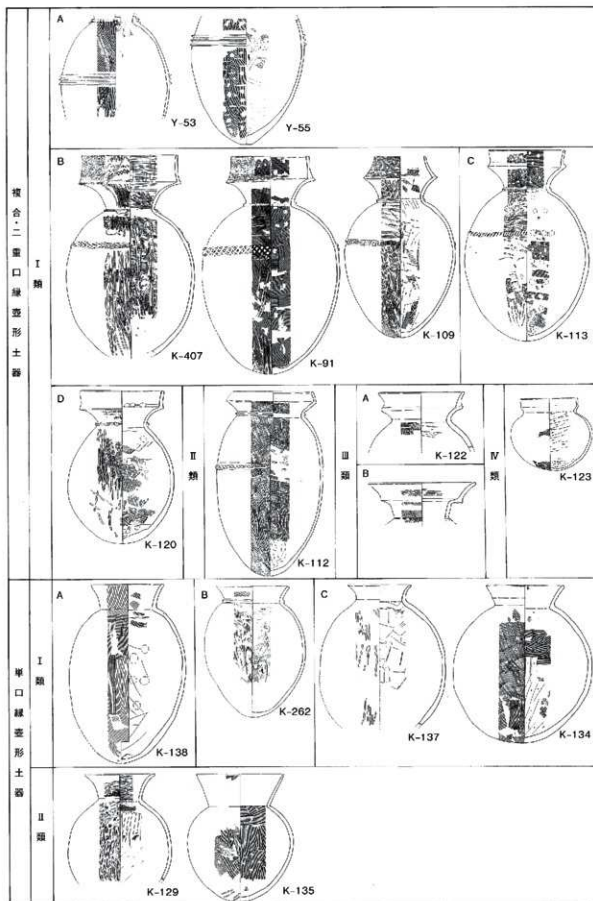
第6章 総括

第1節 出土土器の分類

由布川小学校遺跡・北屋敷ツル遺跡・岩風呂遺跡の3遺跡は場所・時期も近接・並行しており、相互に関連あるいは同一の集落であった可能性が高い。そこで、3遺跡出土の土器をまとめて分類し、この地域の弥生時代から古墳時代初期にかけて製作・使用された土器の様相を観察する。

1 複合・二重口縁壺形土器

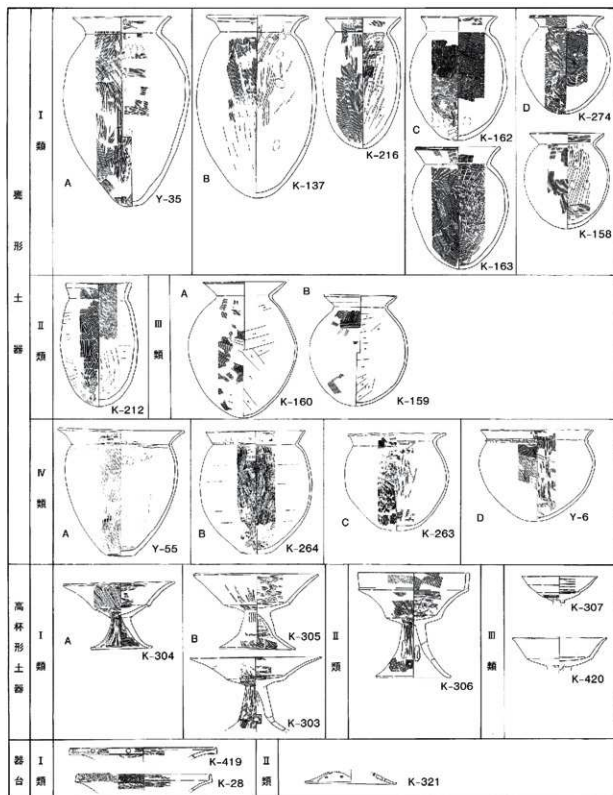
- 安国寺式土器 I類 東九州の弥生時代後期を象徴する壺形土器である安国寺式土器の系統をあてる。この壺形土器は複合口縁の外面に櫛描歯状文が有り、径部や胴部に突帯を巡らせる。この土器は、弥生時代後期に成立し、形態変化を遂げながら、古墳時代前期前葉まで存続する。
- 底部平底 勾玉形浮文 A 由布川小学校遺跡で検出された土器棺蓋に使用された土器で、頸部は不明であるが胴部は卵倒形をしており、底部に平底が残る。文様は頸部に1条、胴部に3条の断面三角形の突帯が廻り、頸部突帯に接して断面勾玉形の浮文が付く。
- 胴部卵倒形 完全な丸底 B 大きさに差異があるが、器形は口縁部と頸部がほぼ1:1の比率になる複合口縁で、胴部は卵倒形で完全な丸底になる。文様は口縁部外面に櫛描波状文が三段以上施文され、頸部と胴部の接合部には断面三角形または、指先で掴み上げたような突帯が一条廻る。また胴部上位には断面が台形の突帯が一条廻り、その上面に斜行や綾杉状又は格子状の刻目が加えられている。さらにK-407の頸部にはI類のY-531にある断面勾玉状の浮文と肩部に円盤状の浮文が付く。器面調整では、K-109などの内面にヘラ削りの手法が採用されている。北屋敷ツル遺跡の2号溝で多量の土器が出土したが、その中の壺形土器で、最も多く出土したのがII類で、在地性の強い土器と言える。
- 櫛描波状文無 C II・III類の複合口縁の立ち上がりか内傾するのに対し、IV類は外側に開く。胴部はII類と同じく卵倒形に影らむ。口縁部外面に櫛描波状文は無く、頸部には掴み上げた突帯、胴部最大径部よりやや上位に斜行刻目のある断面台形の突帯が廻る。出土数量は少ないが、後述する壺形土器VII類の影響を考える。
- 口縁部直立 D 複合口縁の口縁部が直立する壺である。胴部は球状に張り、丸底である。櫛描波文は無く、径部に掴み上げた突帯が廻るのみで、無いものもある。胴部の突帯は無い。数量は少なく小型品が多い。I類Bに伴う可能性が高い。
- 円筒形 II類 口縁部は複合口縁であるが、II類に比較すると、頸部の締まりが緩いため、胴部の張りが目立ず、円筒形の印象を与える丸底の壺である。口縁部は内湾気味に内傾し、外面に櫛描波状文は描かれない。胴部中位には断面台形の突帯が廻る。数量は極めて少なく、北部九州的な外来系と考える。
- 二重口縁 III類 口縁部から胴部上位の資料である。口縁部は外傾し、長く伸び二重口縁となっている。胴部内面は横方向のヘラ削りで仕上げている。胴部を欠くが、他の遺跡の例では、球状に影らむ胴部を持つ。
- 布留式土器 A 口縁部や径部の形態はI類Cに近く、Bに比較すると未発達であるが、内面は横方向のヘラ削りで仕上げられている。
- 内面ヘラ削り 外來系 B 径部が直線的に立ちあがり、口縁部は大きく外反し、明らかに布留式土器の時期の二重口縁壺形土器である
- IV類 口縁部が直立し、胴部は球状に張る。突帯を含め文様は無く、胴部内面をヘラ削りで、器壁を薄く仕上げている。1点のみの出土で外来系と考える。



第117図 北屋敷ツル遺跡(K)・石風呂遺跡(I)・由布川小学校遺跡跡(Y)出土土器分報図(1)

2 単口縁壺形土器

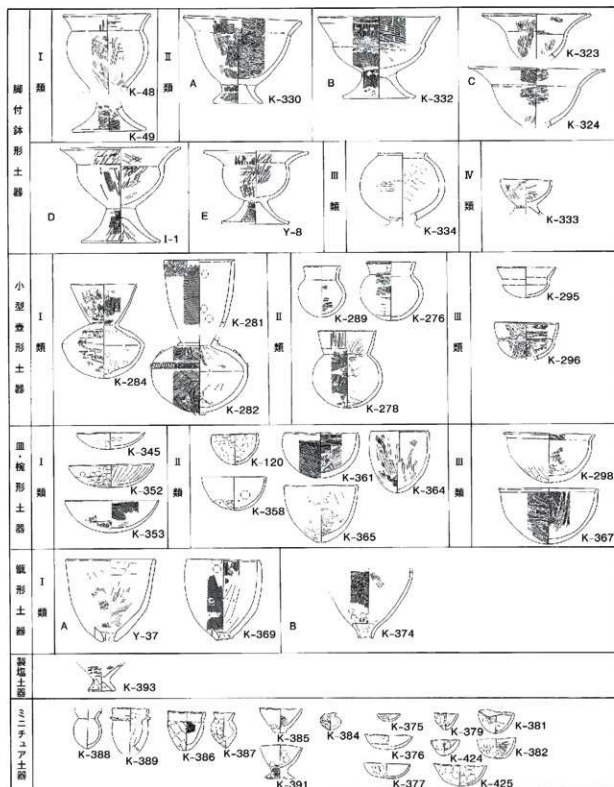
I類 胴部の張りに比較すると、口径が小さく、径部がゆるまる。口縁部の形態も端部が外反せず壺形土器とは異なる形態の土器で、複合口縁・二重口縁に対し、単口縁壺形土器として分



第118図 北屋敷ツル遺跡(K)・石風呂遺跡(I)・由布川小学校遺跡跡(Y)出土土器分報図(2)

類する。弥生時代後期後葉には見られ、形態変化を遂げながら古墳時代前期前葉まで確認できるが、最終的には甕形土器との区別が困難になる。

A 複合口縁Ⅰ類Aの口縁部が欠け、径部から始まる器形と考える。このため口縁部は長く、



第119図 北屋敷ツル遺跡(K)・石風呂遺跡(I)・由布川小学校遺跡跡(Y)出土土器分報図(3)

第1節 出土土器の分類

- 底部丸底 はほぼ直立し、胴部は最大径が中位の長胴形になる。底部は丸底である。
- B 口縁部はA同様に直線的に外傾するが、比較すると短い。胴部もI類に比較すると丸味を帯びるため、短くなり、最大径部が中位になる。径部には突帯が巡るものもある。複合口縁壺I類Bの複合口縁部を欠く形態に近い。
- 胴部球状 C 口縁部が、外反又は外傾する。胴部は球状に張り、丸底になる。胴部の張りに比較すると口径が小さく、径部の締まりが強いため、変形土器と区別できる。内面の器面調整にヘラ削りが多用される。
- 口縁部延び
胴部球状 II類 口縁部はI類と同じく、外傾するが、長く延び、端部の反りは小さい。胴部は球状に張り、丸底となる。径部の締まりが強く、変形土器とは一線を画する。

3 変形土器

- I類 変形土器は弥生時代の土器組成の中で、壺・高坏と並び基本となり、煮炊き用となっている。このため、遺跡からの出土も最も多い比率を占める。また、在地性も強く、形態変化も大きい。そこで、ここでは、東九州で出土する最も基本的な変形土器をI類とする。
- A 口縁部が外反し、胴部は長胴形であるが、上位で最大径となり、下位になるに従い細くなり、底部は平底を残す。
- 底部平底
長胴・丸底 B 口縁部が外反し、胴部は長胴形で、底部は尖り気味の丸底となる。大きさには大小の差が大きく、外面にスガが付着するものが目立つ。
- 短胴丸底
胴部球状 C 口縁部は外反するが、胴部が2類に比較すると短く、球形に近くなる。底部は丸底である。
- D 口縁部が外反するが、III類に比較すると小型化し、胴部は球状になる。
- 円筒形
叩き調整
胴部球状
ヘラ削り
尖り気味
胴部球状
広口壺 II類 口縁部は斜めに立ちあがり、径部の締まりは弱く、胴部は長胴である。このため、胴部の形状は円筒形に近くなる。さらに、胴部外面に斜め叩きの調整痕が残る。
- III類 外反する口縁端部が肥厚し、胴部は球状に張るが、内面の器面調整にヘラ削りを採用しているため器壁が薄く、軽い。変形土器I類DはIII類の影響を受け形態変化したと考える。
- A 胴部がやや長く、底部は尖り気味の丸底になる。
- B 胴部はほぼ球形になる。
- IV類 口径に比較すると径部の締まりが緩く、器高も低い。このため、広口変形土器となり、形態変化も認めることができる。
- A 外反する口縁端が全体の最大径となり、胴部の最大径は上位に位置し、底部は平底である。
- B 口縁部は外反し、胴部最大径は中位に下がり、底部は丸味を帯びた平底になる。
- 丸底 C 口縁部は外反し、胴部最大径は中位に位置し、底部は丸底になる。
- D 口縁部が外反し、胴部が張るが、器高が低く丸底になる。径部の締まりは弱く、突帯が一条廻るものが多い。

4 高坏形土器

- I類 大きく外反する口縁部を持つ坏部と、脚端部が「ハ」の字状に広がる脚部を持つ。
- A 坏部の口縁部は長く延び、坏底部の中央は凹む。脚部は「ハ」の字状に広がる。
- B I類同様に口縁部は長く延びるが、坏底部は平坦になる。脚部は中位で屈曲して広がり、円形の透かしを入れる例もある。
- 帯条タガ II類 口縁端部に帯条のタガが付き、直立し複合口縁状になる。坏底部は丸みを帯び、「ハ」字状に開く脚部には、長楕円形の透かしがある。1例のみの稀な器形である。
- 小型 III類 小型で口縁部は短く外反する。坏底部は平坦である。

5 器台形土器

- I類 口縁端部が肥厚または立ちあがり、文様帯となり櫛播波状文を施文する。K-28は高坏の可

性能もあるⅡ類 脚部のみ資料であるが、円形の透かしが二段に分かれて付いている。
小型丸底壺対応の小型器台と考える。

6 脚付鉢土器

- Ⅰ類 短い口縁部は緩く外反し、胴部は長胴で甕形土器的である。脚部は「ハ」字状に開く。
- 短く緩く外反 Ⅱ類 胴部から屈曲する口縁部、胴部、「ハ」字状に開く低い脚部で構成されるが、各部位とも形態変化すると考える。
- 胴部直線的 Ⅲ類 口縁部は短く、外傾する。胴部は張らず直線的に脚部に続く。脚部は「ハ」字状に開き、脚部低い 環状の粘土を貼り付け形成しているため、低い。
- 口縁長い Ⅳ類 口縁部は長い、直線的に伸びる。胴部の張りは小さく、脚部は「ハ」字状に開き、低い。
- 口縁外反 Ⅴ類 口縁部は外反し長く伸びる。胴部の張りは小さい。脚部は「ハ」字状に開く。
- 胴部張る Ⅵ類 口縁部は外反し長く伸びる。胴部の張りはⅡ類に比較し張り、鉢部内面の口縁部と胴部の境に稜が生じる。脚部は「ハ」字状に開く。
- 脚長い Ⅶ類 口縁部は外反するが、胴部が球状に張り、Ⅵに比較すると短い。脚部は「ハ」字状に開く。
- 胴部球状 Ⅷ類 口縁部は極めて短く直立し、胴部は球状に張る。脚部は「ハ」字状に開くと考える。
- 口縁直立 Ⅸ類 鉢部は口縁部が屈曲しない塊状の形態をしているが、脚部の形態は不明である。
- 鉢部塊状

7 小型壺形土器

- Ⅰ類 口縁部が長く直線的に伸び、胴部は扁球状の長頸壺である。底部は丸底であるが、円形の浮文が付くものもある。文様は口縁部外面に櫛歯波状文や径部に突帯、肩部に円環状の浮文、胴部に斜め刻み目の帯状の突帯が廻る。丹塗りの比率が高い。
- 長頸壺 Ⅱ類 口縁部は短かくほぼ直立し、胴部は球状に張る丸底である。大きさは大型と小型に分かれる傾向が認められ、丹塗りの比率が高い。
- 短頸壺 Ⅲ類 口縁部が外傾し、径部の締まりは緩く、胴部は塊状になる。器面はヘラ磨きで調整された精製の小型丸底壺である。
- 小型丸底壺

8 皿・塊形土器

- Ⅰ類 口径に比較する器高が低く、口径に対し器高は3分の1以下で皿形である。口径の大きさには差がある。ヘラ磨きの精製土器が比較的多い。
- 皿形 Ⅱ類 Ⅰ類に比較すると、口径に対し器高が高く3分の2以上で塊形である。このため口縁部は直立する。口径の大きさには差がある。ヘラ磨きで丹塗りの精製土器が目立つ。
- 塊形 Ⅲ類 器形はⅠ類とⅡ類に中間程度であるが、口縁端部がわずかに外反する。
- 口縁外反

9 製塩土器

全体に粗製で、小さな脚が付き、胴部は平行叩きで器面調整している。口縁部・胴部の形態は不明で、1点のみの出土である。

10 甕形土器

- Ⅰ類 口縁部は直立し、胴部も張らず、焼成前の径2cm程度の穿孔がある底部へと続く。
- Ⅱ類 A 底部の穿孔部が突出しない。
B 底部の穿孔部が突出する。

11 ミニチュア土器

複合口縁壺形土器・甕形土器・脚付鉢形土器・小型壺形土器・皿形土器・塊形土器を模した手捏ねの小型土器である。

第2節 出土土器の編年

前節で北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡（以下3遺跡）から出土した土器を分類したが、次にこの土器の時間的な位置づけを行い、遺跡の継続期間を考える。3遺跡は大分平野の西側周辺部に位置する。この地域や同じ大分川流域での弥生時代から古墳時代の遺跡の発掘調査は、由布市挾間町の北原遺跡¹や北方下角遺跡²、大分市の賀来中学校遺跡³・賀来西遺跡⁴・宮寛井ノ口遺跡⁵・植田市遺跡⁶・雄城台遺跡⁷・北ノ後遺跡⁸、大分川の河口に近い田室東遺跡⁹・守岡遺跡¹⁰・下郡遺跡群¹¹・羽田遺跡群¹²で行われており、幾つかの編年案が提示されている。

第120図は、そうした、大分川中流域から下流域の遺跡からの出土土器についての先行研究の成果を参考にしながら、3遺跡から出土した土器を編年したものである。

1 弥生時代後期後葉

3遺跡の中で、最も古い様相を持つのが、由布川小学校遺跡の小児甕棺とⅣ区1号住居出土土器が想定できる。前節で壺形土器Ⅰ類・甕形土器Ⅰ類としたもので、平底が残ることが特徴である。甕棺の下葉である壺形土器は、径部に一条と胴部に三条の断面三角形の突帯が巡り、径部の突帯に接して断面が勾玉状の浮文が付き、平底が残る。この壺形土器の上葉になっていたのがY54の広口の甕形土器である。この土器は、胴部最大径が上位にあり、底部は平底である。同じく平底を持つ賀来中学遺跡のY35のⅣ区1号住居出土の甕形土器である。やはり胴部最大径が上位にある。この住居跡からはもう1点甕形土器が出土しているが、同じく平底が残る。また、同住居跡からY27の甕形土器と一緒に出土しており、同時期に位置づけられる。

ところで、東端から見下ろす沖積地に立地する賀来中学遺跡からは、この時期の土器が溝に廃棄された状態で多量に出土している。そこには、1の単口縁壺形土器、2の高坏、3の脚付鉢、5・6の小型丸底甕、7・8・9のミニチュア土器があり、北屋敷ツル遺跡の2号溝以前のこの地域の土器の様相を知ることができる。

2 弥生時代後期終末

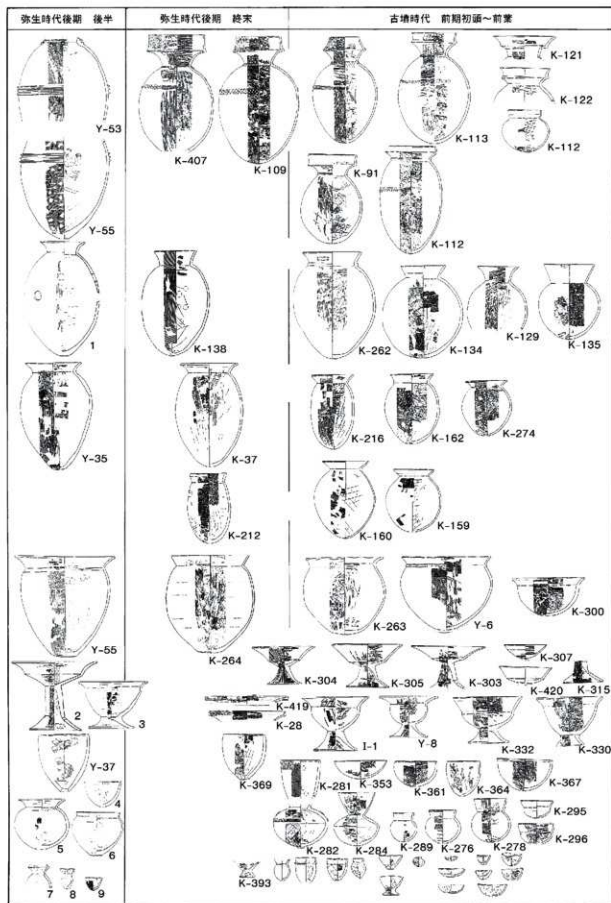
北屋敷ツル遺跡の2号溝からは多量の土器が廃棄状態で出土した。全体の土器の様相は古墳時代前期初頭から前葉で、廃棄された時期もこの時期と言え一括性の強い資料である。しかし、中には古い様相を持つ土器も見ることができ、あえてそれを抽出して、弥生時代後期終末と位置づけ、この時期の土器の形態変化を追ってみる。

壺形土器のK-407は、胴部が張り、その最大径部上位に縞杉状の刻み目が付く断面台形の突帯が付くが、径部の突帯に接して断面勾玉状の浮文が付き、古い様相を残す。またK-91の内面の器面調整は刷毛目为主体であり、次の時期のヘラ削りの盛行期よりも古い傾向が見られる。さらに底部も、平底成形の名残か、他の位置に比較すると器壁が厚い。

単口縁甕も数形態があるが、この時期の土器の形態変化が、長胴から球形への動きの中で見ると、中でも長胴の一群が古く位置づけることが出来る。K-138は長胴丸底で、器面調整にヘラ削りの手法が観察できず、全体の中でも古い形態と考える。

甕形土器も同様で、口縁部が外反し、長胴丸底のk-37がある。内面にヘラ削り痕は観察されず、古い様相を持つと考える。また、甕形土器Ⅳ類とした広口甕の中で、K-264は丸味を帯びた平底で、胴部も前時期に比較するとふくらみ、最大径が中位になっている。さらに、北部九州系の土器と考えられる胴部に斜め叩きを持つK-212も丸底であり、この時期と考える。

高坏は、数タイプが出土しているが、2の賀来中学遺跡の形態から想定すると、高坏Ⅰ類の中でも坏底部が窪むAのK-304が古い形態と考えられる。また脚付鉢も賀来中学校遺跡で3が一定量出



第120図 北屋敷ツル遺跡(K)・石風呂遺跡(I)・由布川小学校遺跡(Y)出土土器総年図

土しており、脚付鉢Ⅱ類AのK-330が古いと想定できる。その他、小型丸底甕の形態は、賀来中学校遺跡では5・6の口縁部が短く、外反するもので、北屋敷ツル遺跡とは異なり、両者の間には時間差が認められるが、形態変化を逃げながら弥生時代後期終末にも存在していたのは確実である。なお、小型甕の1類とした長頸甕は、下部遺跡群で弥生後期後葉で確認されている。

皿・埴形土器やミニチュア土器も賀来中学校遺跡から出土しており、弥生時代後期終末にも確実に存在するが、形態変化が乏しく、抽出することはできない。

3 古墳時代前期初頭から前葉

北屋敷ツル遺跡2号溝から出土した土器群は先述したように、この時期である。壺形土器は在地系の複合口縁甕が主体を占めるが、K-121・K-123などの外来系やその影響を受けたと考えられる複合口縁が外傾するK-113・K-122の甕も散見される。こうした外来系の土器に特徴的な製作技術は内面削り技法であり、その影響は、在地系甕であるK-109の内面にも見ることができる。また、K-120は小型で口縁部の櫛播波状文と胴部の突帯を欠くが、少量存在し、在地形の甕と考え、大型甕の役割を補完するものとする。一方複合口縁部が内湾気味になり、頸部の締りがゆるい長胴のK-112は、これのみであり、北部九州系の可能性が高い。

口縁端部が外反しない短頸甕も、頸部が絞まるものの胴部はK-262・K-144と球状に張る傾向が強まる。また、K-129・K-135のように口縁部が延びる形態も存在する。

壺形土器は出土量の多さから、長胴の在地系甕が一定量存在することが想定できる。その一方内面へ削りて仕上げるK-159・K-160の庄内・布留系の外来系甕も一定量見ることができる。この外来系甕の影響を受けるためか、在地系甕もK-162・K-163やK-158・K-274のように胴部の球形化や器形の小型化を認めることができる。また、数量は多くないが、広口甕の胴部も丸底化し、器高が低い場合、口縁部が外に開くのを補強するためか頸部に突帯が巡るものが目立つ。さらに広口甕の影響か、口縁端部が最大径となる鍋形をした形態も出現する。

在地系の高杯は口縁部が長く延び、杯底部が浅くなり、平坦になってゆく。また、この時期からK-307・K-420のような杯部が小型で、柱状の脚部も出現する。脚付鉢も賀来中学校遺跡の3からこの時期の他器種同様に口縁部が延び、胴部が張る形態変化を逃げ、K-332やK-303・K-324、I-1、Y-8となるものと想定する。また、賀来中学校遺跡で見られた小型甕も口縁部が直口するK-289・K-276・K-278のようになり、K-295・K-296のような外来系の小型丸底甕も存在する。

その他、皿・埴形土器も数量を増やし、形態差も明確化する。また甕も弥生時代後期後葉に比較するとわずかに膨らむ。さらにミニチュア土器も数量と器形が増加する傾向も想定できる。

第3節 大分川中流域の弥生時代から古墳時代初頭の集落変遷

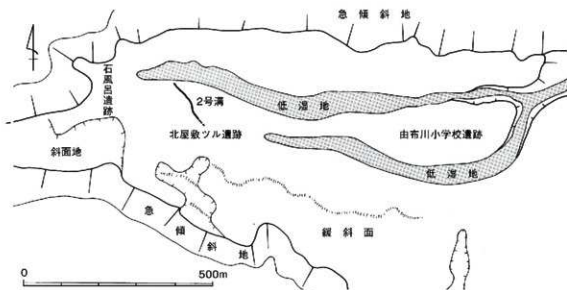
北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡（以下3遺跡と記述する場合もある）は由布岳・黒岳に源を発し別府湾に注ぐ大分川流域にある。大分川は水源に近い由布院盆地や阿蘇野地域を上流域、河口周辺である大分平野とその周辺を下流域とするならば、3遺跡のある地域は、下流域に接する中流域と言える。地形的に見ると、上流域は由布院盆地があるものの、大半は急峻な渓谷を形成している。これに対し、下流域は比較的広い沖積平野を形成するものの、洪積世の丘陵が分断する。こうした中で、3遺跡のある地域は、沖積平野はないものの、3遺跡が立地する洪積世台地や河岸段丘などで構成される比較的平坦な地形を形成している。

こうした地形の中に、縄文時代末から弥生時代、そして古墳時代までの遺跡が展開しており、幾つもの遺跡が発掘調査されている。そこで、その調査成果を基に、この地域での遺跡の動態-集落変遷-を考えてみる。

唐津平野 縄文時代の末に北部九州の玄界灘に面した唐津平野や福岡平野に朝鮮半島から本格的な水稻栽培が伝わる。この地域のほぼ同時期である刻目突帯文を出土する遺跡は、大分市植田市遺跡⁵・荇隈杉下遺跡⁶・玉沢地区糸里跡遺跡群二反田地区⁷（以下玉沢二反田地区遺跡）、由布市挾間町下黒野遺跡⁸・北原遺跡⁹がある。このうち植田市遺跡・荇隈杉下遺跡・玉沢二反田地区遺跡は沖積地に立地し、稲作栽培も想定できるが、下黒野遺跡・北原遺跡は標高約100mの洪積世台地上に立地するため、その可能性は低い。しかも北原遺跡では扁平打製石斧が一定量出土しており、九州の縄文時代晩期の遺物組成の特徴を継承していると言える。また、沖積地立地遺跡の荇隈杉下遺跡・玉沢二反田地区遺跡にも扁平打製石斧が含まれ、こうした地形に立地する集落も同様の可能性が高い。

すなわちこの地域の弥生時代の始まりの頃の状況は、沖積地に立地する動きはみられるものの、縄文時代晩期の生業形態を継続しているものと考えられる。それでも荇隈杉下遺跡以外の4ヶ所の遺跡から出土した土器の組成の中に、縄文晩期の土器群には見ることができず、弥生時代の特徴である密形土器が含まれており、新しい時代の波を確実に受けている。

この地域で本格的に稲作農耕を開始したと言えるのは弥生時代前期後半からである。この時期の遺跡は、大分川や小河川が形成した沖積地内の微高地や、沖積地を見下ろす丘陵上に立地する。前者は大分川の下流域の大分市下郡遺跡群や別府湾に注ぐ吉川沿いの大分市田室東遺跡¹⁰、後者は



第121図 北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡周辺の地形（1/1000）

雄城台遺跡 大分市雄城台遺跡・守岡遺跡がある。

守岡遺跡 これらの遺跡からは、この時期の壺形土器や甕形土器の他、袋状貯蔵穴など北部九州の弥生時代前期の集落を構成する遺構が検出されている。また、田室東遺跡からは収穫具である石包丁や木製品加工用と考えられている小型扁平片刃石斧等が出土している。さらに大分市下郡桑苗遺跡からは弥生時代前期末から中期初頭にかけての木製の鋤や鍬が多量に出土している。こうした遺物の存在は集落周辺の低湿地での稲作開始を物語っていると言える。

このようにして、朝鮮半島から北部九州に伝播した稲作栽培は、弥生時代前期末には大分川下流域やその周辺に確実に伝わっている。その後、弥生時代中期後半については大分川流域で良好な調査例に乏しいが、おそらく弥生時代前期末から中期初頭の状況を継承し、稲作面積の拡大を図るなど、生産性の向上を目指し、水田開発を行っていたことが想像でき、一部は城南遺跡²⁷のように丘陵上でも確認できる。

城南遺跡

こうした、状況が大きく変化するのが弥生時代後期である。大分県を中心とした九州東北部では、それまで弥生時代の遺跡が希薄であった標高約200mから600mの大野川中・上流域の火山灰台地²⁸や、標高約600mから700mの九重連山東麓の高原地帯で大規模な集落が形成されるようになる。その本格的な出現期は弥生時代中期末から後期初頭であり、以後各地で古墳が築かれる古墳時代前期まで、継続して営まれる。

この状況は、県北の宇佐平野や中津平野とその周辺、県西部の日田盆地や玖珠盆地周辺も同様で、弥生時代後期になると遺跡が急激に増加する。その背景には、弥生時代前期に始まる稲作栽培の順調な発展と耕地面積の拡大、人口増加などが複雑に絡み合い、新しい耕作地を求めて拡散・移動したものと想定できる。

こうした、拡散した集落を支えた食物生産は、沖積平野やその周辺では稲作であることが想定できる。しかし周辺に低湿地が広がる沖積地を持たない大野川中上流域の独立性の強い火山灰台地や、九重連山周辺の涼涼で標高の高い高原地帯では大規模で安定的な稲作栽培は困難と思われる。それでも、集落内から数量は多くないが、石包丁や鉄製の摘鎌など穀類を対象とした収穫具が出土している。そこでこうした地域で栽培された穀類については、灌漑を必要としない畑作のアワ・ヒエなどの雑穀類栽培や陸稲栽培、火山灰台地を浸食して形成された細長い谷地での水田稲作などの可能性が求められている²⁹。

火山灰台地

高原地帯

石包丁

畑作

陸稲

大分川下流域から中流域にかけての状況を見ると、大分市雄城台遺跡や守岡遺跡・下郡遺跡群は弥生時代前期から継続的に営まれ、古墳時代前期まで続く遺跡で、この地域の拠点的な集落とも言える。一方、大分市賀東中学校遺跡・宮苑井ノ口遺跡・尼ヶ城遺跡³⁰、由布市北原遺跡・北方下角遺跡は弥生時代後期から始まる遺跡である。本書で報告する北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡も同様で、弥生時代後期から始まる遺跡であり、やはり弥生時代後期に拡散・移動の現象を見ることができると言える。

拡散・移動

そこで、3遺跡が立地する地形を見ると、標高は約100mの礫層を基盤とする洪積世台地上で、地表面は黒色で軟質の「黒ボク」土壌で覆われ、周辺は急峻な斜面となっている。この地理的環境は大野川中流域の阿蘇溶結凝灰岩を基盤とする独立性の強い火山性台地に類似する。さらに、由布川小学校遺跡からは、収穫具である鉄製の摘鎌や狩猟具又は武器である鉄族も数点出土しており、これも大野川中上流域の弥生時代後期集落の内容と類似している。

「黒ボク」

鉄製の摘鎌

水田稲作

こうした鉄製の収穫具が出土することは、集落の周辺で水田稲作を営んでいたことを想定することができる。現在、台地上では江戸時代に開設された水路により、第121図に示した東西に細長い低湿地とその周辺が水田化されている。しかし、現地でも微地形を見ると、それ以前も台地上には西から東に傾斜する二本の低湿地があり、次第に周辺との比高差を増し、由布川小学校の東側で

合流し、谷川となっている。

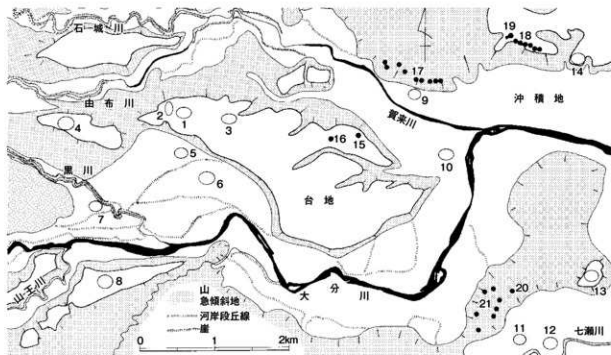
水田経営

台地上での水田経営の可能性を求めるならば、この低湿地が注目されたであろう。近接し相互に関連したと想定される3遺跡は、今回の調査結果で論じるならば、由布川小学校のある微高地に、周辺の低湿地での水田経営を基盤としながら生活する最初の集落が出現しする。その後、順調な水田開発が行われたと推定され、人口の増加に伴い、古墳時代前期前葉にかけて、南側低湿地を挟んで南側にも集落が拡大し、北屋敷ツル遺跡となり、さらに西に拡大し石風呂遺跡として調査した部分となったと考える。

この間に、北屋敷ツル遺跡では北側の低湿地から台地南側斜面に向けて、断面V字の集落を区切る溝が掘り込まれている。こうした弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の頃の集落を区切る溝は、周辺の雄城台遺跡・賀来中学校遺跡・下郡遺跡群・尼ヶ城遺跡などでも確認されており、沖積地・独立性台地など立地に左右されず見ることができる。さらに、北屋敷ツル遺跡では溝は、古墳時代の前期前葉の多量の土器と一緒に埋め立てられている。同様に、賀来中学校遺跡では、弥生時代後期後葉と古墳時代前期前葉の二時期の溝に、それぞれの時期の土器の大量廃棄が確認されている。さらに、同様な状況は雄城台遺跡・尼ヶ城遺跡でも弥生時代後期末の大量土器廃棄が行われている。

墓地

ところで、この3遺跡を支えた人々のムラ、食糧生産の場はほぼ想定できたが、死後の墓地の問題がある。九州では弥生時代になると、水田稲作を開始するが、このことはより定住性を強くする。このため縄文時代は貝塚など日常の生活の範囲の中に墓地を造るが、弥生時代になると集落と墓地が完全に分離し形成される。未確認であるが、3遺跡の墓地も、洪積世台地の上の縁辺部に集団墓地が造られているものと推測できる。それでも小児については集落内に埋葬される場合が多く、周宮苑井ノ口遺跡 辺の宮苑井ノ口遺跡では10数基の小児塚が集落内で確認されている。3遺跡の調査でも、由布川



第122図 大分平野西域の弥生時代後期から古墳時代前期の集落と古墳

- 1.北屋敷ツル遺跡 2.石月呂遺跡 3.由布川小学校遺跡 4.赤野原遺跡 5.北方下角遺跡 6.下市遺跡
7.扶間中学校遺跡 8.北原遺跡 9.宮苑井ノ口遺跡 10.賀来中学校遺跡 11.ガランジ遺跡
12.穂田市遺跡 13.雄城台遺跡 14.尼ヶ城遺跡 15.中尾古墳 16.中尾古墳2号 17.餅田古墳群
18.田崎古墳群 19.蓬来山古墳 20.下迫古墳 21.世利門古墳ほか

小学校遺跡と石風呂遺跡で小児発棺墓を検出しており、同じ状況と言える。

弥生時代後期に始まる、あらゆる立地条件に適応し拡散した集落は、それぞれの場所で規模が拡大し、古墳時代前期前葉まで存続する場合が多い。この時期は、3世紀後半から5世紀にあたり、全国で前方後円墳に象徴される古墳が近畿地方を中心に築造される。こうした、前方後円墳や古墳群は大分川下流域でも築造されている。

大分川の沖積運動で形成された下流域の平野は、丘陵で分断され、幾つかの小地域に分かれている。こうした各地域で、4世紀から5世紀にかけて前方後円墳を中心とした古墳が築造されている。

蓬萊山古墳

3遺跡周辺では、第122図に図示した蓬萊山古墳を中心とした古墳群がある。その立地は、大分川左岸の賀来川との合流地の地域を見下ろす丘陵上で、これらの河川に丘陵から流入する小河川で形成された低湿地が広がる。また、第1図に図示した御陵古墳を中心とした古墳群も、周辺に大分川

御陵古墳

の支流である七瀬川が形成した沖積地を見下ろす丘陵上に立地する。この他、さらに大分川下流の上野丘陵先端部の大臣塚古墳があり、大分川本流とそれに流入する小河川で形成された沖積地を東に見下ろす丘陵先端に築造されている。このように、大分川下流域の古墳時代前期は、小地域の有力者が前方後円墳をそれぞれの地域で築造する状況が認められる。

大臣塚古墳

こうした中、3遺跡のある由布市狭間町地域は、第122図に図示したように、赤野原遺跡、狭間中学校遺跡・由布市北原遺跡・北方下角遺跡・下市遺跡など、弥生時代後期から古墳時代前期前葉にかけて存続する遺跡が点在する小地域を形成している。その一方、それらを集約しその統合形態とも言える前方後円墳の存在を確認することができず、円墳すら見出すことができない。その背景には、河岸段丘や洪積世台地で織り成す地形では、水田開発に適した低湿地が乏しく、多くの人口を支えるためには限界があったと考えられ、突出した有力者の出現に到らなかったと考える。前方後円墳を出現させる背景として、大分川流域では沖積地と河岸段丘・洪積世台地の地理的背景は大きかったものと言える。

大分県下では弥生時代後期に拡散し、規模を拡大しながら前方後円墳や古墳群を出現させた集落は、須恵器やカマド付住居が本格的に使用・構築される6世紀になると再び大きな変化を遂げる。大分平野では、弥生時代前期以来拠点的な集落として存続してきた、沖積地の中で独立性の強い台地上の雄城台遺跡や守岡遺跡、大野川中上流域や九重連山東麓の大集落などは、6世紀に居住した痕跡を認めることはほとんどできない。また、沖積地においても、弥生時代後期に始まる遺跡が6世紀以降も存続することも数少ない。この時期、集落は再び移動し、水田稲作を効率よく経営するための場所求めたと推測する。

3遺跡をはじめ、由布市狭間町の赤野原遺跡、狭間中学校遺跡・由布市北原遺跡・北方下角遺跡・下市遺跡も同様で、5世紀代でほとんどの集落がその場所から移動するためか消えてしまう。

海老毛横穴墓

それでも、この地域には海老毛横穴墓²⁰など横穴墓が築かれており、人々の生活は継続している。おそらく、水田経営のため台地上の集落は効率を上げるために、沖積地の集落は耕作面積を拡大するために、丘陵の裾部分など、不用地にムラを構えたものとする。

以上、3遺跡周辺での弥生時代から古墳時代にかけては、遺跡の出現や存続期間から見ると、集落景観は、少なくとも2度の画期があったと考える。最初は、弥生時代後期後葉で、沖積地での水田稲作の経験を積んだ人々が移動したためか、洪積世台地や河岸段丘上に遺跡が出現する時期である。そして2度目はこうした地理的条件の上に成立していた集落が消える5世紀台である。こうした現象は、大分県内では共通する現象であり、その背景には、水田稲作の発展と耕地の拡大、効率的な水田経営、人口増加、さらには社会的な変革、支配層からの圧力など複雑な要因を想定することができる。

註

- 1 狭間町教育委員会「北原遺跡」1994
- 2 狭間町教育委員会「北方下角遺跡」1997
- 3 大分市教育委員会「賀来中学校遺跡」1992
- 4 大分県教育庁埋蔵文化財センター「賀来西遺跡・宮苑井ノ口遺跡」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第4集 2005
- 5 大分県教育委員会「穂田市遺跡」1994
- 6 大分県教育委員会「雄城台－第8次発掘調査の概要」1987
1972年から1994年にかけて県立高校建設・増築に伴い9次にわたる発掘調査
- 7 大分県教育委員会「馬姓遺跡・北ノ後遺跡・乙院屋敷遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(13)1999
- 8 大分県教育庁埋蔵文化財センター「田室東遺跡」大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第27集 2008
大分市教育委員会「東田室遺跡 2」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第55集 2005
- 9 大分市教育委員会「守岡遺跡－昭和50・51年度発掘調査概報」1979
- 10 大分市教育委員会「下郡遺跡群Ⅰ～Ⅳ」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第 2000～2010
1987年から2004年にかけて区画整理事業に伴い143次にわたる発掘調査
- 11 大分市教育委員会「羽田遺跡」1993
- 12 大分県教育委員会「在隈杉下遺跡」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(11) 1999
- 13 大分県教育委員会「玉沢地区条里路遺跡群」九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(12) 1999
- 14 大分県教育委員会「下黒野遺跡」1973
- 15 大分県教育委員会「下郡桑苗遺跡」大分県文化財調査報告書(13) 1989
- 16 大分市教育委員会「城南遺跡」1993
- 17 1976年から大野川中上流域の圃場整備事業・畑地帯総合整備事業に伴い発掘調査を実施し、弥生時代後期を中心とする大集落を確認。荻町教育委員会「荻台地の遺跡」・竹田市教育委員会「菅生台地の遺跡」大野町教育委員会「大野原の遺跡」・野津町教育委員会「野津川流域の遺跡」の他、各市町村から報告書が刊行されている。
- 18 久住町教育委員会・大分県教育委員会「郡野原田遺跡」2001
- 19 大野町教育委員会「大野原の遺跡」1980ほか
- 20 尼ヶ城遺跡 1978年大分市教育委員会が宅地造成に伴い調査
- 21 大分県教育委員会「大分の前方後円墳」大分県文化財調査報告書第100輯 1998
大分市史編さん委員会「大分市史 上 自然 先史・原史 古代」1987
- 22 大分県教育委員会「昭和43年度緊急発掘調査概要－御陵古墳とその周辺－」1969
大分県教育委員会「御陵古墳緊急発掘調査」1972
- 23 狭間町誌編集委員会「狭間町誌」1984

第1表 北屋敷ツル遺跡 遺物観察表 一土器①

(※カッコ内の数字は複元数値)

母体番号	遺物番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考
				口径	器高	底径	外面	内面	
4	1	包含層	深鉢				地状文→沈線	撫で	
	2	包含層	深鉢				地状文→沈線	撫で	
	3	B-5	深鉢				条痕→撫で→半炭竹管連点文	撫で	波状口縁
	4	包含層	深鉢				外面突帯→撫で→凹線文	撫で	口唇部に連続凹点文
	5	包含層	深鉢				口縁部外面三角突帯→刻目	撫で	山形口縁
	6	O-11	深鉢				条痕→沈線内連続刺突文	条痕	コウゴ-松式土器
	7	O-11	深鉢	(48.0)			条痕→沈線内連続刺突文	条痕→撫で	コウゴ-松式土器
	8	包含層	深鉢				条痕文	条痕文	
	9	包含層	深鉢			(12.3)	条痕文	条痕文	
5	10	包含層	浅鉢	(27.0)			撫で→沈線→ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	11	2号溝	深鉢				撫で→沈線→ヘラ磨き	ヘラ磨き	粗製
	12	2号住居	鉢				撫で→沈線→ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	13	包含層	浅鉢	(33.8)			ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	14	一括	浅鉢	(37.0)			ヘラ磨き	ヘラ磨き	精製土器
	15	Ⅲ層直下	深鉢				条痕→斜め沈線	条痕→ヘラ磨き	
	16	O-10	深鉢				ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	17	C-6	深鉢				ヘラ磨き	ヘラ磨き	
	18	2号溝	深鉢				条痕→刻目突帯→ヘラ磨き	条痕→ヘラ磨き	
	19	包含層	深鉢				条痕→刻目突帯→ヘラ磨き	条痕→ヘラ磨き	
	20	包含層	深鉢	(39.8)			条痕→刻目突帯→ヘラ磨き	条痕→ヘラ磨き	
	21	水田下層	深鉢			(10.0)	撫で	撫で→ヘラ磨き	
6	22	水田下層	深鉢				条痕→刻目突帯→ヘラ磨き	撫で	
	23	1号住居	甕	16.6			縦刷毛→撫で 底部は削り	口縁→刷毛目→撫で 胴部→上位が横、下位が縦の削り	
	24	1号住居	甕	16.1	23.4		細い縦の刷毛目 口縁は撫で	口縁は横撫で 胴部へ削り	胴部-口縁にスス付着
	25	2号住居	壺	(16.0)			横撫で→2段の帯波状文	横撫で	
	26	2号住居	壺	(16.0)			撫で→丹塗り→帯波状文	刷毛目→丹塗り	
	27	2号住居	甕	(14.0)			口縁部は横、胴部は縦の刷毛	口縁部は撫で、胴部はヘラ削り	
8	28	2号住居	器台	(25.8)			帯波状文→丹塗り研磨	丹塗り研磨	
	29	2号住居	高坏				丹塗り→縦のヘラ研磨	撫で	
	30	2号住居	鉢	(8.8)	3.1		刷毛目→ヘラ磨き	ヘラ磨き→丹塗り	丹入れ?
	33	3号住居	壺				縦の刷毛→刷毛目の刻目突帯	撫で	外面の一部に丹
	34	3号住居	壺	(14.0)			縦の刷毛目→撫で	刷毛目 撫で 磨滅している	単口縁壺
	35	3号住居	甕	(19.0)			縦の刷毛目→撫で	横の刷毛目→撫で	
	36	3号住居	甕	(17.4)			縦の刷毛目→撫で・叩き	横・斜めの刷毛目→口縁は横撫で	
	37	3号住居	甕	18.7	34.0		縦の刷毛と下位は板撫で	指撫で→斜めのヘラ磨き	外面下位にスス付着
11	38	3号住居	甕	(19.0)			縦の刷毛→口縁部は横撫で	削り→横刷毛→縦ヘラ磨き	外面下位にスス付着
	39	3号住居	鉢				不定向方の刷毛目→沈線	刷毛目原体の刺突痕	
	40	3号住居	鉢	8.0	7.9		指押さえ→撫で	指押さえ→撫で	手捏ね
	41	3号住居	鉢	3.0	3.5		指押さえ→撫で・磨き・丹塗り	指押さえ→撫で	手捏ね
	43	5号住居	甕	(17.2)			縦の刷毛→口縁部は横撫で	斜め刷毛目→丁寧な撫で	
	44	5号住居	甕				縦の刷毛→横撫で	横撫で	
	45	5号住居	甕	(17.0)			縦の刷毛→口縁部は横撫で	口縁は横、胴部は斜めのヘラ磨き	スス付着
	46	5号住居	甕	17.8	32.0		縦の刷毛→口縁・底部は撫で	横・斜めの刷毛目→撫で	胴部全面にスス付着
	47	5号住居	甕	17.8	34.0		縦の刷毛→口縁・底部は撫で	細かい横刷毛→口縁・底部は撫で	
	48	5号住居	脚付甕	(15.8)			横撫で→縦・斜めのヘラ磨き	横撫で・削り→縦のヘラ磨き	
	49	5号住居	脚			(5.0)	短い単位の縦の刷毛目	横・斜めの刷毛目	
15	50	5号住居	鉢	14.2	10.4		ヘラ削り→縦の刷毛目	撫で	
	51	5号住居	鉢	(13.6)	8.5		ヘラ削り→縦の刷毛目・撫で	丁寧な撫で	
	52	5号住居	鉢	8.7	5.9		指押さえ→撫で	指押さえ→撫で	外面にスス付着
	53	5号住居	鉢	(11.1)	8.7	5.2	丁寧な横撫で	ヘラ削り	二次焼成
17	54	6号住居	甕	(33.0)			縦の刷毛→撫で→掴みの突帯	横の刷毛目	
	55	6号住居	壺	(21.8)			縦の刷毛→撫で	横撫で・磨き	
	56	6号住居	壺	(21.4)			縦の刷毛→撫で	横撫で・磨き	
	57	6号住居	壺	(21.8)			縦の刷毛→撫で	撫で・削り	
	58	6号住居	壺	(18.6)			縦の刷毛→口縁部は横撫で	撫で→ヘラ磨き	

第2表 北屋敷ツル遺跡 遺物観察表 一土器②

押込番号	遺物番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考
				口径	器高	底径	外面	内面	
17	59	6号住居	壺	(13.0)			磨減	磨減	単口縁壺
	60	6号住居	壺	(19.8)			縦の刷毛→口縁部は横撫で	横の刷毛→口縁部は横撫で	
	61	6号住居	鉢	(32.8)			斜めの刷毛→口縁部は横撫で	横の刷毛目→ヘラ磨き	
	62	6号住居	小鉢	(5.2)			指押さえ	指押さえ	ミニチュア土器
22	63	土坑1	大甕				撫で	撫で	備前焼
	64	土坑2	大甕				撫で	撫で	備前焼
	65	土坑2	大甕			(35.6)	撫で	撫で	備前焼
	66	土坑3	脚付鉢	(19.6)			横撫で→横ヘラ磨き	横撫で	
23	67	2号溝	壺	(9.2)			縦刷毛→丹塗り研磨→二段の 襷掻波状文 頸部は縦ヘラ研磨	斜めの刷毛目→丁寧な撫で	
	68	2号溝	壺	(11.0)			縦刷毛→三段の襷掻波状文→ 丹塗り 頸部は縦の刷毛目	斜めの刷毛目→撫で・指押さえ	
	69	2号溝	壺	(13.4)			横撫で→丹塗り→襷掻波状文	指押さえ→横撫で	
	70	2号溝	壺	(12.3)			口縁は縦刷毛→三段の襷掻波 状文→丹塗り 頸部は縦刷毛目→斜め剃り突帯	横刷毛→横撫で	
	71	2号溝	壺	(18.0)			横刷毛→丹塗り→三段の襷掻 波状文 頸部は縦刷毛目	横刷毛目→撫で	
	72	2号溝	壺	(13.9)			横刷毛→二段の襷掻波状文 頸部は縦刷毛目	横刷毛目→撫で	
	73	2号溝	壺	(15.1)			口縁は二段の襷掻波状文 頸部は縦の刷毛目	横の刷毛→強い横撫で	
	74	2号溝	壺	(15.7)			口縁は四段の襷掻波状文	強い横撫で	
	75	2号溝	壺	(17.8)			横撫で→四段の襷掻波状文	横撫で	
	76	2号溝	壺	(14.4)			縦刷毛→二段の襷掻波状文 頸部は縦の刷毛目→突帯	縦・斜めの刷毛目→撫で	
	77	2号溝	壺	(16.3)			口縁は撫で→三段の襷掻波状文 頸部は縦刷毛目→弧み突帯	撫で・指押さえ 頸部は横刷毛目	
	78	2号溝	壺	(11.2)			縦刷毛→二段の襷掻波状文→ 頸部は縦の刷毛目→突帯	指押さえ→横・斜めの刷毛目	
	79	2号溝	壺	(21.8)			口縁は三段の襷掻波状文 頸部は縦の刷毛目	撫で・指押さえ 頸部は横・斜め の刷毛目	
	80	2号溝	壺	18.5			口縁は撫で→一段の襷掻波状文	撫で・指押さえ	弧み上げ突帯
	24	81	2号溝	壺	(20.8)			口縁は撫で→一段の襷掻波状文 頸部は斜め刷毛目→弧み突帯	斜め刷毛目→口縁部は撫で
82		2号溝	壺	(14.8)			口縁は撫で→三段の襷掻波状文 頸部は斜め刷毛目→弧み突帯	横撫で・指押さえ・剥落	
83		2号溝	壺	(15.2)			縦刷毛目→三段の襷掻波状文 頸部は縦刷毛目・三角突帯	横撫で・指押さえ 頸部は横刷毛目	
84		2号溝	壺	(16.6)			撫で→丹塗り→三段の襷掻波状文 頸部以下は縦刷毛→三角突帯	横刷毛目→撫で・指押さえ	
85		2号溝	壺	(15.7)			縦刷毛目→三段の襷掻波状文 頸部以下は縦刷毛目→三角突帯	横刷毛目→撫で・指押さえ	
86		2号溝	壺	13.4			口縁は撫で→二段の襷掻波状文 頸部は斜め刷毛目→三角突帯	斜め刷毛目→口縁部は撫で 頸部以下→撫で・指押さえ	
87		2号溝	壺	(12.6)			口縁は撫で→三段の襷掻波状文 頸部は縦刷毛目・磨き→突帯	横撫で・指押さえ 頸部は横刷毛目	
88		2号溝	壺	20.8			口縁は撫で→二段の襷掻波状文 頸部に円形浮文 頸部は格子剃り突帯	横刷毛→撫で・指押さえ	
25	89	2号溝	壺				襷掻波状文 頸部は縦刷毛目	横刷毛目→撫で	
	90	2号溝	壺	(26.6)			口縁は撫で→四段の襷掻波状文 頸部は縦刷毛目→弧み突帯 頸部は縦刷毛目→粗いヘラ磨き	口縁部は強い横撫で 頸部は縦刷毛目 頸部は斜め刷毛目	
	91	2号溝	壺	10.4	57.4		口縁は撫で→二段の襷掻波状文 頸部は縦・斜め刷毛目→弧み突帯 頸部は縦主体刷毛目→粗いヘ ラ磨き→格子剃り目突帯	横・斜め主体の刷毛目	
26	92	2号溝	壺				頸部に横刷毛が残る 撫で	撫で・指押さえ痕	
	93	2号溝	壺				縦刷毛→斜め剃り目突帯	横刷毛	
	94	2号溝	壺				頸部は縦刷毛 浅い剃り目突帯 頸部は刷毛目→縦主体の磨き	横刷毛目→撫で・指押さえ	
	95	2号溝	壺				頸部1条、側部2条の突帯 頸部は縦刷毛目→襷掻波状文 →横ヘラ研磨	撫で→横ヘラ研磨	
	96	2号溝	壺				縦刷毛目→粗いヘラ磨き	横刷毛目→指押さえ	
	97	2号溝	壺				叩き→縦刷毛目→粗いヘラ磨き	横刷毛目	内外面丹塗り

第3表 北屋敷ツル遺跡 遺物観察表 一土器③

押込 番号	遺物 番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考
				口径	器高	底径	外面	内面	
27	98	2号溝	壺				縦刷毛目→刷目帯状突帯	斜め刷毛目	
	99	2号溝	壺				縦刷毛目→羽状刷目帯状突帯	斜め刷毛目	
	100	2号溝	壺		3.8		全体縦刷毛目→粗い縦へら研磨 頸部は掴み突帯と1対の浮文 胴部に格子刷目の突帯	頸部は横、胴部上位は斜め、 下位は縦の刷毛目	平底の名残あり
28	101	2号溝	壺				全体縦刷毛目→底部周辺横刷毛 頸部に掴み上げ突帯 胴部に格子刷目の突帯	頸部から胴部上位は斜め、下位は 縦刷毛目→胴部上位は横で	
	102	2号溝	壺				斜め刷毛目→縦へら研磨→斜め 刷目帯状突帯	斜め方向の刷毛目 指圧痕	突帯から垂直に数条の 丹塗り
29	103	2号溝	壺				縦方向を主体とした刷毛目→ 刷目帯状突帯	斜め方向の刷毛目 指圧痕	幅4~5cmの粘土帯の 磨き目あり
	104	2号溝	壺				格子刷目帯状突帯の上位は横で、 下位は縦へら研磨	横刷毛目、指撫で、指押さえ	
	105	2号溝	壺				斜め刷毛目→縦へら研磨→斜め 刷目帯状突帯	斜め刷毛目→へら磨き	
30	106	2号溝	壺				縦刷毛目→粗い縦へら磨き→羽 状刷目帯状突帯と凹形浮文	斜め刷毛目→撫で、指押さえ	底部に近い割れ口は 研磨加工
	107	2号溝	壺	18.8	42.3		口縁は斜め刷毛→擽指波状文 頸部は縦刷毛→縦へら磨きで掴 み突帯 胴部は縦刷毛目で格子刷目帯状 突帯の上位は横へら磨き、下位は 縦へら磨き	口縁は横刷毛、撫で→横へら研磨 頸部は縦刷毛→へら磨き 胴部上位は横刷毛、下位は縦刷毛 →撫で	胴部最大径28.8cm
	108	2号溝	壺		55.7 +		口縁は撫で→二段の擽指波状文 頸部は縦刷毛→掴み上げ突帯 胴部は縦主体の刷毛目で中位の 帯状突帯の刷目の原形は刷毛目 原形	口縁は横刷毛→撫で 頸部は横、斜め刷毛 胴部は縦刷毛で底部周辺は縦刷毛 目	胴部最大径35.4cm
31	109	2号溝	壺	(13.0)	47.7		口縁は撫で→五段の擽指波状文 頸部は縦刷毛→縦へら磨き→三 角突帯 胴部は縦刷毛目で中位の刷目 帯状突帯の上位は丁寧な横へら 研磨、下位は縦へら研磨	口縁は横刷毛→撫で 頸部は縦、斜め刷毛→撫で 胴部は縦刷毛、縦へら磨り→一部 撫で	平底の名残あり 胴部最大径29.0cm
	110	2号溝	壺	(15.8)	30.1 +		口縁は撫で→一段の擽指波状文 頸部は縦刷毛 突帯なし 胴部は縦刷毛目で下位はへら磨 で、研磨	口縁は斜め刷毛→撫で 頸部は横、斜め刷毛 胴部は上位から中位が横、中位か ら下位にかけて斜めの刷毛目で 底部周辺はへら磨り	胴部最大径23.0cm
	111	2号溝	壺	(20.6)	48.6		口縁は撫で→頸部境に刷目 頸部は斜め刷毛→三角突帯 胴部は縦刷毛目で中位に刷目 帯状突帯	口縁は横撫で 頸部は横、斜め刷毛目 胴部は横、斜め刷毛目→粗い縦 へら研磨 底部周辺は指の撫で上げ	北部九州系 胴部最大径28.0cm
32	112	2号溝	壺		19.8		口縁は斜め刷毛目→撫で 頸部は縦刷毛→撫で→掴み突帯 胴部は叩き→縦刷毛目 磨減	口縁は横刷毛→横へら研磨 頸部は横撫で 胴部は横、斜め刷毛目→撫で	胴部最大径28.0cm
	113	2号溝	壺	(19.6)	37.8		口縁は縦刷毛目→頸部境は撫で 頸部は縦刷毛→鈍突三角突帯 胴部は縦刷毛目→上位から中位 は横、下位は縦のへら磨き 胴部中位に斜め刷目帯状突帯	口縁部と頸部は横刷毛目 胴部は上位が撫でと指押さえ、 下位は横刷毛目→撫で、指押さえ	外面と内面の頸部以 上は丹塗り 胴部最大径32.6cm
	114	2号溝	壺	(12.1)			口縁は斜め刷毛、頸部は横で	口縁は撫で、頸部は斜め刷毛	
32	115	2号溝	壺	(15.2)			口縁部から頸部にかけて縦刷毛 口縁上位と頸部境に帯状丹塗り	口縁は横刷毛→撫で→丹塗り 頸部は斜め刷毛目	
	116	2号溝	壺	(14.0)			口縁部から肩部まで斜め刷毛 口縁上位と頸部境に帯状丹塗り	口縁部から肩部まで横撫で 口縁部上位に帯状丹塗り	
	117	2号溝	壺	(16.1)			口縁は指圧→縦刷毛 頸部から胴部は粗い縦刷毛→縦 へら研磨	口縁は指圧→斜めの縦撫で 頸部は斜め刷毛、胴部は指押さえ と強い指撫で	
	118	2号溝	壺	(11.8)			口縁は斜め刷毛→横撫で 頸部から肩部は縦刷毛	口縁部は横撫で 頸部から肩部は斜め刷毛→指圧	187と同一個体
	119	2号溝	壺				縦、斜め刷毛目→撫で	不定方向の刷毛→撫で	186と同一個体 外面にスス付着
	120	2号溝	壺	(19.7)	30.2		口縁は横撫で、頸部は縦刷毛→ 横撫で→掴み突帯 胴部は縦刷毛目→縦へら研磨	口縁は指押さえ→横撫で 頸部は横撫で 胴部は斜め刷毛目→上位は横撫で 下位は刷毛目が残る 底部は強い指圧痕	胴部最大径20.6cm

第4表 北屋敷ツル遺跡 遺物観察表 一土器④

押込番号	遺物番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考
				口径	器高	底径	外面	内面	
33	121	2号溝	壺	(20.6)			全面斜め刷毛→横撫で	口縁は横刷毛→横撫で	二重口縁
	122	2号溝	壺	16.0			口縁から頸部は横撫で 肩部は細かい縦刷毛	口縁は横撫で 肩部は横ヘラ削り・指押さえ	
	123	2号溝	壺	10.8	14.2		口縁部から頸部は横撫で 胴部は縦刷毛→丁寧な撫で	口縁部から頸部は横撫で 胴部は横ヘラ削りで底部に指圧痕	胴部最大径16.0cm
34	124	2号溝	壺	(11.4)			横撫で→縦刷毛→縦ヘラ研磨	横ヘラ削り→横ヘラ研磨	
	125	2号溝	壺	(12.7)			口縁は斜め刷毛→撫で	口縁は粗い斜め刷毛→撫で 肩部は縦刷毛	
	126	2号溝	壺	(12.4)			口縁部は縦刷毛→横撫で 肩部は縦刷毛→粗い横ヘラ研磨	口縁は横斜め刷毛→横ヘラ研磨 肩部は指押さえ→撫で	
	127	2号溝	壺	(16.8)			口縁は斜め刷毛→横撫で 胴部は縦刷毛→横刷毛	口縁は横撫で 肩部は横ヘラ削り→撫で・指押さえ	内面に粘土積痕
	128	2号溝	壺	(15.3)			口縁は縦刷毛→丁寧な横撫で 胴部は縦刷毛	口縁は横撫で 胴部は横・斜め刷毛目	
	129	2号溝	壺	(13.2)			口縁は縦刷毛→横ヘラ磨き 胴部は縦刷毛→縦ヘラ研磨	口縁は横ヘラ研磨 胴部は刷毛→上位は縦指撫で・ 下位は斜めのヘラ削り	
	130	2号溝	壺				頸部は横撫で 胴部は縦刷毛目→縦ヘラ磨き	頸部は横撫で 胴部は縦ヘラ削り	胴部最大径25.4cm
	131	2号溝	壺	12.0			口縁は斜め刷毛→横撫で 胴部は縦刷毛→縦ヘラ磨き・指圧	口縁は横撫で→横ヘラ磨き 胴部は横撫で・指押さえ	外面にスス付着 二次焼成?
	35	132	2号溝	壺	(15.2)	28.9		口縁は斜め刷毛→横撫で 胴部は縦刷毛→縦ヘラ磨き	口縁は横撫で 胴部は横ヘラ削り→縦ヘラ研磨
133		2号溝	壺	(18.0)	30.7		口縁は横撫で 胴部は縦刷毛目→撫で	口縁は上位と下位が縦、中位が 縦の刷毛目 胴部は縦刷毛目→撫で	磨減している
134		2号溝	壺	(14.4)	31.2		口縁は横撫で 胴部は縦・斜めの刷毛目	口縁は横撫で 胴部は上位は横刷毛目→削り胴 部下位は縦ヘラ削り	胴部最大径26.8cm
36	135	2号溝	壺	(16.9)	25.3		口縁は横方向の丁寧な撫で 胴部は上位が撫で、中位が刷毛、 下位がヘラ磨き	口縁は横撫で 胴部上位は縦、胴部中位は縦方 向の刷毛目	胴部最大径20.8cm
	136	2号溝	壺				口縁は撫で、胴部は刷毛目・ヘラ 削り→斜め・縦のヘラ磨き	口縁は横刷毛・胴部は不定方向 の刷毛目で、中位は粗い	胴部最大径25.2cm
37	137	2号溝	壺	(12.0)			口縁は横撫で、胴部は縦ヘラ磨き	口縁は撫で 胴部は板状工具の撫で	胴部最大径24.8cm
	138	2号溝	壺	13.7	35.3		口縁部から底部まで縦刷毛→ 一部撫で	口縁は斜め刷毛→撫で 胴部は不定方向の刷毛目→撫で	外面スス付着 胴部最大径22.9cm
	139	2号溝	壺	(14.9)			口縁は横撫で、胴部は縦刷毛	コケから胴部は撫で?	磨減著しい
	140	2号溝	壺	(14.0)			口縁は横撫で、胴部は縦刷毛	口縁は横撫で、胴部は横刷毛	内面にスス
	141	2号溝	壺	(18.0)			縦刷毛→口縁端横撫で	斜め刷毛→横撫で・指押さえ	
	142	2号溝	壺	(15.0)			口縁は横撫で、胴部は縦刷毛	口縁は横撫で、胴部は粗い横 刷毛→板状工具の撫で	
	143	2号溝	壺	(20.0)			縦刷毛→口縁は横撫で、胴部は 粗い横ヘラ研磨	口縁は横撫で、胴部は横刷毛→ 粗い横ヘラ研磨	
	144	2号溝	壺	(17.5)			斜め・縦の刷毛目	口縁は横・胴部は斜めの刷毛 ・下位は縦のヘラ削り	外面にスス付着
	145	2号溝	壺	(16.8)			口縁は横撫で、胴部は縦刷毛	口縁は横ヘラ磨き 胴部はヘラ削り→撫で	
	146	2号溝	壺				縦主体の刷毛目	横刷毛→横ヘラ研磨	
38	147	2号溝	壺	(17.5)			口縁は横撫で 胴部は上位が斜め刷毛目・下位 は縦ヘラ削り	口縁は横撫で 胴部は縦ヘラ削り→撫で	粗製
	148	2号溝	壺	(13.6)			縦刷毛→丹塗り横ヘラ研磨	口縁は丹塗りヘラ研磨 胴部はヘラ削り→一部ヘラ研磨	外面スス付着
	149	2号溝	壺	(15.0)			口縁は横撫で 胴部は縦・横・斜めの刷毛目	口縁は横撫で 胴部は斜めのヘラ削り	外面スス付着
	150	2号溝	壺	(15.6)			全面刷毛→撫で	口縁は撫で、胴部はヘラ削り	激しく磨減
	151	2号溝	壺	(16.4)			口縁は撫で、胴部は縦刷毛目	口縁はヘラ削り、胴部はヘラ削り	内外面激しく磨減
	152	2号溝	壺	(16.0)			口縁は横撫で 胴部は不定方向の刷毛目	口縁は撫で 胴部はヘラ削り→撫で	
	153	2号溝	壺	(17.2)			口縁は横撫で 胴部は不定方向の刷毛目	口縁は撫で 胴部はヘラ削り→撫で	胴部にスス
	154	2号溝	壺	16.6			口縁は斜め刷毛→横撫で 胴部は縦刷毛→不定のヘラ磨き	口縁は横ヘラ磨き 胴部は不定方向のヘラ削り	口縁・胴部にスス
39	155	2号溝	壺	(16.2)			口縁は横撫で 胴部は粗い単位の縦刷毛目 →下位磨減	口縁は刷毛→撫で 胴部は縦ヘラ削り、下位は撫で	胴部中位スス付着
	156	2号溝	壺	(16.0)			口縁は横撫で 胴部は縦刷毛→撫で	口縁は横撫で 胴部は縦ヘラ削り	胴部下位スス付着

第5表 北屋敷ツル遺跡 遺物観察表 一土器⑤

押込番号	遺物番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考
				口径	器高	底径	外面	内面	
39	157	2号溝	甕	(124)	17.6		口縁は横撫で 胴部は縦刷毛→横撫で	口縁は刷毛→撫で 胴部は縦へつ削り→撫で・胴部は横へつ磨き	胴部下位スス付着
	158	2号溝	甕	(138)	18.4		口縁は横撫で 胴部は縦・斜め刷毛→撫で	口縁は横撫で→横へつ研磨 胴部は指押さえ→底部周辺は横、それ以外は縦のへつ磨き	胴部下位スス付着
	159	2号溝	甕	136	21.2		口縁は横撫で 胴部は縦・斜め刷毛→撫で	口縁は横撫で 胴部は横・斜めへつ削り	
	160	2号溝	甕	15.1	25.9		口縁は縦刷毛→横撫で 胴部は縦・斜め刷毛→撫で	口縁は横撫で、端部肥厚 胴部は斜め・縦へつ削り	
40	161	2号溝	甕	14.4	23.2		口縁は横撫で 胴部は縦刷毛→縦へつ磨き	口縁は横撫で→横へつ研磨 胴部は横刷毛→縦へつ研磨	胴部中位スス付着
	162	2号溝	甕	14.0	23.6		口縁は横撫で 胴部は細かい縦刷毛→底部周辺は撫で	口縁は横へつ磨き 胴部は斜めから縦刷毛で底部周辺は撫で	胴部下位は二次焼成痕
	163	2号溝	甕	15.6	23.3		口縁は縦刷毛→横撫で 胴部は縦主体の刷毛目	口縁は横刷毛目 胴部は上位は横、下位は縦の刷毛目→横へつ研磨	
	164	2号溝	甕	16.8	26.5		口縁は縦刷毛→横撫で 胴部は斜め刷毛→下位は縦へつ研磨	口縁は縦刷毛→横撫で 胴部は横から斜め刷毛→撫で	底部周辺にスス付着
41	165	2号溝	甕	(18.9)			横撫で	横撫で	
	166	2号溝	甕	(17.0)			粗い縦刷毛	横刷毛→横へつ研磨	
	167	2号溝	甕	(21.4)			縦・斜めの刷毛目	斜め刷毛	
	168	2号溝	甕	(12.7)			刷毛目→撫で、一部へつ磨き	口縁は斜め刷毛、胴部は撫で	単口縁否?
	169	2号溝	甕	(17.0)			全面縦刷毛→口縁は横撫で	口縁は刷毛→横へつ研磨	
	170	2号溝	甕	(14.9)			横撫で、胴部は斜め刷毛	横撫で、胴部は斜め刷毛	
	171	2号溝	甕	(18.8)			斜め刷毛→横撫で	口縁は横刷毛→横へつ研磨 胴部は指押→斜めへつ研磨	
	172	2号溝	甕	(17.4)			横撫で、胴部は縦刷毛	口縁は横刷毛→横へつ研磨 胴部は横・斜め刷毛目	
	173	2号溝	甕	(18.8)			口縁は縦、胴部は斜めの刷毛	口縁は横、胴部は斜めの刷毛	
	174	2号溝	甕	(17.0)			口縁は横撫で、胴部は縦刷毛→撫で	全面丁寧な横撫で	
	175	2号溝	甕	(19.1)			口縁は横撫で 胴部は横・斜め刷毛→斜めへつ磨き	口縁は横撫で 胴部は縦の指削り→撫で	
	176	2号溝	甕	(20.0)			口縁は横撫で、胴部は縦刷毛	横・斜めの刷毛	
	177	2号溝	甕	(17.8)			口縁は横撫で、胴部は縦刷毛	全面斜め刷毛→口縁は撫で	
	178	2号溝	甕	(17.8)			全面縦刷毛→口縁は横撫で	全面横撫で→胴部はへつ研磨	
	42	179	2号溝	甕	(13.6)			撫で→磨減	全面撫で→口縁は斜め刷毛後
180		2号溝	甕	(14.4)			全面縦刷毛→口縁は横撫で	全面横撫で→胴部はへつ研磨	外面にスス付着
181		2号溝	甕	(16.0)			口縁は横撫で、胴部は縦刷毛	口縁は横へつ磨き 胴部はへつ削り→撫で	
182		2号溝	甕	(14.6)			口縁は斜め、胴部は縦の刷毛	全面斜め刷毛→口縁は横撫で	
183		2号溝	甕	(17.1)			口縁は横撫で、胴部は縦刷毛	全面斜め刷毛目→横撫で	
184		2号溝	甕	(19.0)			口縁は横刷毛→横撫で 胴部は縦刷毛	口縁は横刷毛→横撫で 胴部は斜め刷毛	
185		2号溝	甕	(16.4)			口縁は縦刷毛→横撫で 胴部は斜め刷毛	口縁は横撫で 胴部はへつ削り→撫で・指押直	外面にスス付着
186		2号溝	甕	(16.2)			全面縦刷毛→口縁は横撫で	全面横刷毛目→胴部指押し	
187		2号溝	甕	(18.4)			口縁は横撫で、胴部は斜め刷毛	全面横刷毛→粗い横へつ研磨	
188		2号溝	甕	(17.6)			口縁は縦刷毛→横撫で 胴部は縦刷毛→横へつ磨き	口縁は横・斜め刷毛 胴部は上位が横、中位が縦の刷毛目→上位は斜めのへつ削り	
43	189	2号溝	甕	(18.0)			口縁は横撫で、胴部は縦刷毛目	口縁は横撫で、胴部は斜め・横刷毛目→粗い横へつ研磨	内外面にスス付着
	190	2号溝	甕	(18.0)			口縁は縦刷毛→横撫で 胴部は縦刷毛→肩部と胴部下位は撫で	口縁は斜め刷毛→肩部は撫で・指押さえ胴部下位は縦へつ削り	
	191	2号溝	甕	17.3			全面斜め刷毛目→一部横撫で	口縁は横、胴部は斜め刷毛目→胴部は撫で	
	192	2号溝	甕	(18.0)			口縁は横撫で 胴部は縦刷毛→一部撫で	口縁は横撫で、胴部は斜め刷毛目→胴部下位は粗いへつ研磨 刷毛目の木口痕あり	
	193	2号溝	甕	16.8			口縁は横撫で 胴部は縦刷毛→縦へつ磨き	口縁は横、胴部は斜め刷毛目→胴部は撫で→縦へつ磨き	

第6表 北屋敷ツル遺跡 遺物観察表 一土器⑥

押込番号	遺物番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考
				口径	器高	底径	外面	内面	
44	194	2号溝	甕 (13.7)				全面縦刷毛→口縁は横撫で	口縁は横撫で、胴部は斜め刷毛	
	195	2号溝	甕 (15.2)				口縁から肩部まで横撫で 胴部は不定方向の刷毛目	口縁から肩部まで横撫でと指 押さえ 胴部は横・斜め刷毛目	
	196	2号溝	甕 (17.0)				口縁は縦刷毛→横撫で 胴部下位は縦へう削り→縦刷毛	口縁は横撫で→横へう研磨 胴部は横刷毛→下位は粗い 縦へう研磨	
	197	2号溝	甕 (18.0)				口縁は縦刷毛→横撫で 胴部は縦刷毛	口縁は横撫で、胴部は斜め・横 刷毛目→粗い縦へう研磨	内外面にスス付着
	198	2号溝	甕 (17.0)				口縁は斜め刷毛→横撫で 胴部は縦刷毛	口縁は斜め刷毛→横へう磨き 胴部は斜め刷毛目→横撫で	
	199	2号溝	甕 (15.0)				口縁部は縦刷毛目 胴部は不定方向の刷毛目	口縁は横へう磨き 胴部は斜め刷毛目→縦へう研磨	
45	200	2号溝	甕 (16.6)				口縁は横撫で、胴部は縦刷毛で、 下位へう削り痕	口縁は横刷毛 胴部は横で→粗い縦へう研磨	外面にスス付着 底部内面に黒焦げ
	201	2号溝	甕 (17.0)				口縁は斜め刷毛→横撫で 胴部は粗い縦刷毛→下位は横で	粗と密の刷毛を交互に斜めに 使用→底部周辺は横で	外面にスス付着
	202	2号溝	甕 (16.4)				口縁は横撫で、胴部は縦刷毛	口縁は横撫で→横へう研磨 胴部は下位へう削り、上位斜め 刷毛→粗い不定方向のへう磨き	外面にスス付着
	203	2号溝	甕 20.0				口縁は縦刷毛→横撫で 胴部は縦刷毛→粗い縦へう磨き	口縁は横刷毛→横へう磨き 胴部は縦へう削り→横刷毛→ 粗い縦へう磨き	外面にスス付着
	204	2号溝	甕 13.0				口縁は横撫で、胴部は斜め刷毛 →横で	口縁は横撫で、胴部は斜め刷毛 →横で	器面は磨滅
46	205	2号溝	甕 18.0				口縁は横撫で 胴部は縦刷毛→横で	口縁は横撫で 胴部は斜め刷毛→横で・指押え	外面上位にスス付
	206	2号溝	甕				縦刷毛→横で	斜め刷毛→横で	
	207	2号溝	甕				頸部は横で、胴部は縦刷毛目	頸部から胴部上位は縦刷毛、 下位は横で	
	208	2号溝	甕				へう削り→縦刷毛 二次焼成で器面剥離、赤褐色化	全面へう削りで上位は→横刷 毛→へう磨き、下位は横で	外面にスス付着
47	209	2号溝	甕				刷毛目→軽い横で	へう削り→刷毛目・指押痕	
	210	2号溝	甕				刷毛目→横で	へう削り→横で・一部へう磨き	
	211	2号溝	甕 (13.4)				平行叩き→縦刷毛目	口縁は横刷毛で、胴部は斜め 刷毛目→へう磨き	外面にスス付着
	212	2号溝	甕 11.4	23.7			平行叩き→縦刷毛目・横で	口縁部から胴部上位は斜め刷 毛目。胴部下位は縦方向の強 い指撫で	外面にスス付着
	213	2号溝	甕 15.4				縦刷毛→口縁部周辺は横で	斜め刷毛目→口縁部は横撫で	胴部・底部にスス付着。 器面未変
	214	2号溝	甕 16.0	24.4			縦刷毛目→口縁部周辺は横撫で	胴部縦刷毛→口縁は横刷毛 のへう削り	外面にスス付着
48	215	2号溝	甕 14.3	22.6			縦方向主体の刷毛目	口縁は横撫で、胴部中位は斜め 刷毛目で下位は強い指撫で	外面にスス付着
	216	2号溝	甕 13.8	25.3			縦刷毛目→口縁部と底部周辺は 横で	口縁は横刷毛。胴部はへう削り →横刷毛→横へう研磨	
	217	2号溝	甕 16.9	33.3			縦刷毛目→口縁部と底部周辺は 横で	底部周辺へう削り→口縁部から 胴部中位は粗いへう磨き	
	218	2号溝	甕 (17.5)	31.5			縦方向主体の刷毛目→口縁部 と底部周辺は横で	胴部は縦刷毛目→口縁部横撫で、 胴部は横で、頸部周辺に削り痕	胴・底部にスス付着。 器面未変
49	219	2号溝	甕 (14.3)	27.6			斜め方向主体の刷毛目→口縁部 と底部は横で	口縁は横へう磨き、胴部は縦・斜 め刷毛目→横で	外面にスス付着
	220	2号溝	甕 19.8	28.6			平行叩き→縦へう削り	口縁は横、胴部不定方向の横で	
	221	2号溝	甕 17.0	29.4			縦主体の刷毛目→口縁部横撫で	斜め刷毛目→口縁横撫で	外面にスス付着 内底部に黒こげ痕
	222	2号溝	甕 14.7	27.3			縦主体の刷毛目→横で	不定方向の刷毛目→横で	器面は磨滅
	223	2号溝	甕 17.6	36.2			縦刷毛目主体→底部周辺横で	口縁は横撫で、胴部上位は斜め 刷毛目→横で、下位は削り→横 で、斜め刷毛目	外面にスス付着 内底部に黒こげ痕
50	224	2号溝	甕				刷毛目→横で	横で	
	225	2号溝	甕				横で	粗い刷毛目→横で	外面にスス付着
	226	2号溝	甕				縦方向の刷毛目	不定方向のへう削り	
	227	2号溝	甕		4.0		縦方向の刷毛目→横で	斜め刷毛目→横で	平底の名残あり
	228	2号溝	甕?				縦方向の刷毛目	縦へう削り	
	229	2号溝	甕?				縦方向の刷毛目→横で	横刷毛目→粗いへう磨き	
	230	2号溝	甕				斜め・縦方向の刷毛目	へう削り→横で・一部刷毛	
	231	2号溝	甕				縦方向の刷毛目→横で	斜め刷毛目→下位は強い横で	

第7表 北屋敷ツル遺跡 遺物観察表 一土器⑦

押込番号	遺物番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考
				口径	器高	底径	外面	内面	
51	232	2号溝	甕				粗い縦刷毛目→底部周辺は撫で	斜め刷毛目→撫で	胴部スス付着
	233	2号溝	甕				撫で→斜め刷毛目	斜め刷毛目→ヘラ磨き・ヘラ撫で	スス付着
	234	2号溝	甕				縦・斜め刷毛目→撫で	斜め刷毛目→撫で・指圧痕	スス付着
	235	2号溝	甕				粗い撫で 器面剥落	粗い撫で 器面剥落	スス付着
	236	2号溝	甕				縦・斜め刷毛目→撫で	横方向のヘラ削り	
	237	2号溝	甕?				縦刷毛目→縦ヘラ磨き	丁寧な撫で・底部に指圧痕	
	238	2号溝	甕?				縦・斜め刷毛目→不定方向の磨き	縦・斜め刷毛目→底部周辺は不定方向の削り・指圧痕	外面にスス付着 内底部に煮こげ痕
	239	2号溝	甕				斜め刷毛目→撫で	ヘラ撫で→底部に削り痕	
	240	2号溝	甕				縦刷毛目→縦ヘラ磨き	不定方向の粗い刷毛目	
	241	2号溝	甕				縦刷毛目→撫で	縦ヘラ磨き→撫で	外面にスス付着
52	242	2号溝	甕?				不定方向の刷毛目→縦ヘラ磨き	指圧痕→刷毛目→撫で	内外面にスス付着
	243	2号溝	甕?				ヘラ削り→縦刷毛目→ヘラ磨き	ヘラ削り→縦刷毛目→撫で	
	244	2号溝	甕				刷毛目→撫で	刷毛目→撫で・指圧痕	
	245	2号溝	甕				縦刷毛目→撫で	不定方向ヘラ削り→斜めヘラ磨き	内外面スス付着
	246	2号溝	甕				叩き→撫で	強い指撫で(指削り)	
	247	2号溝	甕				縦・斜め刷毛 器面剥落	指圧痕→斜め刷毛→撫で	
53	248	2号溝	甕				斜め刷毛→撫で	ヘラ削り→横刷毛目→不定方向のヘラ磨き	
	249	2号溝	甕				縦刷毛目→撫で	指圧痕→横刷毛目	
	250	2号溝	甕				細かい縦刷毛目→縦ヘラ磨き	細かい横刷毛目→撫で・指圧痕	
54	251	2号溝	甕				平行叩き→縦刷毛目	横・斜め刷毛目	
	252	2号溝	甕				平行叩き→縦刷毛目→縦ヘラ磨き	底部は縦ヘラ削り 胴部器面剥落	内面煮こげ痕
	253	2号溝	甕?	(18.1)			口縁撫で 胴部縦ヘラ磨き	口縁撫で 胴部は撫で・指圧痕	単口縁甕?
55	254	2号溝	甕	(25.6)			粗い縦刷毛目→突帯→刷毛目	粗い横刷毛目→横ヘラ磨き	
	255	2号溝	甕	(34.6)			口縁・胴部刷毛目→突帯貼付	口縁撫で・胴部は縦刷毛目	
	256	2号溝	甕	(29.8)			口縁斜め刷毛→横撫で・胴部撫で、突帯貼付	口縁斜め刷毛→横撫で・胴部撫で、突帯貼付	
	257	2号溝	甕	(34.0)			縦刷毛目→突帯貼付	横刷毛目→撫で	内外面丹塗り
56	258	2号溝	甕	(29.4)	25.9		口縁縦刷毛目→突帯貼付・胴部は縦刷毛目→剥落・磨滅	口縁縦刷毛目→撫で・胴部はヘラ削り→撫で→磨滅	
	259	2号溝	甕	(36.2)			口縁は縦刷毛目・胴部は斜め刷毛目→胴部に突帯貼付	口縁から胴部の全面に斜め刷毛目	
57	260	2号溝	甕				磨落が激しく器面調整不明	唇部に指圧痕・胴部は縦いヘラ磨き。磨落が激しい	外面にスス付着 内底部に煮こげ痕
58	261	2号溝	甕	21.2	31.8		口縁は斜め刷毛→胴部は縦・斜め刷毛目→胴部に突帯貼付	口縁は斜め刷毛→胴部上位は指圧痕→横・斜め刷毛目、下位は不定方向の刷毛目	内外面にスス付着
	262	2号溝	甕	19.3	36.0		口縁は縦刷毛目→撫で・胴部は縦刷毛目→撫で・胴部に突帯貼付	口縁は撫で→胴部は斜め刷毛目→指圧痕→不定方向のヘラ磨き	
59	263	2号溝	甕	26.0	26.2		口縁は斜め刷毛→撫で・胴部は縦・斜め刷毛→撫で	口縁は横撫で・胴部は斜め刷毛→撫で・不定方向のヘラ磨き	平底気味
	264	2号溝	甕	(26.0)	32.7		口縁は斜め刷毛→横撫で・胴部は縦・斜め刷毛	口縁は横刷毛→横撫で・胴部は縦・斜め刷毛	平底の底跡
60	265	2号溝	小甕	24.0	26.5		口縁は縦刷毛→撫で・胴部は縦・斜め刷毛→撫で・一部ヘラ磨き	口縁は横刷毛→横撫で・胴部は横・斜め刷毛・底部周辺は剥落	内外面スス付着
	266	2号溝	小甕				粗い斜め刷毛目→撫で	横削りのヘラ削り・指圧痕	
	267	2号溝	小甕	(11.6)			口縁は横撫で・胴部は指削り→指撫で・指圧痕	口縁は横撫で・胴部は指削り→指撫で・指圧痕	
	268	2号溝	小甕	11.6	13.5		口縁は横撫で・胴部は撫で	口縁は横刷毛→撫で・胴部はヘラ削り→撫で・指圧痕	
	269	2号溝	小甕	13.4	13.0		口縁は横撫で・胴部はヘラ撫で	口縁は横刷毛→撫で・胴部は撫で	外面にスス付着
	270	2号溝	小甕				縦・斜め方向の刷毛目	斜め・横方向の刷毛目	
	271	2号溝	小甕				胴部上位は縦、下位不定方向の刷毛	胴部上位は斜め刷毛、下位はヘラ撫で	
	272	2号溝	小甕	(16.0)			口縁は横撫で・胴部は縦刷毛→撫で	口縁は横刷毛→横撫で・胴部は横刷毛→撫で	外面にスス付着
61	273	2号溝	小甕	(19.0)	17.5		口縁は横撫で→胴部は粗い縦・斜め刷毛	口縁は横撫で・胴部は不定方向の刷毛目→斜め方向の削り	平底の名残あり 内外面スス付着
	274	2号溝	小甕	13.6	18.7		口縁は縦刷毛・胴部は上位縦、下位は不定方向の刷毛	口縁は斜め刷毛→横撫で・胴部上位は斜め、下位は横の刷毛目と撫で	胴部外面下位にスス付着
	275	2号溝	小甕	19.6	18.6		口縁は横撫で・胴部は不定方向の刷毛目→ヘラ磨き	口縁は横刷毛→横ヘラ磨き・胴部は横刷毛→不定方向のヘラ磨き	ほぼ完形品

第8表 北屋敷ツル遺跡 遺物観察表 一土器⑧

母体番号	遺物番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考
				口径	器高	底径	外面	内面	
62	276	2号溝	小型壺	8.6	11.2		口縁は縦刷毛→横撫で、胴部上位は縦刷毛→撫で、下位は横ヘラ削り→撫で	口縁は横撫で、胴部はヘラ撫で	口縁内面から外面全面丹塗り
	277	2号溝	小型壺				上位は撫で、下位は縦主体刷毛	上位に指圧痕、下位は斜め刷毛目	長頸壺の可能性
	278	2号溝	小型壺	(10.6)	14.7		口縁は縦ヘラ削り、胴部は縦刷毛→横ヘラ撫で、胴部上位は縦、下位は横刷毛→粗いヘラ磨き	口縁は斜めヘラ磨き、胴部は横・斜めの方向のヘラ削り	
	279	2号溝	小型壺	(11.6)	16.1		口縁は縦刷毛→横撫で、胴部は縦刷毛→ヘラ磨き	口縁は横撫で、胴部は撫で・指押さえ	全体的に磨滅
	280	2号溝	小型壺	13.2	15.0		口縁、胴部とも斜め刷毛目→横撫で	口縁は斜め刷毛目→横撫で、胴部は斜め・横方向のヘラ削り	定形品 口縁部が内湾
281	2号溝	長頸壺	13.0			斜め刷毛目→脚横流状文	指圧痕→口唇部から内側撫で		
282	2号溝	長頸壺				口縁は縦刷毛、胴部は斜め主体の刷毛→胴部と胴部中に突起貼付、肩部に浮文、底部に突起貼付、	口縁は撫で、胴部も撫で		
283	2号溝	長頸壺				肩部は縦、以下は斜め刷毛目→胴部と胴部に突起貼付、肩部に浮文、底部に突起貼付	指押さえ、不定方向の刷毛と削り→撫で		
284	2号溝	長頸壺	12.3	17.8		口縁は縦刷毛→撫で、頸部周辺ヘラ磨き、胴部は横刷毛→上位撫で、下位ヘラ磨き	口縁は縦刷毛→撫で、胴部は撫で・指圧痕	外面全面と口縁内面が丹塗り	
285	2号溝	長頸壺	11.2			口縁は斜め刷毛→縦ヘラ磨き、胴部は横刷毛→不定方向ヘラ磨き	口縁は縦刷毛→不定方向のヘラ磨き、胴部は撫で・指圧痕		
286	2号溝	長頸壺				上位縦刷毛、下位ヘラ削り→ヘラ磨き	頸部ヘラ削り、胴部上位は縦、下位は横の刷毛目	外面丹塗り	
287	2号溝	小型壺	7.0			全面ヘラ撫で	撫で・指押さえ痕		
288	2号溝	小型壺	(10.7)	9.5		口縁は横撫で、胴部上位は縦刷毛、下位はヘラ削り	口縁から胴部にかけて撫で		
289	2号溝	小型壺	6.9	9.8		口縁は撫で、胴部は丁寧な撫で	口縁は横撫で、胴部は不定方向の撫で		
290	2号溝	小型壺				縦・斜め刷毛目	撫で		
291	2号溝	小型壺				上位指押さえ、下位は縦ヘラ削り→撫で	上位指押さえ、下位は縦ヘラ削り→撫で	平底の名残	
292	2号溝	小型壺				上位は撫で、下位はヘラ削り	指撫で	外面上位丹塗り	
293	2号溝	小型壺				縦・斜め刷毛目	指による強い縦撫で	外面全面と口縁内面が丹塗り	
294	2号溝	小型壺				縦刷毛→上位撫で、下位丁寧な撫で	口縁は横刷毛、胴部上位は撫で・指押さえ、下位は横刷毛	胴部に焼成前穿孔	
295	2号溝	小型壺	11.1	5.9		口縁は横撫で、胴部はヘラ削り	全面撫で		
296	2号溝	小型壺	(11.8)			全面縦刷毛→縦ヘラ磨き	口縁は横刷毛→横ヘラ磨き、胴部は横ヘラ削り→斜めヘラ磨き		
297	2号溝	鉢				縦・斜め刷毛目→粗いヘラ磨き	横刷毛目→粗いヘラ磨き	内外面丹塗り	
298	2号溝	鉢	(17.0)	9.5		口縁部から胴部上位は撫で、底部周辺はヘラ削り	全面横刷毛目→底部は指押さえ		
299	2号溝	鉢	(19.0)			口縁は縦刷毛目→撫で、胴部は斜め刷毛目→不定方向ヘラ磨き	口縁は横ヘラ磨き、胴部は斜め刷毛→斜めヘラ磨き		
300	2号溝	鉢	(24.0)	12.9		口縁は斜め刷毛→撫で、胴部は縦・斜め刷毛→部分的にヘラ磨き	口縁は横刷毛→撫で、胴部は縦刷毛→不定方向のヘラ磨き		
301	2号溝	鉢	(27.2)			口縁は縦刷毛→横撫で、胴部は縦刷毛・ヘラ削り→ヘラ磨き	口縁は斜め刷毛目→ヘラ磨き、胴部は斜めヘラ削り→横ヘラ磨き		
302	2号溝	鉢	(37.0)			全面縦刷毛目→粗い横ヘラ磨き	口縁は横、胴部は縦の刷毛目→粗い横ヘラ磨き		
303	2号溝	高坏	(24.8)			坏部は縦刷毛→不定方向ヘラ磨き、脚部は縦刷毛目→縦ヘラ磨き	坏部は縦刷毛目→横ヘラ磨き、脚部は奥部絞り、端部は横撫で	坏部全面、脚部外面丹塗り	
304	2号溝	高坏	21.1	12.7	11.6	坏部は縦刷毛→上位は縦、下位は横のヘラ磨き、脚部は縦刷毛目→縦ヘラ磨き、脚端部は横ヘラ磨き	坏部は横刷毛→横ヘラ磨き、脚部は縦刷毛→脚端部は丁寧な撫で		
305	2号溝	高坏	23.4	14.5	14.2	坏部は横撫で→縦ヘラ磨き、脚部は上位が縦ヘラ削り→縦ヘラ磨き、下位は斜め刷毛目→撫で	坏部は横撫で→横ヘラ磨き、脚部は奥部絞り→横刷毛目、下位は斜め刷毛目		
306	2号溝	高坏	(20.9)	20.1	13.7	坏部口縁斜め刷毛目、体部は縦刷毛目→部分的にヘラ磨き、脚部は上位が縦、下位は斜めの刷毛目	坏部口縁は斜め刷毛目、体部は不定方向のヘラ磨き、脚部は撫で	焼成前穿孔6ヶ所	
307	2号溝	高坏	14.2			口縁部は横撫で、下位は横ヘラ削り→横ヘラ磨き	横撫で→横ヘラ磨き		
308	2号溝	高坏				縦刷毛目→横ヘラ磨き	上位は斜め、下位は横のヘラ磨き	内外面丹塗り	
309	2号溝	高坏				縦ヘラ磨き	縦ヘラ磨き	内外面丹塗り	

第9表 北屋敷ツル遺跡 遺物観察表 一土器⑨

押込 番号	遺物 番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考	
				口径	器高	底径	外面	内面		
67	310	2号溝	高坏					撫で・弱いヘラ磨き	坏底部は削磨、脚部は横ヘラ削り →撫で	
	311	2号溝	高坏					縦刷毛目	坏底は撫で、脚部は紋り・横撫で	
	312	2号溝	高坏					縦刷毛目→縦ヘラ研磨	横刷毛目→撫で	外面丹塗り
	313	2号溝	高坏					縦刷毛目→縦ヘラ磨き	底部は紋り、下位は横刷毛目	外面丹塗り
	314	2号溝	高坏			(9.0)		縦ヘラ磨き、脚端部は横刷毛が 残る	坏底はヘラ磨き、脚部は撫で	
	315	2号溝	高坏			137		上位は縦刷毛→縦ヘラ研磨、下位 は斜め・横刷毛→斜めヘラ研磨	横撫で→横ヘラ研磨	焼成前穿孔2対2ヶ所 外面と脚部奥まで丹 塗り
	316	2号溝	高坏			(12.6)		斜めヘラ削り・縦刷毛目→縦ヘラ 磨き	横刷毛目→横撫で	外面丹塗り
	317	2号溝	高坏					上位は縦ヘラ研磨、下位は縦刷 毛目→横ヘラ研磨	坏底部はヘラ磨き、脚部は撫で	坏部全面、脚部外面 丹塗り 焼成前穿孔は5ヶ所
	318	2号溝	高坏			(17.0)		縦刷毛目→縦ヘラ研磨、端部は 横撫で	横刷毛目→端部は横撫で	
	319	2号溝	高坏			11.5		縦ヘラ磨き	坏底部はヘラ磨き、脚部ヘラ撫で	
	320	2号溝	高坏			8.0		上位は横撫で、脚部は縦ヘラ研磨	斜め刷毛目→撫で	
	321	2号溝	器台?			(17.0)		撫で・ヘラ磨き	撫で	二段の焼成前穿孔
68	322	2号溝	脚付鉢					縦刷毛目→上位は横撫で	横撫で→下位は斜めヘラ磨き	内外面丹塗り
	323	2号溝	脚付鉢	(20.5)				斜め・縦刷毛目→縦ヘラ研磨	横撫で→上位は横、下位は縦の ヘラ研磨	
	324	2号溝	脚付鉢	(26.0)				口縁は斜め刷毛目、体部は横 ヘラ研磨	全面横ヘラ研磨	内外面丹塗り
	325	2号溝	脚付鉢	(24.2)				全面縦刷毛目→一部撫で・脚部 周辺ヘラ研磨	全面横刷毛目→一部撫で・坏底 部横ヘラ研磨	内外面丹塗り
	326	2号溝	脚付鉢	(19.6)				全面縦刷毛目で口縁端部周辺は 横ヘラ研磨	口縁は横刷毛目→横ヘラ研磨、体 部は縦刷毛目→縦ヘラ研磨	
	327	2号溝	脚付鉢	(17.0)				鉢部は縦刷毛目→一部撫で、脚 部は横撫で	口縁は横刷毛目、体部は斜め刷 毛目	
	328	2号溝	脚付鉢	(20.4)				口縁は横刷毛目→横撫で、体部 は斜めヘラ削り→上位は横、下位 は縦刷毛目→ヘラ研磨	口縁は横撫で→横ヘラ研磨、体部 は斜めヘラ削り→斜め刷毛目→横 ヘラ研磨	
	329	2号溝	脚付鉢	18.5	11.3	9.4		口縁は横撫で、体部は縦刷毛目 →一部撫で、脚部は横撫で	口縁から体部上位は斜め刷毛目、 鉢底部は撫で、脚部は縦刷毛目	
	330	2号溝	脚付鉢	22.0	16.3	9.0		縦方向主体の刷毛目→一部撫で	鉢部は横方向主体の刷毛目→ 一部ヘラ研磨、脚部は横撫で	
	331	2号溝	脚付鉢	(21.0)				縦刷毛目→撫で・ヘラ研磨	縦刷毛目→横ヘラ研磨・撫で	
	332	2号溝	脚付鉢	(22.8)	(15.5)	(13.2)		口縁端部は横、以下は縦主体の 刷毛目	口縁は横刷毛目、体部は撫で→ ヘラ研磨、脚部は撫で	
	333	2号溝	脚付鉢	9.5				撫で→弱いヘラ研磨	鉢部は撫で→ヘラ研磨、脚部は 撫で	
334	2号溝	脚付鉢	(9.2)				横方向のヘラ研磨	口縁は横撫で、体部上位は撫で・ 指任せ、下位は撫で→ヘラ削り	外面と口縁部内面 に丹塗り	
335	2号溝	脚付鉢					縦刷毛目→粗い縦ヘラ研磨	横刷毛目	外面丹塗り	
336	2号溝	脚付鉢					横刷毛目→横撫で	鉢部はヘラ磨き、脚部はヘラ撫で		
337	2号溝	脚付鉢					体部は縦ヘラ研磨、脚部は縦刷 毛目→縦ヘラ研磨	体部は縦・斜め刷毛目→縦ヘラ研 磨、脚部は横撫で	脚が折れる	
338	2号溝	脚付鉢					粗い斜め刷毛目	鉢部はヘラ磨き、脚部はヘラ撫で		
339	2号溝	脚付鉢			(12.2)		体部から脚部は横撫で	体部は縦ヘラ研磨、脚部は横撫で ・指任せ		
340	2号溝	脚付鉢					縦刷毛目→横撫で	鉢部はヘラ磨き、脚部は刷毛目→ 撫で	焼成前穿孔は未貫通 外面にスス付着	
341	2号溝	脚付鉢					ヘラ撫で	鉢底部はヘラ研磨、脚部は横ヘラ 削り・奥部は指任せ		
342	2号溝	脚付鉢			9.2		縦刷毛目→脚端部は横撫で	鉢底部は撫で、脚部は不定方向 の刷毛目	外面にスス付着	
343	2号溝	脚付鉢			10.0		体部から脚部は斜め刷毛目→ 指任せ	鉢部は縦刷毛目→縦ヘラ研磨、 脚部内面は刷毛目	脚は楕円形 内外面にスス付着	
344	2号溝	脚付鉢			11.7		横撫で	横撫で		
70	345	2号溝	坏	14.8	3.1			口縁は横撫で、胴部は削り・指押 さえ・撫で	口縁は横撫で、胴部は指任せえ→ 撫で	
	346	2号溝	坏	12.6	3.8			ヘラ撫で→撫で	横方向の刷毛目→撫で	
	347	2号溝	坏	12.2	3.6			横・斜め刷毛目→口唇部は撫で	撫で	
	348	2号溝	坏	(15.5)				斜め刷毛目→横撫で	撫で	
	349	2号溝	坏	(15.1)				撫で・斜め刷毛目→口唇部は撫で	撫で→上位は横、下位は縦の ヘラ磨き	

第10表 北屋敷ツル遺跡 遺物観察表 一 土器⑩

押込番号	遺物番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考
				口径	器高	底径	外面	内面	
70	350	2号溝	坏 (14.5)				横方向の刷毛目	撫で→一部へう磨き	
	351	2号溝	坏 (15.8)				横・斜め方向の刷毛目→撫で	撫で→縦・斜めのへう磨削	
	352	2号溝	坏 16.0	4.3			横へう削り→撫で・指押さえ	縦方向のへう磨き	
	353	2号溝	坏 (17.3)	6.1			横・斜め方向の刷毛目→撫で	横・斜め方向の刷毛目→へう磨削	
	354	2号溝	坏 (16.0)				横・斜め方向の刷毛目→横へう磨き、口縁は横撫で	口縁は横撫で、胴部は横へう磨削	
71	355	2号溝	埴 (10.2)	7.8			横・斜め刷毛→斜め方向のへう磨きで、口唇部は撫で	撫で→口縁は横、下位は縦のへう磨き	内外面丹塗り
	356	2号溝	埴 (12.8)				口縁横撫で、胴部は縦へう磨き	器面剥落のため不明	外面丹塗り
	357	2号溝	埴 13.6	9.3			へう磨き	撫で→へう磨き	内外面丹塗り 磨減
	358	2号溝	埴 12.1	6.4			口縁は横撫で、体部は不定方向のへう削り→中位は横撫で	上位に指圧痕、下位はへう削り→撫で	
	359	2号溝	埴 (13.8)				斜め刷毛→不定方向のへう磨き	斜め刷毛→縦方向のへう磨き	口縁内側と外面丹塗り
	360	2号溝	埴 13.0				口唇部は撫で、胴部は縦・斜め刷毛目	口縁は横撫で、胴部は斜め刷毛目→不定方向のへう磨削	
	361	2号溝	埴 13.7	8.7			口縁は撫で、胴部は縦・斜め刷毛目	口縁は横撫で、胴部は上位横、下位斜め刷毛目→不定方向のへう磨削	
	362	2号溝	埴 (16.6)				縦・斜め刷毛目→撫で	口縁は横撫で、胴部は縦・斜め刷毛目	
	363	2号溝	埴 (12.4)				口縁は横撫で、胴部は縦・斜め刷毛目、下位はへう削り	口縁と胴部上位は横撫で、下位は縦・斜めの刷毛目	
	364	2号溝	埴 10.3	11.9			口縁は横撫で、胴部は斜め刷毛目→縦へう磨削	口縁は横撫で、胴部は縦刷毛目→へう磨削	
365	2号溝	埴 13.8	11.0			口縁は横撫で、胴部は縦刷毛目→撫で	口縁は横撫で、胴部は斜め刷毛目→縦へう磨削		
366	2号溝	埴 (17.2)				口縁は横撫で、胴部は縦刷毛目	斜め刷毛目		
367	2号溝	埴 18.2	10.7			口縁は横撫で、胴部は横刷毛目→へう磨削	口縁は横撫で、胴部は横刷毛目→へう磨削		
368	2号溝	埴 (20.6)	12.7			口唇部は撫で、胴部は縦方向の刷毛目	不定方向の刷毛目→不定方向のへう磨削	内面底に丹溜まり丹入れ容器	
72	369	2号溝	瓶 13.6	15.4	2.6		指撫で・指圧→縦・斜め刷毛目	口縁は横撫で→縦刷毛目、下位は縦へう削り	内外面スス付着
	370	2号溝	瓶			1.9	へう削り→斜め刷毛目	へう削り→斜め刷毛目	
	371	2号溝	瓶			0.7	縦方向の刷毛目	横方向の刷毛目	
	372	2号溝	瓶			0.9	下位横へう磨削、上位は縦刷毛目	縦・斜め刷毛	外面スス付着
	373	2号溝	瓶			1.4	縦のへう削り→縦の刷毛目	縦・斜めへう削り→下位はへう磨き、上位は斜め刷毛目	
	374	2号溝	瓶			2.1	指押さえ→縦方向の刷毛目	下位は指押さえ、上位は斜め刷毛目	穿孔部から内側にスス付着
	375	2号溝	坏 2.4	1.5			指押さえ	指撫で	ミニチュア土器スス付着
	376	2号溝	坏 9.0	2.6			横撫で・指押さえ	横撫で	ミニチュア土器
	377	2号溝	坏 8.5	2.9			横撫で・指押さえ	横撫で	ミニチュア土器
	378	2号溝	坏 (8.6)				指押さえ・撫で	斜め刷毛目→横撫で	ミニチュア土器
	379	2号溝	坏 4.4	3.2			横撫で・指押さえ	横撫で・指押さえ	ミニチュア土器
	380	2号溝	坏 (6.4)				強い縦方向の指撫で	撫で	ミニチュア土器
	381	2号溝	坏 6.4	4.1			斜め刷毛→指押さえ	へう撫で	ミニチュア土器
382	2号溝	坏				口縁は横撫で、下位は撫で・指押さえ	口縁は横撫で、下位はへう磨き→へう削り	ミニチュア土器	
383	2号溝	坏				横撫で・指押さえ	横刷毛目→一部撫で	ミニチュア土器	
384	2号溝	小型壺				へう撫で・指撫で	撫で	ミニチュア土器	
385	2号溝	鉢 8.0	4.7	2.3		口縁は横撫で、下位は撫で	口縁は横撫で、下位は不定方向の刷毛目	ミニチュア土器	
386	2号溝	壺 7.0	7.4			口縁は横撫で、胴部は指押さえ	口縁は横撫で、胴部は横刷毛目・指押さえ	ミニチュア土器内外面丹塗り	
387	2号溝	壺 4.0	6.7			口縁は横撫で、胴部は指押さえ	口縁は横撫で、胴部は指押さえ	ミニチュア土器	
388	2号溝	壺				頸部は縦刷毛→撫で、胴部は丁字壺撫で	撫で	ミニチュア土器	
389	2号溝	壺 (6.7)				指撫で・突帯下位に連続指圧痕	強い指押さえ・撫で	ミニチュア土器	
390	2号溝					撫で	強い指押さえ	ミニチュア土器	
391	2号溝	脚付鉢 (8.1)	(5.6)	6.5		体部は指撫で、脚部は斜め刷毛	指撫で	脚部周辺スス付着	
392	2号溝	小鉢				横刷毛目→縦へう磨削	縦へう磨き	内面底に丹溜まり丹入れ容器	
393	2号溝	製塩				体部平行引き、脚部は指押さえ	体部は斜め刷毛、脚部は撫で	製塩土器	

第11表 北屋敷ツル遺跡 遺物観察表 一 土器①

探区 番号	遺物 番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考
				口径	器高	底径	外面	内面	
75	405	D-28	壺	(12.6)			斜め刷毛→櫛流状文	斜め刷毛目	
	406	D-11	壺	(23.7)			櫛流状文→丹塗り	横・斜め刷毛目→丹塗り	内外面丹塗り
	407	A-11 2号溝	壺	(25.0)			口縁は櫛流状文、胴部から胴部は縦の刷毛目→縦のヘラ磨き→胴部と胴部に突帯と浮文→胴部突帯に綾杉状の刷毛目	口縁は指押さえ→横のヘラ磨き、胴部は斜め刷毛目→横のヘラ磨き、胴部は上位は横、下位は縦の刷毛目→粗いヘラ磨き	外面丹塗り
	408	G-33~35	壺				上位が縦・斜め、下位は縦の刷毛目→縦の粗いヘラ磨き	撫で→上位は横、下位は縦のヘラ磨き	
	409	G-33~35	壺				縦・斜めの刷毛目→撫で	下位斜めヘラ磨り→斜め刷毛目	
76	410	D-10	甕	(19.4)			横撫で	横ヘラ磨き	
	411	C-き	甕	(15.0)			口縁は横撫で、胴部は斜めの刷毛目→撫で	口縁は横撫で、胴部は斜めの刷毛目	
	412	A-2	甕	(14.8)			口縁は横撫で、肩部は横方向の弱い磨き、胴部は縦の刷毛目→指押さえ・撫で	口縁は斜め刷毛→横撫で、胴部は縦・斜めの刷毛→撫で	外面スス付着
	413	D-11	甕	(19.1)			口縁は縦の刷毛→横撫で、胴部は縦・斜めの粗い刷毛目	口縁は横の刷毛→横のヘラ磨き、胴部は上位が横、下位は縦の刷毛目→粗いヘラ磨き	
	414	D-11	甕				斜め・縦の刷毛→撫で	上位は斜め、下位は横の刷毛→撫で	外面スス付着
77	415	谷部水田	甕			2.6	縦の刷毛目	ヘラ撫で	内外面スス付着
	416	G-34	鉢	(12.4)			縦の刷毛目→口縁は横撫で	口縁は斜めの刷毛目、胴部は不定方1向のヘラ撫で	
	417	G-33	鉢	(14.0)			縦の刷毛目→口縁は横撫で	口縁は斜めの刷毛目→横撫で、胴部は縦の刷毛目→撫で	
	418	C-6・7	鉢	(17.8)			口縁は横のヘラ磨き、胴部は縦・斜めの刷毛目	口縁は横のヘラ磨き、胴部は横の刷毛目→横のヘラ磨き	
	419	G-34	器台?	(27.5)			口縁端部に櫛流状文→円形浮文、胴部は横のヘラ磨き	横のヘラ磨き	内外面丹塗り
77	420	表土	高坏	17.6			横撫で	横撫で	
	421	D-10	鉢	(22.0)			沈線3本→斜めの刷毛目	横の刷毛目→斜めの刷毛	
	422	O-10	鉢	(27.6)			斜めの刷毛目→口縁は横撫で	口縁は斜め刷毛→横の刷毛、下位は縦の刷毛→縦のヘラ磨き	
	423	O-10	鉢	(23.0)			口縁は横撫で、胴部は不定方向の刷毛→撫で	口縁は斜めの刷毛目、下位は縦、底は横の刷毛目→一部撫で	外面にスス付着
	424	J-46	坏	4.8	3.3		指押さえ・指撫で	指押さえ・指撫で	ミニチュア土器 外面にスス付着
	425	D-10	碗	9.6	4.0		撫で・指押さえ	撫で・指押さえ	
	429	一括	坏	(11.2)	3.0	(6.4)	横撫で・未切り底	横撫で	中世

第12表 石風呂遺跡 遺物観察表 一 土器一

探区 番号	遺物 番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考
				口径	器高	底径	外面	内面	
86	1	土坑	脚付鉢	(22.6)	18.1	(14.8)	口縁は横撫で→横のヘラ磨き、体部は磨り→縦刷毛目→縦ヘラ磨き、脚部は縦の刷毛→縦ヘラ磨き	口縁は横撫で→横のヘラ磨き、体部は撫で→縦ヘラ磨き、脚部は撫で→縦ヘラ磨き	
	2	1号薬箱	甕	(39.4)	32.2		口縁は横撫で、胴部は縦の刷毛目→撫で→胴部に突帯	口縁は横撫で、胴部は斜めの刷毛目→上位は縦、下位は横のヘラ磨き	
88	3	1号薬箱	壺				胴部は縦・斜めの刷毛目→肩部は横、胴部は斜めの粗いヘラ磨き→胴部に突帯・刷毛目	縦・斜めの刷毛目→撫で	
	4	一括	壺	(14.7)			口縁は櫛流状文、胴部から胴部は縦刷毛目→粗いヘラ磨き	口縁部は斜め刷毛目→横撫で、胴部は横撫で、胴部は横のヘラ撫で	
89	5	大型整穴	鉢	(25.2)			口縁は横撫で、胴部は縦・斜めの刷毛目→撫で→突帯	口縁は横撫で、胴部は撫で→不定方向のヘラ磨き	

第13表 由布川小学校遺跡 遺物観察一覧表 一土器・陶磁器一

押込番号	遺物番号	出土地区 出土遺構	器種	法量(cm)			器面調整		備考
				口径	器高	底径	外面	内面	
93	1	I区	壺 (18.6)				3段の櫛溝波状文 縦溝と点の丹塗り	横撫で・指圧痕・刷毛目	
	2	I区	壺 (14.6)				2段の櫛溝波状文・頸部は刷毛	刷毛目→撫で・指圧痕	
	3	I区	壺 (14.4)				雑な櫛溝波状文・頸部は刷毛	刷毛目→撫で・指圧痕	
	4	I区	壺 (15.0)				3段の櫛溝波状文・頸部は刷毛	横撫で・指圧痕	
94	5	I区	壺 (14.4)				3段の櫛溝波状文・頸部は横撫で・胴部は縦方向の刷毛目	口縁部と頸部は横撫でで、胴部は横や斜め方向の刷毛目	
	6	I区	壺 (29.4)	24.7			縦の刷毛→撫で・ヘラ磨き	横の刷毛→縦ヘラ研磨	頸部突帯は後付け
	7	I区	脚付鉢 (27.2)				縦刷毛→縦ヘラ磨き	横刷毛→縦ヘラ磨き	全面丹塗り
	8	I区	脚付鉢 (19.6)	13.9	(12.6)		横撫で→縦ヘラ研磨	横撫で→縦ヘラ研磨	
	9	I区	脚付鉢			(13.6)	横撫で→縦ヘラ研磨・丹塗り	横撫で	7と同一個体?
	10	I区	小型壺 (11.8)				横と縦方向のヘラ研磨・丹塗り	縦刷毛→撫で・ヘラ研磨	
	11	I区	鉢 (11.8)	11.1			横撫で→縦ヘラ研磨・丹塗り	横撫で→縦ヘラ研磨	
	12	I区	鉢 (7.2)	5.0			撫で・指圧痕	撫で・指圧痕	手捏ね
	13	I区	鉢 (27.2)	10.0			ヘラ削り→横撫で	ヘラ工具の撫で	外面スス付着
	104	15	II区	碗		5.0		高台内側は露胎	見込に文様
16		II区	皿		5.1		輪軸	見込中央と高台内側は露胎	龍泉窯系青磁
17		II区	碗				染付文様	口縁部に圈線	近世染付?
18		II区	皿		(3.8)		染付文様 養付に砂目	見込に文様	赤苜蓿
19		II区	皿						乳白色の白磁
20		II区	皿		8.6		養付は露胎		白磁
21		II区	襷鉢 (32.4)				ロクロによる横撫で	ロクロによる横撫で 襷り目	備前焼
25		III区	壺 (17.4)				縦の刷毛目→部分的撫で	横・斜め方向の撫で	
26		III区	壺 (17.4)	13.8			ヘラ工具の撫で	ヘラ工具の撫で	
106	27	III区	鉢 (19.8)	9.7			縦の刷毛目→口縁・底部は撫で	丁寧な撫で 底に指圧痕	
	28	III区	鉢 18.0	12.9			ヘラ削り→撫で	指圧痕 縦刷毛目→撫で	
	29	III区	壺				斜めの刷毛目→撫で	斜めの刷毛目→撫で・指圧痕	
	30	III区	瓶 (16.2)	15.8	3.2		縦の刷毛目→口縁は撫で	縦の刷毛目→口縁は撫で	胴部下位はスス付着
	31	III区	襷鉢 (20.6)				口縁部は透明釉	撫で 襷り目	製作地不明
	35	IV区1号住	壺 17.9	36.2	3.7		縦の刷毛目→撫で	横の刷毛目→撫で	平底の名残あり
	108	36	IV区1号住	壺 23.2	46.7	1.9		粗い縦刷毛目→横撫で	口縁縦、胴部上位斜めの刷毛目→撫で→底部周辺ヘラ研磨
37		IV区1号住	瓶 (16.5)	19.1	3.0		斜めの刷毛目→撫で	斜めの刷毛目→撫で 指圧痕	穿孔径20cm
38		IV区2号住	脚付鉢 24.6				撫で→丹塗り→縦研磨→横研磨	撫で→丹塗り→縦研磨→横研磨	丹塗り研磨
109	39	IV区2号住	鉢				縦の刷毛→撫で前穿孔	削り→粗いヘラ磨き	釣鐘状 穿孔径4mm
	43	IV区4号住	壺 (19.2)				縦の粗い刷毛目→口縁は横撫で	横刷毛目・横撫で・指圧痕	スス付着
110	44	IV区4号住	脚 (18.8)				縦の刷毛目	縦のヘラ削り→撫で	
	48	IV区5号住	壺 34.4				撫で・指圧痕	撫で・指圧痕	
111	49	IV区9号住	壺				縦の刷毛目→撫で 胴部丹塗り	横の刷毛目→撫で 内面丹塗り	丹入れの壺
	50	IV区壱六38		4.8			縦のヘラ磨き・削り→撫で	指押さえ 撫で	スス部着
112	51	IV区壱六42	壺 (13.4)				口縁2段の櫛溝波状文	刷毛目→撫で	
	53	IV区 壺棺	壺				縦の刷毛目→頸部に突帯と浮文8ヶ所、胴部に三条の断面三角形の突帯	横・斜めの刷毛目→撫で	
115	54	IV区 壺棺	壺 32.8	33.6	7.2		粗い縦の刷毛目→口縁部撫で	横・斜めの強い指撫で	
	55	IV区 壺棺	壺		2.8		縦の刷毛目→胴部に三条の断面三角形の突帯	刷毛目・強い撫で・指圧痕・ヘラ状工具の撫で	53と同一個体
116	56	IV区	壺 (16.4)				口縁部2段の櫛溝波状文	指押さえ痕	
	57	IV区	壺				刷毛目→撫で→胴部突帯(爪み痕)	横刷毛目→横撫で	
	58	IV区	壺	2.2			刷毛目→縦のヘラ磨き	刷毛目→ヘラ状工具の撫で	平底の名残あり
	59	IV区	壺	3.2			撫で・指押さえ	撫で・指押さえ	手捏ね
	61	IV区	坏 (12.8)	3.1	8.8		横撫で・底部回転糸切り底	横撫で	中世

第14表 北屋敷ツル遺跡 遺物観察一覧表 (石器・鉄器・その他)

探区番号	遺物番号	出土地区 出土遺構	器種	法量 (cm)			重量 (g)	材質	備考
				長さ	幅	厚さ			
8	31	2号住居	砥石			14	泥岩		
	32	2号住居	台石	199	179	66	3900.0	安山岩	表面に敲打痕と磨滅面
11	42	3号住居	磨石	4.4	4.0	1.0	27.8	安山岩	両面に使用痕
73	394	2号溝	磨器	2.8	7.4	0.7	85.5	サヌカイト	自然面あり。打面の反対側の側縁に二次加工
	395	2号溝	砥石	11.7+	6.7	6.1	259.1	泥岩	
	396	2号溝	輪削口			1.9			復元外径8.3cm
	397	2号溝	磨石	7.1+	10.0	6.7	633.1	安山岩	使用痕は一面
	398	2号溝	磨石	9.1	6.5	6.4	735.1	安山岩	多面に使用痕
	399	2号溝	磨石	9.2	8.8	6.6	918.6	安山岩	片面と裏面の一部に擦過痕
	400	2号溝	叩石	9.8	9.4	8.9	1093.2	安山岩	使用痕は一面
	401	2号溝	磨石	10.5	8.5	8.0	947.7	安山岩	一面に擦過痕と敲打痕
	402	2号溝	磨石	10.2	9.4	7.2	1010.9	安山岩	一面に擦過痕
	403	2号溝	叩石	10.7	9.9	6.9	933.1	安山岩	両面に敲打痕
77	404	2号溝	石皿	33.3	19.5	6.6	8000.0	安山岩	被熱して一部が剥離
	426	F-2G	磨石	12.0	10.0	4.8	829.8	安山岩	両面に擦過痕、側面に敲打痕
	427	H-30	磨石	6.3	6.3	4.8	140.4	安山岩	一面に擦過痕と敲打痕
	428	B-9	砥石	6.7	7.1	1.8	55.3	輝石	刃先を削いだような溝状の痕跡
	430	S X 3S	渡米銭	2.4	2.4	0.1		青銅	兩元通貨
			2.4	2.4	0.1		青銅	皇宋通貨	
						19.8	青銅	7枚が摺銭状	
78	431	S X 11	接器	6.5	3.9	1.5	56.3	流紋岩	旧石器時代の石器
	432	2号住居	石皿	1.4	1.5	0.3	0.5	都島産黒曜石	
	433	B-4	石皿	1.8+	1.5+	0.5	0.7	都島産黒曜石	
	434	一括	石皿	2.0+	1.8+	0.4	1.2	都島産黒曜石	
	435	集石上面	砥石	8.0+	3.5+	2.6	215.8	頁岩	粗砥石

第15表 石風呂遺跡 遺物観察一覧表 (石器)

探区番号	遺物番号	出土地区 出土遺構	器種	法量 (cm)			重量 (g)	材質	備考
				長さ	幅	厚さ			
90	6	一括	石皿	28.3	33.0	10.4	1360.0	安山岩	両面に使用痕跡

第16表 由布川小学校遺跡 遺物観察一覧表 (石器・鉄器・その他)

探区番号	遺物番号	出土地区 出土遺構	器種	法量 (cm)			重量 (g)	材質	備考
				長さ	幅	厚さ			
100	14	I区	磨石	11.1	8.5	6.2	727.6	安山岩	両面使用で長軸の両端に敲打痕
104	22	II区	襖臼	(18.4)	(18.4)			硬質凝灰岩	上臼 軸穴径2.2cm
	23	II区	刀子		1.5			鉄	
	24	II区	鉄釘					鉄	長さ6.6cm以上
106	51	III区	鉄鏃	10.6+	3.8	0.3	25.8+	鉄	
107	33	III区	磨石	10.5	8.5	5.1	609.6	安山岩	磨石・叩石として使用 使用痕あり
	34	III区	砥石	6.6+	9.6	3.9	360.8+	砂岩	半分?欠損
109	40	IV区2号住	叩石	9.8	9.2	4.9	636.1	安山岩	磨石としても使用
	41	IV区2号住	磨石	10.5	10.0	6.9	913.0	安山岩	叩石としても使用
	42	IV区2号住	鉄鏃		1.6			鉄	柳葉形
110	45	IV区4号住	鉄鏃	3.3+	1.8	0.3	4.2+	鉄	茎部欠損
	46	IV区4号住	鉄鏃	6.6+	1.4	0.4	8.7+	鉄	鏃身先端のみ
	47	IV区4号住	手鎌	4.3+	1.7	0.2	6.0+	鉄	半分欠損
112	52	IV区壱六五	手鎌	3.8+	2.4	0.1	6.9+	鉄	半分欠損
	60	IV区	玉		2.2	2.2		土製品	土製勾玉の頭部 丹塗り
	62	IV区1号住	鉄鏃	5.7+	1.5	0.4		鉄	
	63	IV区4号住	鉄鏃	6.6+	1.8	0.4		鉄	
116	64	IV区4号住	鉄鏃	8.7+	1.8	0.3		鉄	茎に桜皮巻き
	65	IV区	石皿	1.4	1.4	0.4	0.6	都島産黒曜石	
	66	IV区	石皿	2.5+	1.7+	0.2	0.7+	サヌカイト	
	67	IV区	石皿	8.6	4.8	1.2	45.3	サヌカイト	

北屋敷ツル遺跡 遺構1



北屋敷ツル遺跡 1号住居

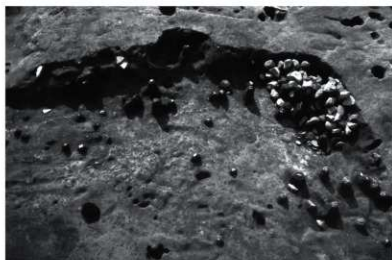


北屋敷ツル遺跡 2号住居

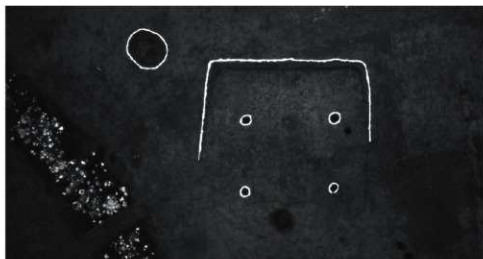


北屋敷ツル遺跡 3号住居

北屋敷ツル遺跡 遺構2



北屋敷ツル遺跡 1号住居



北屋敷ツル遺跡 5号住居と2号溝



北屋敷ツル遺跡 6号住居

北屋敷ツル遺跡 遺構3



北屋敷ツル遺跡 2号溝調査状況



北屋敷ツル遺跡 2号溝完掘状況



北屋敷ツル遺跡 2号溝土層断面

北屋敷ツル遺跡 出土土器 1



1号住居 23



5号住居 50



2号溝 107



2号溝 108



2号溝 110



2号溝 133

北屋敷ツル遺跡 出土土器2



2号溝 138



2号溝 161



2号溝216



2号溝 217



2号溝 218



2号溝 222

北屋敷ツル遺跡 出土土器 3



2号溝 261



2号溝 263



2号溝 273



2号溝 276



2号溝 280



2号溝 282



2号溝 283

北屋敷ツル遺跡 出土土器4



2号溝 289



2号溝 294



2号溝 295



2号溝 298



2号溝 346



2号溝 358



2号溝 304



2号溝 305



2号溝 369



2号溝 388

2号溝 379

石風呂遺跡遺構と遺物



石風呂遺跡 調査状況



石風呂遺跡 甕棺墓出土状況



上甕 2



下甕 3

由布川小学校遺跡 遺構1



由布川小学校遺跡 II区



由布川小学校遺跡 II区の建物遺構と溝



由布川小学校遺跡 III区全景

由布川小学校遺跡 遺構2



由布川小学校遺跡 IV区



由布川小学校遺跡 IV区住居跡調査状況



由布川小学校 IV区住居跡完掘状況

由布川小学校遺跡 甕棺墓



小児用甕棺出土状況



上甕 54



下甕 53



下甕 55

由布川小学校遺跡 出土遺物



1号住 35



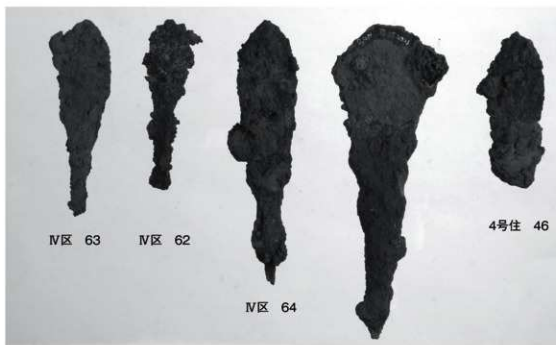
1号住 36



竪穴50 52



4号住 47



Ⅳ区 63

Ⅳ区 62

Ⅳ区 64

4号住 46

Ⅲ区 32

報告書抄録

ふりがな	きたやしきいせき・いしふるいせき・ゆふがわしようがっこういせき		
書名	北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡		
副書名	県道小快間大分線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
巻次	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書		
シリーズ名	第75集		
編著者名	坂本嘉弘		
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター		
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田1977 TEL 097-597-5675		
発行年月日	2014年3月31日		

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		緯度・経度		調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡	北緯	東経			
北屋敷ツル遺跡	大分県由布市快間町 古野字北屋敷ツル	213	35	33°12'32"	131°31'33"	平成7年10月16日 ～ 平成8年3月1日	4,600	県道改良 工事
石風呂遺跡	大分県由布市快間町 古野字石風呂	213	34	33°12'32"	131°31'19"	平成7年5月11日 ～ 平成7年10月13日	2,100	県道改良 工事
由布川小学校遺跡	大分県由布市快間町 古野字中ノ原・水ヶ津留	213	29	33°12'32"	131°31'41"	平成6年8月1日 ～ 平成7年5月2日	3,300	県道改良 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北屋敷ツル遺跡	集落	縄文時代 弥生～古墳時代	V字溝 住居跡	縄文土器 古墳時代初頭の 多量の土器	集落を区切るV字溝と廃棄された大量の多様な土器
石風呂遺跡	集落	弥生～古墳時代	住居跡 小児甕棺	古墳時代初頭の 小児用甕棺	北屋敷ツル遺跡に続く集落
由布川小学校遺跡	集落	弥生時代 中世	住居跡 小児甕棺 掘立柱建物	弥生土器 鉄器(摘具・鏝) 備前焼滑鉢・ 中国銭	周辺の低地を耕作地とした弥生集落 方形の溝で囲まれた中の掘立柱建物で構成される中世建物

所収遺跡名	要約
北屋敷ツル遺跡	遺跡は標高約110mの洪積性台地上の南縁にあり、台地の中央部は浸食した浅い谷があり、現在は水田化されている。発掘調査はこの集落の北側の一部分を明らかにしたもので、時期は古墳時代初頭から前葉である。また集落は方形住居で構成され、集落の西側外縁部には断面V字の溝が確認された。この溝からは集落が継続されていた時期の土器が多量に廃棄された状態で出土した。この土器群は在地系や外来系の壺形土器や甕形土器・高杯形土器を中心に、脚付鉢・椀・皿・甌・ミニチュア土器・製塩土器などが含まれ、当時の人々の生活の一端を垣間見ることができ、また、一括性の強い土器群であることから、この地域の土器編年を考える上で、重要な資料となる。
石風呂遺跡	遺跡は北屋敷ツル遺跡の西側に隣接している。字名が異なるため、別遺跡として報告しているが、本来は同一または関係の非常に深い集落であることが想定できる。発掘資料から時期は、弥生時代終末から古墳時代前葉と考えられる。集落は方形住居で構成され、集落内からは小児用甕棺が1基検出された。
由布川小学校遺跡	遺跡は標高約110mの洪積性台地の中央部に位置し、北側と南側を現在は水田化した浅い谷が東西方向に割み、遺跡の東側で合流する。このため、遺跡は東西に細長い形状となり、中心部となる東部には遺跡名の由来となる由布川小学校がある。発掘調査はこの南側低地部(I区・II区)から西側の高地部(III区・IV区)にかけて実施した。 その結果、II区では方形の溝に囲まれた中世の掘立柱建物群を検出した。また、IV区では弥生時代後期の円形・方形の住居跡を検出し、中から鉄製の取巻具や鉄鍬が出土した。このことから、洪積性台地上であるが、台地上の窪地や周辺の谷などで穀物栽培が行われていたことが想定できる。また、鉄鍬の存在も、埴類だけでなく周辺集落との緊張関係も想像することができる。この他、集落内から小児用甕棺が1基検出されている。

北屋敷ツル遺跡・石風呂遺跡・由布川小学校遺跡

県道小挾間大分線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第75集

平成26年3月31日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113 大分市大字中判田1997番地
TEL.(097)597-5675

印刷 勉強堂美術精版社
〒876-0832 大分県佐伯市船頭町2-52
TEL.(0972)22-1324
